工1365　330-12

東海道名所圖會下册

目次

卷之四

秋葉寺　一
同寺什物　一
秋葉山道　六
七瀧　七
京丸　七
掛川　八
名産葛布　八
已等乃麻知神社　一〇
日坂　一〇
佐夜中山　一〇
夜泣石　一四
子育觀音　一五
四郡橋　一五
菊川　一六
菊阪　二〇
牧原　二〇
鹿防原古城　二〇
初倉山　二〇
淡嶽　二〇
阿波波神社　二〇
菩提樹院　二〇
用宗古城　二一
紫山　二一
安部川　二一
駿府　二六
阿陪市　二七
賤機山　二八
淺間社　二八
圓山　二八
別當社　二八
清水　二九
名産阿陪茶　二九
足久保觀音　二九
麻機山　三〇
燒津神社　三〇
草薙神社　三一
梶原景時墳　三六
姥ヶ池　三六
布度濱　三六
久能山　三八
久能寺　三八
同寺什物　三九
三保松原　三九
御穗神社　三九
相生松　四〇
羽衣松　四〇
江尻　四一
湯名川　四一
庵原　四一
盧崎　四一
角田川　四二
清見關　四二
淨見ヶ崎　四二
清見川　四二
清見浦　四三
清見潟　四三
巨鼇山清見寺　四三
清見寺十境　四三
興津　四三
身延山道　四六
興津川　四七
古奴美濱　四八
岫崎　四九
釉師浦　四九
磐城山　五二
薩陸嶺　五二
名産榮螺鮑　五六
豐積神社　五七
由井　五七

明治
43. 6. 15
交付

蒲原古城　七四
蒲原　七五
宮士川　七五
同水為古蹟　七八
曾我兄弟発倉　八一
古家川　八二
淺間神社　八三

卷之五

吉原　一
宮士山　一
宮士鳴澤　一
田子浦　一五
宮士沼　一六
左宮士　一七
元吉原　一八
手兒呼坂　一八
要石　一八
芝瀬川　一八
原　一八
白隱禪師蹟　一九
師岡追山　二〇
興國寺古城　二一
阿野禪師古蹟　二一
古々非社　二二
與小島　二二
富士見平　二二
山中古城　二二
豆相兩國堺　二三
風越嶺　二三
箱根　二四
箱根湖水　二四
箱根山東福寺　二五
箱根權現社　二五
箱根名所四十九所　二八
箱根溫泉　二八
箱根山溫泉能　二八
名物挽物細工　二九
金湯山早雲寺　二九
早溪　三〇
長興山淨泰寺　三〇
豐太閤御陣所　三一
石橋山　三一
小田原　三一
小田原北條　三一
酒匂川　三二
小餘綾磯　三二
鳴立澤　三七
大磯　三七
三社權現　三七
花水橋　三八
平塚　三八
馬入川　三八
十間坂　三八
雨降山大山寺　三八
石尊大權現　三八

卷之六

江島辨財天女社　三九
窟本宮　四六
本宮御旅所　四七
上之宮神殿　四八
下之宮神殿　四九
見ヶ淵　五一
江島名產　五二
岩本院寶物　五三
龍口神祠　五三
龍口寺　五三
長者塚　五三
岡湘川　五四
西行頼松　五四
唐原　五五
砥上原　五六
秋浦　五七
七里濱　六一

小動　一八
行合川　一九
稻村崎　一九
袖の浦　二〇
阿佛尼第蹟　二一
極樂寺　二一
辨慶腰掛松　二一
極樂寺切通　二一
鎌倉　二一
鶴岡八幡宮　二二
頼朝館趾　二二
法華堂　二三
頼朝卿墓　二三
島津忠久墓　二三
烏合原　二三
鎌倉十橋　二三
畠山重忠第　二三
蛇谷　二三
荏柄天神　二三
大樂寺　二六
鎌倉十井　二六
大塔宮地牢　二六
二階堂　二六
獅子巖　二八
瑞泉寺　二八
天台山　二八
文覺屋敷　二九
大御堂谷　二九
釋迦堂谷　三〇
唐糸姫土牢　三一
杉本觀音　三一
滑川　三一
淨妙寺　三一
尊氏第蹟　三一
五大堂　三二
巨福山建長寺　三三
聚明寺舊跡　三三
瑞鹿山圓覺寺　三三
東慶寺　三三
長壽寺　三三
常樂寺　三三
木曾塚　三三
松源寺地藏尊　三三
寫不動尊　三六
壽福寺　三六
實朝塔　三六
東光山英勝寺　三六
阿佛尼塔　三八
源氏山　三八
綱引地藏　三八
矢拾地藏　三八
藤原爲相塔　三八
海藏寺　三九
十六井　三九
景清窟　三九
假粧坂　三九
鍛冶正宗宅　三九
巡慶宅　四〇
巽荒神　四〇
人丸姫塚　四〇
尊氏第趾　四〇
典禪寺　四四
佐介稻荷祠　四五
隧里　四八
鏡洗水　四八
天狗堂　四八
千葉常胤宅　四八
佐々目谷　四九
塔辻　四九
盛久頸座　四九
甘繩祠　四九
藤九郎盛長家　四九
水無瀨川　五〇
光明寺　五〇
大佛　五〇
御輿嶽　五〇
常盤里　五〇
長谷寺　五〇
御霊社　五四
星月夜井　五四
寶戒寺　五四
北條屋敷　五五
土佐坊第趾　五五
葛西谷　五五
屏風山　五五
小富士　五六
塔辻　五六
行池　五六
產女塔　五六
妙本寺　五六
比企判官古趾　五六
田代觀音　五六
裸地藏　五六
補陀落寺　五六
天照山光明寺　五七
六角井　五七
小壺鄕浦　六〇
新居關蹟　六〇
鎌倉漁村　六〇
守殿明神　六〇

鼎招山　六〇
六代御前墓　六〇
神器　六一
御猿島山　六一
日蓮水　六一
安國寺　六一
佐竹屋敷　六一
梶原第　六一
頼機彌陀　六二
梶原太刀洗水　六二
朝比奈切通　六二
侍從川　六二
六浦川　六二
金澤院　六二
瀬戸明神　六二
瀬戸の辨天　六二
瀬戸橋　六三
照手松　六三
金澤　六三
兼好墓蹟　六三
金澤山稱名寺　六三
金澤文庫古蹟　六三
能見堂　六三
捨錐松　六六
藤澤　六七
藤澤寺　六七
小栗堂　七〇
戸塚　七六
武相國堺　七六
程ヶ谷　七六
芝生村窟　七六
神奈川　七六
川崎　七六
大師河原平間寺　七七
玉川　七七
矢口渡口　七八
新田明神祠　七八
玉川辨天堂　八〇
八幡宮　八〇
大森　八〇
長榮山本門寺　八〇
荒間崎　八一
名産荒間海苔　八二
鈴森八幡宮　八二
品川　八三
水月觀音　八三
海晏寺　九〇
東海寺　九〇
御殿山　九〇
八山　九〇
芝大佛　九〇
泉岳寺　九一
三田八幡宮　九四
魚籃觀音　九四
四緣寺　九四
道灌城蹟　九四
熊谷城山　九四
雜魚場　九四
舍海山　九四
長南崎　九四
三綠山增上寺　九四
飯倉神明宮　一〇〇
愛宕權現　一〇〇
築地御堂　一〇一
日本橋　一〇一

東海道名所圖會下冊目次大尾

東海道名所圖會卷之四

秋里籬島編

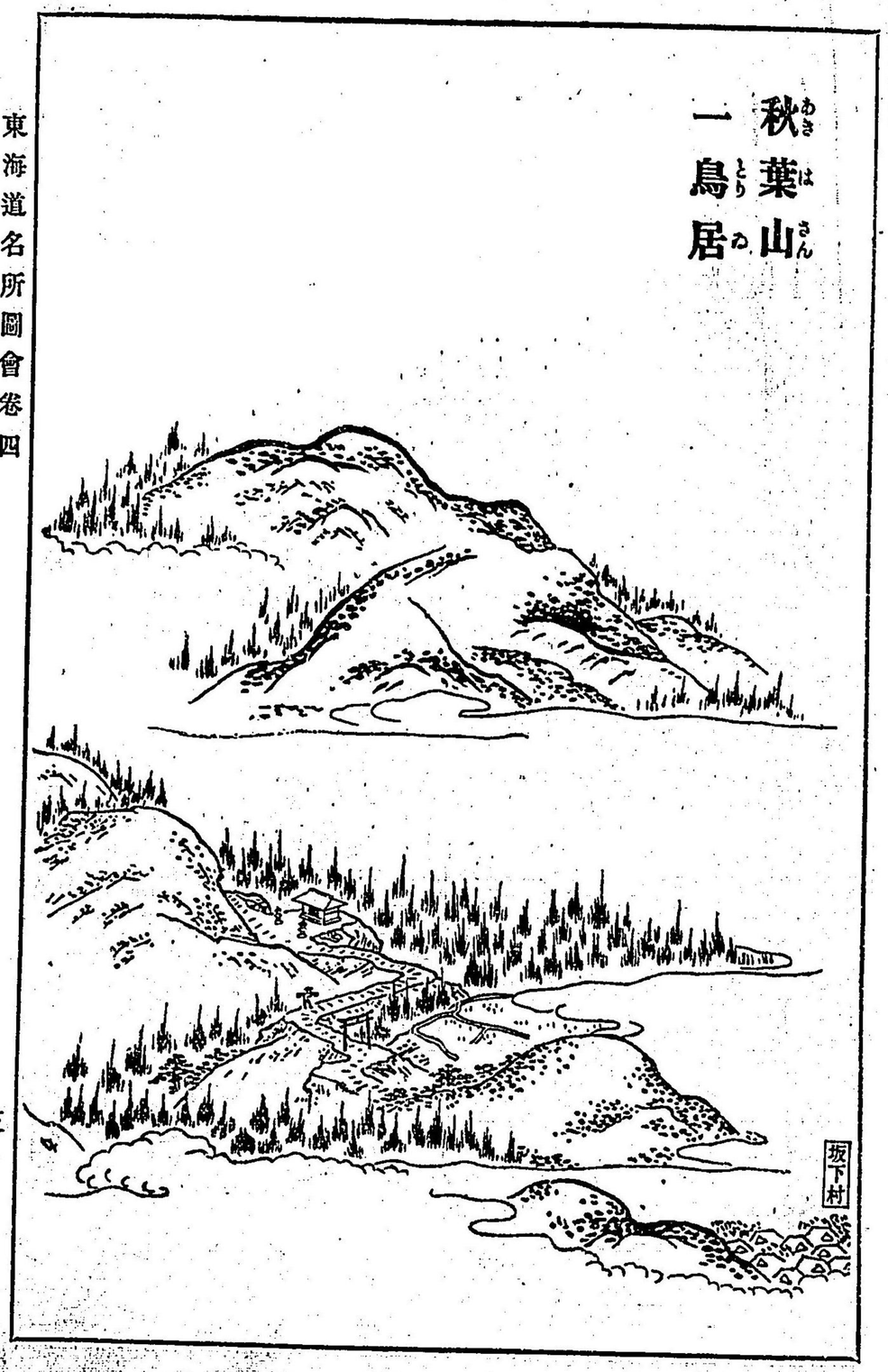
大登山秋葉寺

遠州周知郡大居村山峰にあり禪宗曹洞中興開和尚同國久野村可唾齋に屬す天正年中再建

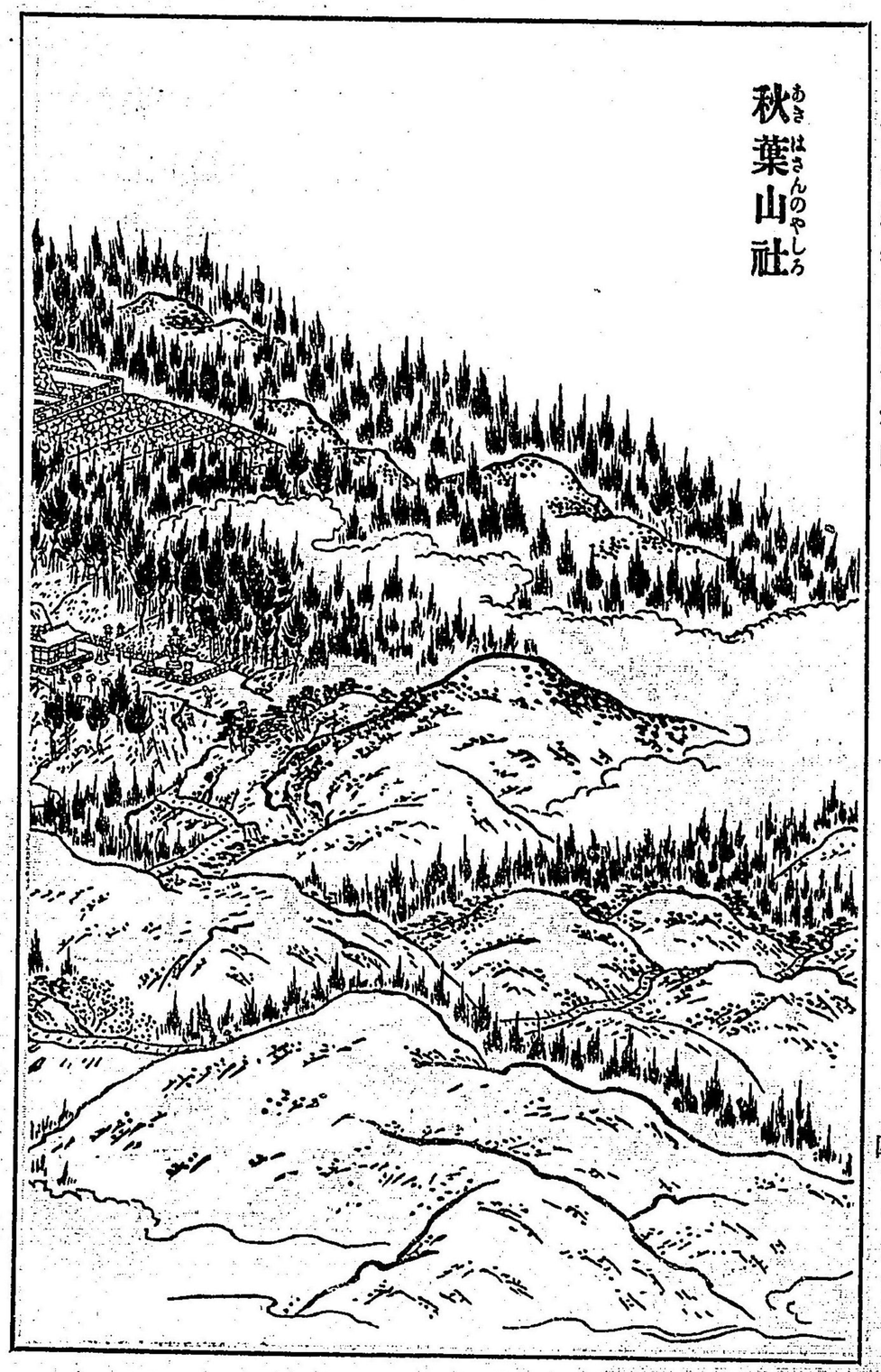
『本堂聖觀音』長三尺許行基大士の作脇士將軍地藏十一面觀音を安す俱に同作『秋葉山權現社』本堂の側にあり當山鎮守とす祭神『火産靈命』或云く延喜式內小國神社『三尺坊』秋葉同社に祭る當山護神とす『多寶塔』秋葉社の側にあり大日尊を安す『禪堂』本堂の右にあり『經堂』禪堂の左に隣る『白山祠』本堂の前右の方にあり『天滿宮』本堂の前左の方にあり『鐘樓』經堂の傍にあり『神輿藏』秋葉祠の右にあり『機織井』本堂より八丁許北にあり當山の名泉なり『一ノ鳥居』坂下村の上にあり額金明嶺『二ノ鳥居』一鳥居の上にあり額最勝閣奉勅沙門八十三翁方面山書是より一丁上に子安地藏ありて『奥院』本尊不動明王傳教大師作龍頭山と號す本堂より北の方三里許奥にして幽邃閑寂の山峰女人結界也夫當山の寺說を原るに舊記見えず諺に云むかし　元正天皇御宇養老二年に僧正行基諸國巡行の時當山に登り老杉を伐て聖觀音勝軍地藏十一面大悲の尊像三軀を彫刻して國家安民五穀豐饒の爲に佛院を草創し玆に三佛を安す傳聞行基大士は文殊菩薩の化身也天竺婆羅門尊者來朝相見の時權者なる事しれり事は南都東大寺の記傳に鮮也當寺の鎮守の神は延喜式內小國神社と號し神躰は大巳貴命これを秋葉權現と稱す一山護神に三尺坊を同社と祀る此靈人身の時は信州の產にて其母常に觀世音を信じ普門品を誦する事數百卷に逮ぶ或夜の夢に大悲三十三身の中にて迦

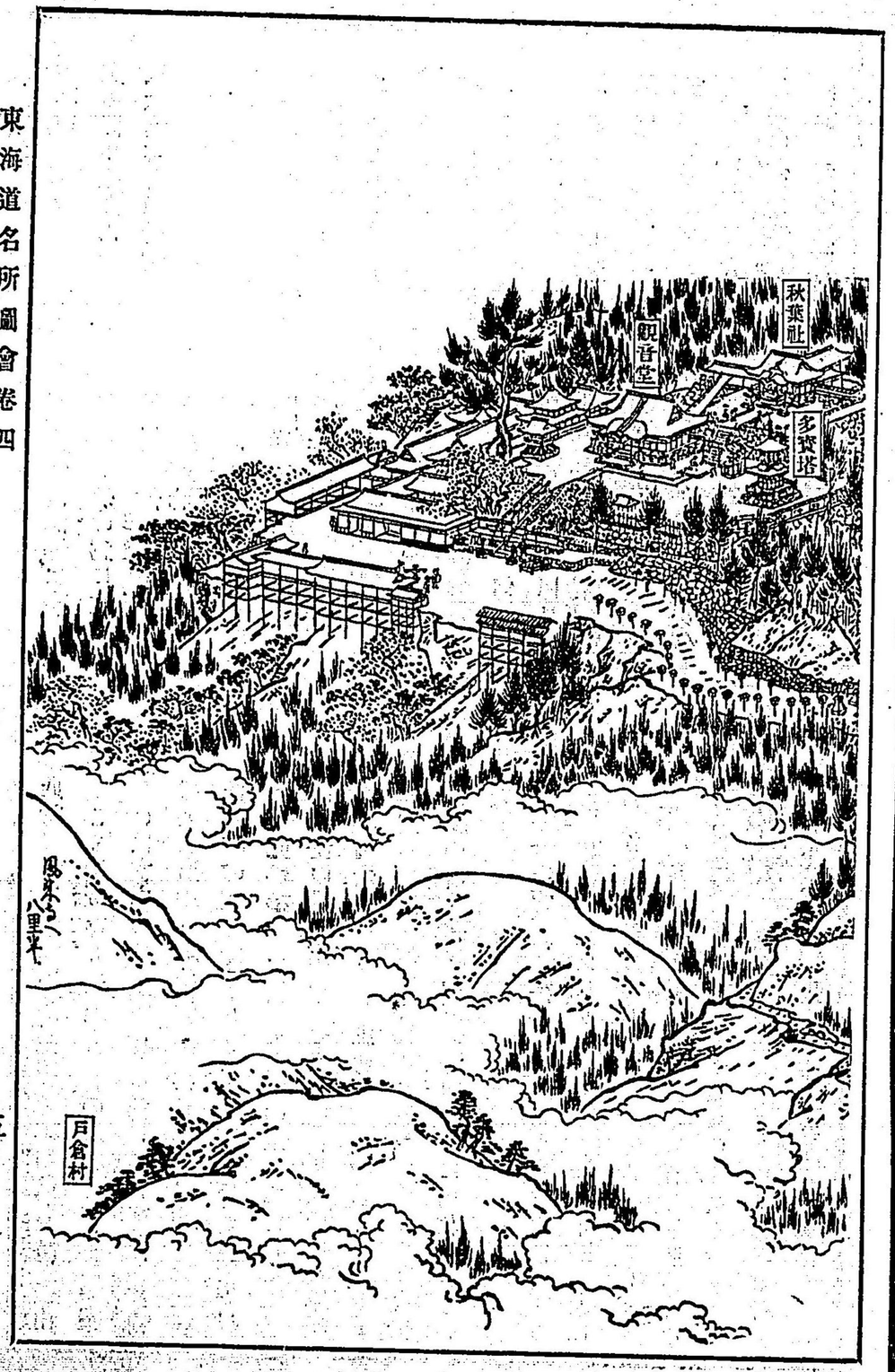
樓羅身を現じ給ふと見て妊體し臨月に到て福德圓滿の相ある男子を誕ず父母斜ならず悅び成長に從ひ出家なさしめ越後國藏王堂十二坊の中三尺坊に住職す此時不動三昧の法を行ひ一七ヶ日に八千枚八千度八千度支木を燒て一座とす八千座なり執行して滿座の曉燒香の火烈々として燃上り烏形兩翼にして左右に劒索を持たる靈相現せしかば我行法成就せりとなをも一心に觀念す忽煩惱業生死の苦患滅盡して飛行自在の神通を得る然るに一ツの白狐出現せしかば即これに乘じ何國にても止らん所に我住して度生利益專にせんと誓ひ虛空を飛行し給ひしに此秋葉山に白狐とゞまる因茲こゝを安住の嶺と究め幸行基大士の安し給ふ大悲の尊像在せしかば常に禮拜供養しけり其頃は行基開基養老二年より九十年の後にて　嵯峨天皇御宇大同四年の事也其後弘仁二年より諸國を遊化して普く衆生を利益せんとて靈嶽靈窟を飛行しあらゆる名山名蹟をめぐり給ふ其星霜積り〳〵て四百六十餘年の後伏見院御宇永仁二年八月中旬に本の秋葉山嶺に歸峯ありこゝを大登山と號するは南海の汀より次第に攀登りて此山の軸際より又五十町を登る此標相は佛地に到るの入路十住十行十回向十地昇進して修し登り階級四十二位を修するの儀也上八町は四方四隅の菩薩文殊普賢觀音勢頂上は則八葉の蓮華臺の佛位を表する也又秋葉寺と號するは上古此山に水乏かりけるゆゑ寺僧歎きて鎭護の神社へ祈誓しぬれば三尺坊神勅を蒙りて天龍八部を招請しければ忽應驗ありて霹靂震雷し一夜の中に西北の隅にあたりて清泉涌出たり時の人歡喜踊躍して水中を見れば潔白の明珠二顆あり是蛟龍頷下の寶玉也又蝦蟆出で背面に秋葉の二字を頂き游ぎ來る因茲寺を秋葉と號すかの龍の玉は今に寺鎭として寶庫に藏む蝦蟆は即水底に入て見えず加之かの清泉のほとりに寛永年中山姥出來りて機を織それより此水を機織井と呼ぶ其織たる布に青銅十疋を副て住職に贈るこれ又今に寺の寶錢とす機布は住職の涅槃衣となす實に不思議の靈水ゆゑ大旱の時雩すれば忽雨降る是龍神感應の名水也

秋葉山一鳥居



秋葉山社（あきはさんのやしろ）





秋葉山翠傳記大概かくの如し古緣起舊記等は享祿天文の間甲州武田信玄が驅擾に罹て兵燹の爲に燒亡す只秋葉神社觀音堂纔に遺り寶器は寺僧携て逃免るゆゑ今に存在す甲州亂妨の軍勢堂社を燒拂はんとて數多の火をかくれども棟上より白水流れ出で火災を免るこれらの應驗著しければ近年都鄙の參詣暑寒を嫌はず蟻の如く道に集ひ秋葉講とて國々縣々にて多くの人數を聚め月參には宿々の泊札辻々別れ路の標石あるひは石燈爐を建て常夜を照す勸請の祠は京師洛東聖護院村に近年經營ありて紫庭の御祈禱所とすこれを初として江戸大阪其外諸國に多し何れも詣人つとひて賑しき事法莚の如し殊に當山廿四日は月毎の緣日とて山籠り夜參の御千度跳足參り鹽斷寒垢離籠屋は軒端をつらね山上山下茶店の賑ひ坂下村の旅籠戸倉の宿々みな此神の靈驗なるべし年毎の例祭は十一月十日より十六日に至る此夜丑の時社頭の後なる白砂に於て火鎭の神祭あり御神樂御湯を捧る其時節は參詣の拜見を禁ずそれより七十五膳の神供を備ふ此時に至て山嶺山麓震動する事稍久し諺云山神多くこゝに寄聚り法樂歡喜の音也とぞ參詣の輩遠近をいはず山坊に一夜籠り社前に敬禮する事稻麻竹葦の如し道中の賑ひ馬竹輿の繁昌夥敷ぞ見えにける此御神の靈驗かず〳〵の中に第一には弓箭刀杖の横難を免れ第二には火災燒亡の危急を免れ第三には洪水沈沒の難を免れさせ給ふ中古兵火の時も軍卒多く損じ其餘煙によつて社頭の檜皮少し火に焦せる時水雲起つて忽ち消すこれ今に遺りて見えたり火伏鎭護の神德度生化益の方便海內一圓に信敬せずといふ事なし

什物　『三尺坊書翰』永仁二年八月十六日社前にあり『龍玉』緣起に見えたり『牛玉』これは牛王の本尊たるゆゑ社中に籠てあらはに出さず『駒角』『駒玉』『鹿玉』『烏玉』『不老貝』これは數百歲を歷ても中の肉身の色變せず故に名とす其外什寶數々あり

秋葉山道法　上方京師より詣するには東海道御油の驛より北へ入て八里半を歩て鳳來寺へ參詣し／これ

より山路にして東一里に大野川あり吉田豐川の上也大野の宿を歷て細川巢山に至るこれ三遠の國堺也大平○神澤○熊○石打此あいだに天龍の枝川の上あり才河といふ石打村の溪川にて椎茸を多く作る此邊猿多しそれより戸倉といふ山里に至る鳳來寺よりこれまで八里半也戸倉より秋葉山の社まで五十町の坂路也△江戸の方より參詣するには掛川の宿より北へ入て森の宿へ赴き一の瀨へ至る此間に溪川ありて右へわたり左へ越て都て四十八ヶ瀨あり土人これをいろは川といふみな步行わたりなり冬の頃は假橋ありて往來安し夏は時々洪水あれば橋なし旅人これに艱む一ノ瀨より子奈良安に至る此間に天龍川の上あり舟わたし也これより大居に至る掛川より秋葉山まで九里半なり

七瀧　鳳來寺より秋葉山の巡路巢山村より西南十町許阿寺村の山中にあり瀧の高さ百丈にして七段に落る故に名とす

京丸　秋葉山の北にあり山家にして一村の名也民居

は僅に五軒許其長を源左衛門尉といふ家に重代の金巾子の冠緋絨の鎧錦直垂を所持す古證文舊記一紙もなし土人云むかし京家の公達の罪逆亂に襲れ此山中に隱れし其苗孫也と云傳ふ

遠江 掛川

日坂まで壹里二十九町〔驛路鈴〕に云こゝに昔今川刑部大輔氏眞といふ人駿州を武田信玄に攻とられ土岐の山家に落行其後當城に籠らる永祿十二年濱松の軍勢に攻寄られ城外にてきびしく相戰ふ松井左近忠次の兵卒岡田竹右衛門石川新兵衛左右田與兵衛など鑓を合す又三月當城へ取懸城外にて合戰す寄手菅沼三九郎高橋傳九郎松下嘉兵衛本多三彌山中是非之助等つよく戰ふによつて五月六日今川氏眞掛川の城を抱る事叶はずして遁れ出同國懸塚より船に乘て小田原に落行ける因是當城を石川日向守に賜りそれより代々の諸侯達かはる〳〵守護し給ふ也

富士紀行　打わたす波さへ袖にかけ川や　いとゝぬれそふ秋のむら雨　蛇孝法印

名産葛布

葛布を色々に染て吳服の市店に出す多は鞠袴に用ゆこれ掛川の名産也下坂といふ鍛冶も此城下に來り又鮫の皮を沽也

藻鹽草　これそこの所ならひと門々に　葛てふ布を掛川のさと　爲相

已等乃麻知神社

日坂の少し西の方宮村にあり今祭田八幡宮と稱す延喜式內佐野郡に屬す又一說には掛川城下海道筋の裏町の小社をいふとも又は大仙寺諏訪社をいふとも何れか分明ならず此所の少し西に鹽井川といふあり此社邊に鯨鯢山とて雌くじら雄鯨の山ありこゝより恭石出る里談云むかし此神の姫を龍宮へ迎んと願ひしかども神ゆるし給はず龍神これを恨んで鹽井川へ潮を出し雌雄の鯨浮み出で姫を奪ひ取んとす折節此御神恭を圍んで居給ふにより恭盤を投かけ雌雄の鯨を滅し給ふ忽ち其鯨二つの山と成つて今にあり恭石の出るを雄くじら山といひ姫を投隱し給ふ所を今に闇暗村といふ

〔文德實錄〕嘉祥三年七月遠江國事任社ニ授ニ從五位下ヲ

〔三代實錄〕貞觀二年正月廿七日戊寅授ニ遠江國眞知乃神ニ並正五位上ヲ　已等乃三字落字カ

〔清少枕草紙〕ことのまゝの明神いとたのもしさのみきゝけんとやいはれ給はんとおもふそいとおかしき

〔十六夜日記〕廿四日ひるになりてさやの中山こゆ事任とかやいふ社のほとも道いとおもしろし山かけにて嵐もおよはぬなめりふかくいるまゝに遠近のみねつゝきこと山に似す心ほそくあはれ也ふもとの里きく川といふ所にとゝまる』

家集　袖かけてたのみしかさし東路の　ことのまゝにはあらすそありける　相摸

名寄　又もこん我れきことのまゝならは　しはしちらすな木々のもみち葉　長明

〔光行紀行〕ことのまいさと聞ゆるやしろおはします其御まへをすぐとていさゝか思ひつゝけられし

ゆふたすきかけてそたのむいまおもふ　ことのまゝなる神のしるしを　光行

〔貞應海道記〕山口といふ今宿を過れば路は舊によつて通せり野原を跡にしさとむらをさきにして打かへ〳〵過行ば事の任と申社に參詣す本地をばしらず佛陀にもいますらん薩埵にもいますらん中丹をば神かならずあはれみ給ふべし今身もおだやかに後身もおだやかにすきのむら立は三輪山にあらずとも戀しくはたづねてもまいるらん　願ばたゝ畢竟空寂の法味を納受して眞實不虛の感應をたれたまへ

おもふことのまゝにかなへば杉たてる　神のちかひのしるしとそ見ん

〔曙記〕ことのまゝのやしろに光廣卿は大仙寺村の諏訪明神なるへけるものありて事の任のやしろとしたまふならん

みしめなは神にまかせてひとすちに　わかおもふことのまゝにいのらん　光廣卿

入坂を越むとて五六町ばかりそなたには八幡宮あり花表に櫻咲かゝりぬ都を立てこなたいまに見ざりし初櫻けふの癸これ也

たちならふ神の花表の初さくら　はなのこゝろも外よりそとき　光廣卿

あつまより春も來ぬれは山さくら　花やみやこに咲のほるらん　同

〔東武道記〕天文四年三月冷泉大納言爲久卿

日坂山口にいます事任といふ社をふし拜て

大井川けふのわたせをさして思ふ　　冷泉爲久卿

ことのまゝにといのる神垣

〔和漢年代記〕　欽明天皇十六年乙亥二月大巳貴神遠州周智郡に現れ給ふ事任神社と崇む周智郡とは誤ならん延喜式佐野郡正し

日坂　江坂

新坂或は西坂とも書す金屋まで一里二十九町

此所の名物に蕨餅を製して沽也

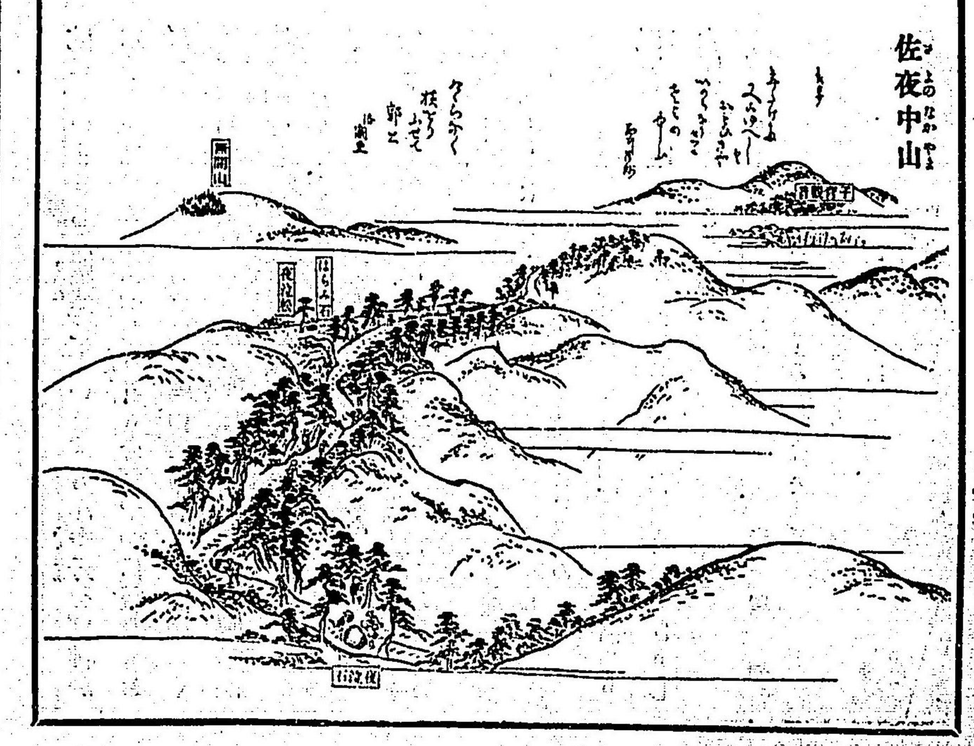
〔丙辰紀行〕此所の民わらび餅を賣る往還の者飢を救ふゆゑにいにしへより新坂のわらび餅とて其名あるもの也或は葛の粉をまじへて蒸餅とし豆の粉に鹽を和して旅人にすゝむ人その蕨餅なりとしりて其葛餅といふ事をしらず諸越に茯神を買て老芋を得たる人もありけるとかや

「婆叫レ雉兮婦喚レ烘　停レ人鄙食在レ途中　羅山

濕レ誰救得西山餓　馬首吹來餅一甑」

佐夜中山

日坂の東北の方也東海道筋荒井舞坂より東に北を兼たり故に東北とす佐夜中山は八雲御抄にさやの中山とあり宗祇の方角抄にはたゞ小夜の



山西の麓を新坂といふとぞ宗久が都のつとゝいふ書にさやの中山にもなりぬこゝをさよの中山さやの中山といふ兩說あり中納言師長公當國の任にて下り給ひける時土民はさよの中山と申侍りけるとて中古の先達などもさやうに讀れて侍る又源三位頼政はさよの長山とぞ申ける此たび老翁に尋ね侍りしがばさやの中山と答侍りきと云々又或が云夜のこゝろを讀ざるにはさやといふとかたりき按るに此山遠江國佐野郡也さやとさよとは五音相通なり此例まゝ多しいにしへより名高き名所にて勅撰に古詠多し

古今　東路のさやの中山なかゝに　何しか人を思ひ初けん　紀友則

東歌　かひうた

同　かひかれなさやかにもみしかけゝれなく　よこほりふせるさやの中山

千載　よな〳〵の旅寢の床に風さへて　初雪ふれるさやの中山　八條前大政大臣

新古　古郷のけふの俤さそひこと　月にそちきるさよの中山　藤原雅經

同　岩かれの床にあらしを片しきて　獨やれなんさよの中山　有家

續後撰　かひかれはは雪白し神無月　時雨て過るさよの中山　蓮生法師

新後撰　まちあかすさ夜の中山中〳〵に　一聲つらき時鳥かな　前中納言實家

同　鳥の音を聽の里にき、捨て　夜深くこゆるさやの中山　讀人しらず

新後撰　旅衣夕霧さむきさ、のはの　さやの中山あらし吹なり　衣笠内大臣

續後拾遺　旅れするさよの中山あけたては　行てに分る峯の横雲　藤原有眞

續千載　月待て猶越ゆかむ夕暮は　道たと〳〵しさやの中山　前大納言爲氏

風雅　旅れするさよの中山さよ中に　鹿も鳴なりつまや戀しき　橘爲仲朝臣

同　峰の雲うらはの波をめにかけて　風を分るさやの中山　前大納言爲廉

新拾遺　かひかれは猶いかはかりつもるらん　はや雪ふかしさやの中山　寂眞法師

〔いさよひにき〕をちこちの峯つゝきこと山に似ず心ぼそくあはれ也ふもとの里に菊川といふ所ありこゝにとゞまる

こえくらすふもとのさとの夕間に　松風わくるさよの中山　阿佛

雲は山川の氣なり
天に亜れ空に飛んで
動靜みな無心なり
又道中筋に靈雖
するは此外にして
無心の境界に似て
仕樣事なしの風に
從ひ東西に來往す
これを雲助
といふ

雲助行

雲助是何者　更非雲助兒
夢昔元歷歷　如何今此姿
一朝聚助當　十年受眼難
蒼顏體能固　玉秋肌每寒
玄古餅迫咽　坂東酒染身
誰復我非洞　雖壯唯是貧
袖壞肘自見　褌斷足殊輕
徘徊街道筋　欲拔生馬睛
夜宿建念寺　月當勝頁遺
偶雖一盃受　未見在所松
莫問吾無舍　暮天坐太平
一本有竹杖　萬里可横行

胴脈

あかつきおきてみれば月もいでにけり
　雲かゝるさやの中山こえぬとは　　同
　　都につけよ有明の月

河おといとすこし
　わたらんと思ひやかけしあつまちに　　同
　　ありとはかりは菊川の水

〔光行記〕佐夜中山は古今集の歌によこほりふせるとよまれたれば名高き名所とは聞をきたれども見るにいよ〳〵心ぼそし北は深山にて松杉あらしはげしく南は野山にて秋の花つゆしげし谷より峯にうつる白雲に分入こゝちして鹿の音涙をもよほし虫のねあはれ深し

ふみまよふ峰のかけはしと絶して　　光行
　雲に跡とふ佐夜の中山

〔貞應海道記〕佐夜中山にかゝる此山口をしばらく登れば左に深谷右も深谷一峯ながきみちは塘のうへに似たり兩谷の梢を眼下に見て群鳥の囀を足の下に聞く谷の兩片は高く又山のあいだを過れば中山とは見へたり山はむかしの九折のみちふるきがごとし梢はあらたなるこすゑ千條のみどりみなあさし此所は其名ことに聞つるところなれば一時のほとに百般立とまりて打ながめゆけば森蓋の雨のおとはぬれずして耳をあらひ商弦の風のひゞきは色あらずして身にしむ

わけのぼるさよの中山なか〳〵に
　こえてなこりそくるしかりける

〔曙記〕佐夜の中山はみね海道なりといひしさも有事ぞかしふりはへつく〳〵ながめて

うれしきもうきもわすれて今にきく　　光廣卿
　春のあらしのさやの中山

東行紀　降雨につゞく松原かきくもり　　爲村卿
　ゆくかたくらきさ夜の中山

〔丙辰紀行〕圓位法師がいのち也けり佐夜の中山と詠せしはこゝにての事也

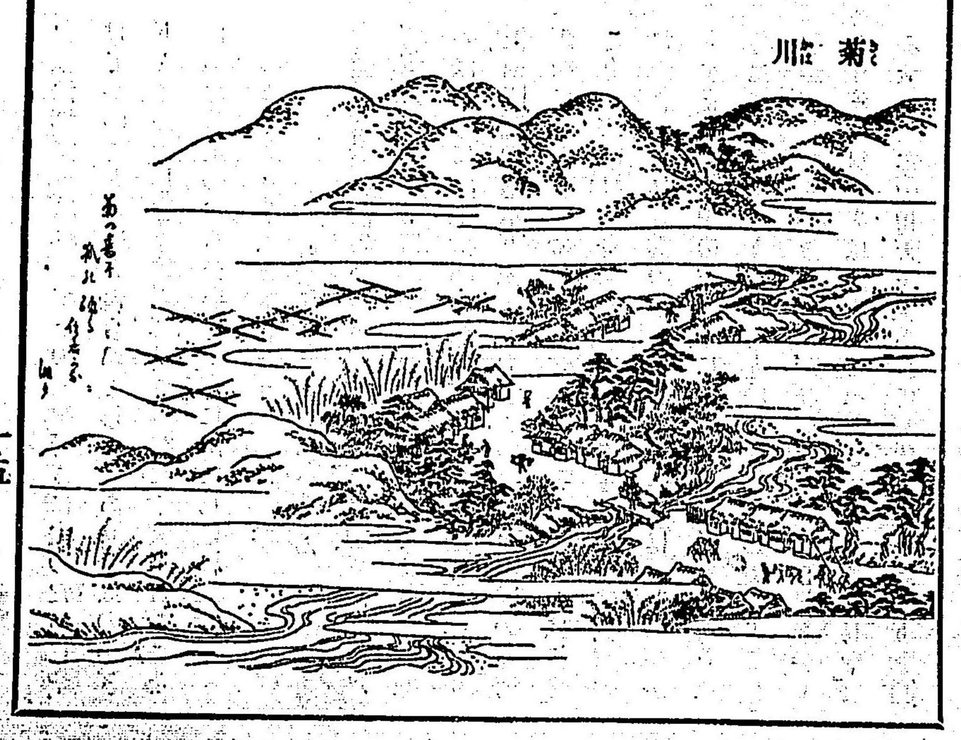
坂道升降是早天　夢幾馬上不成眠　羅山
此山無限四行淚　能使千詠歌千古傳

夜泣石　佐夜中山街道の眞中にあり『夜泣松』夜泣石の東一町ばかり左側にあり『姙婦塚』夜泣松の傍にあり此三箇の由來を板行にして小夜新田の茶店に

賣也これを見るにむかし日坂に姙身の女ありて金谷の宿の夫に通ふある夜此さよの中山に山賊出て戀慕し從ざるによりて斬殺し衣裳を剝とり行衛なし此婦の日頃念じ奉る觀音出て僧と現し亡婦の腹より赤子を出しあたりの賤女に預け飴をもつて養育させ給ひけり其子成人の後命也けり佐夜の中山と常に口號み諸國にめぐりて終に池田の宿にてかの盜賊の敵に出合ひ親の敵をやす〳〵と討しとぞ其證詳かならず因是くはしくしるす事なし

子育觀音　小夜峠にあり久圓寺といふ眞言の草堂也子育の由緣前に見えたり本尊正觀音行基僧正の作長一尺八寸也此境内に石表あり其文に云慶長五年關ケ原の役の時山内對馬守一豐此地に茶亭を營で國初將軍家を饗應し奉りし遺跡也と錦す近年天明九年此石表を建ると見えたり

四郡橋　久圓寺の東にあり當國榛原郡。佐野郡。城飼郡。山名郡等の四郡の境也とぞ按るに古今の横ほりを稱すなるべし



菊川　菊川村にあり川上を菊ヶ淵といふ菊川村むかしの驛場也今は立場となる此所に矢根鍛冶今にあり

〔東鑑〕十三日甲午於遠江國菊川宿佐々木三郎盛綱相副小刀鮭楚割數折以子息小童送進御宿申云只今倒之令食之處氣味頗懇切早可聞食歟云々殊御自愛彼折敷被染御自筆曰

まちえたる人のなさけもすはやりの　わりなく見ゆる心ざしかな　　相朝臣

〔承久記〕承久三年七月中御門前中納言宗行は小山新左衛門尉具し奉て下りけるが遠江の菊河の宿に着給ふ爰をば何ぞと問給へば菊河と申す則前に流るゝがさん候と申ければ硯乞出て宿の柱に書つけ給ふ

昔南陽縣之菊水　汲下流延齡　今東海道之菊川

宿西岸亡命

〔光行記〕菊川と云所ありさりにし承久三年の秋の頃中御門中納言宗行と聞えし人罪有て吾妻へ下られけるに此宿に泊りたりけるが昔は南陽縣の菊の水下流を汲で齡をのぶ今は東海道の菊川の西の岸に宿して命をうしなふととある家の障子に書れたりけると聞をきたればあはれにてその家を尋るに火のためにやけてかのことのはも殘らぬよし申者あり今はのかぎりとてのこしをきけん形見さへ跡なく成にけるこそはかなき世のならひいとゞ哀にかなしけれ

書つくる形見も今はなかりけり　あとはちとせとたれかいひけん　　光行

〔眞應海道記〕胡馬ひづめつかれて日烏翅さがりぬれば草命をやしなはんがため菊川の宿にとまりぬ或家のはしらに故中御門中納言宗行卿かく書付られたり彼南陽縣の菊水下流を汲で齡をのべ此東海道の菊河西岸にやどりて命を全くせんことをことにあはれとこそおぼゆれ其身は累葉の賢枝に生れ其官は黄門のたかき階に昇る雲のうへの月のまへには冠のひかりをまじへ仙洞の花の下には錦の袖の色をあらそふ身たり榮分にあまりて時とはなと匂ひしかば人それをかざしてちかきもしたがひ遠きもなびきしもかゝるうきめ見むとは思やよるべきさてもあさましや去る承久三年中旬天下風あれて海内の浪さかへりき闘

亂の亂將は花城よりみだれ合戰の戰士は夷國より戰ふ暴雷雲を響かして日月光をおほはれ軍蔗地をうごかして弓劍威をふるふ下略

こゝろあれはさそなあはれと水くきの　あとかきわくるやさの旅人

後基東下り

〔太平記〕後基朝臣再び關東下向ありし時宿の名を問給へば菊川と答ふ承久の軍に光親卿院宣書給ひし罪によりて關東へ召下され此宿にて昔南陽縣菊水といふ四句を書たりし事を思ひ出で遠きむかしの筆の跡今は我身の上になり哀れやいとゞまさりけん一首の歌を宿の柱にぞ書れける

いにしへもかゝるためしをきく川の　同じ流に身をや沈ん　　後基朝臣

按るに東鑑に院宣を書給ひしは光親卿也されども菊川にて四句を書たるは中御門宗行卿なり太平記の說謬なるべし光行の記に菊川の家燒たると書しは承久三年より廿二年後の事也又眞應海道記に四句の事書しは纔三年の後也後人勘考して是非を

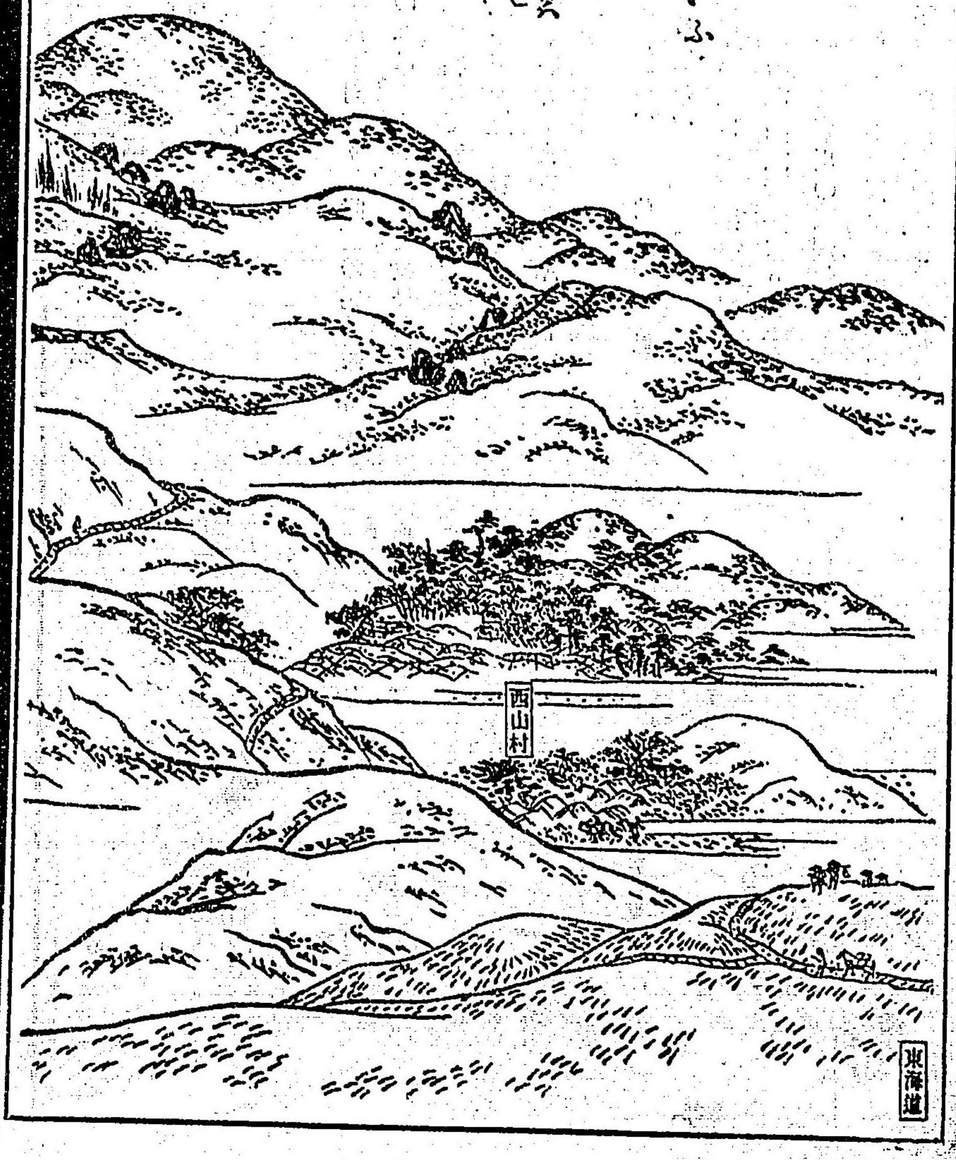
菊川宿

中御門宗行卿は承久の亂れに鎌倉に捕れ東に下り給ふ時此菊川に宿り菊水の下流に齡を延ると菊川の西岸に命を滅すといふ對句なこゝの障子に書遺されし事聞奏に見えたりかの晉の厲公が外嬖を信じて三郤を殺せしにも比せん哉

阿波が嶽

阿波波神社

世に無間山といふ。



正すべき事也

菊阪 菊川村より登り坂也坂路十六町左の方男鹿村に菊形の名石あり

牧原 初めは諏訪の原といへり天正の頃より牧原と改むこゝに廿三夜祠。諏訪祠あり

諏訪原古城 牧の原にあり此城は天正元年武田左馬助信豐。馬場美濃守尚房の兩人綱張して築き室賀下總守昌清。小泉隼人忠李を置同年七月濱松より攻らる兩人よく防ぎて降らず同八月廿四日松平周防守忠次を首將として戸田左門。大澤土左衛門などつよく働きければ室賀小泉ちから屈し城を出て同國小山の城に籠る也當國には周防守忠次を城番として置せられる何ほど要害堅固にして名を得たる城にても籠り人により又は攻人によるべしと軍法の奥儀に見えたり此城跡は今金谷の驛より無間山へ行く道筋にして莽々たる曠野也野の廣さ方一里許堀切の跡天守の蹟など顯然たり

初倉山 金谷坂の上方をいふ山の南の方に初倉里あり金谷坂は下りの坂路にして嶮し此時より金谷の驛大井川の流を見おろし富士山など遙に見えて風景の佳境なり

淡嶽 遠江佐野郡西山村の山上也日坂の驛中より東北へ入る事凡二里許也又此山上より金谷坂へ出る道一里半也此邊の高嶺にして海道より北に中て絶頂に杉の村立蒼々と見えたり

東路はころもて寒し白雲の　あはゝがたけの秋の初風　賀茂眞淵

阿波波神社 淡ヶ嶽の高峯にあり延喜式内祭神未考當國佐野郡四座の一社なり

無間山觀音寺 阿波々社の下段にあり禪宗曹洞當國久野村可睡齋の末寺也『本尊千手觀音』長三尺許作しれず阿波々の神の本地堂とす脇段に西國三十三所の觀音の像を安ず當寺は寺產なくして堂舍庫裏等大に零落し境内荒廢の体也今時住僧もなくして漸く麓の西山村より村老代る〳〵來つて留主居の堂守とす毎年二月初午の日は法會とて近郷より參詣すとなん

諺に云むかし此山に無間の鐘といふあり此鐘を撞ば現世にては無量の財寶を得るといへども未來は無間地獄に墮落すとなり 故に此山を無間山といふ今此鐘を尋るに曾てなし土人云むかし此堂下へ埋ともいふ又鶴見因幡が無間の鐘の由來とて佐夜の中山の茶店にて板行し賣るなり又近年佐夜の中山靈場記といふ談義本を出す俱に妄說にしてとるに足らず傀儡樂戸舞妓扮戲に取組むより世に名高し按るに無間山とは此峯へ登る坂路はそく嶮くして一たび踏損ずれば無間地獄へ落るに似たり若踏はづして谷へ落る時は此寺の鐘を撞て人を呼集めて助る也 故に無間の鐘といふか

『半鐘』觀音堂の緣側に釣銘を鐫す

遠州濱松庄宇布見長寶寺
勸進檀那阿閣梨法仗太龍舜忌
永和二年丙辰二月十五日

堂守云此鐘はあるとし修驗の山伏荷來りて云やう當國長寶寺に於て此鐘を賭として圍碁す其時我等勝負に勝しよりこゝに持來り幸此寺に釣鐘あらざるゆゑ寄附すとぞこれらも詳ならず又一說に無間の鐘は明應の頃住僧諸人に罪を與ふるに似たりとて古井の底へ投落す今も其古井へ榊を逆に投入るれば撞たるも同じ事にて財寶を得るといひつたへりこれらも妄談雜するに及ばねども延喜式神名帳に出たる神社をあらぬ號をつけて神號の廢する事を歎てこゝに雜說を記し是非を糺すのみ

金谷 遠江

烏田まで一里此道多くは大井川の河原道にして石徑なり

敬滿神社 遠州桑原郡谷口村にあり大井川涉し場より一里餘川下なり延喜式云名神大云々今川中島辨財天と稱す

大井河 或は大堰河又は大猪河とも書す渡口金谷の驛の北にあり水源は信州の山谷より流落る急流にて常に濁濁なり

藻鹽 打わたす瀨瀨あまたの大井河　爲家
見へてそ遠き初倉の山

〔いさよひにき〕廿五日菊川をいでゝけふは大井河と

大井川

大井川あさ
何ぞや
百万石代
信の上
湘多
島田

ゆうまぐれ
大井河あさく
いくとせ
家集
ちとせやこの都の
西れ大井川
いくとせん
ふじ筑士
森羅雅作

大井川

續き圖

旅客馮陵慎涉過
横天湍瀨急頹波
水光倒走中山樹
石勢轟流大堰川
決口年年沈白馬
防堤處處臥蒼虵
早知夏后行無事
安得成功濟世多

南郭

乙卯仲夏從東關歸路憩島田驛長大久保氏家主人指麾大井川渡丁其芳志殆厚矣

いふ河をわたる水いとあせて閑しにはたがひてわづらひなしかはらいくりとかやいとはるかなり水のいでたらんおもかけをしはからる

思ひ出る都のことはおほぬ河　いく瀬の石のかすも及し　阿佛

〔光行紀行〕少しうちのぼるやうなる奥より大井川を見わたしたればはる〳〵とひろき河原のうちに一すぢならず流れ別れたる河瀬どもとかく入ちがひたるに似たり中〳〵わたりて見んよりもよそめおもしろく覺ゆればかのもみちみたれてなかれけん龍田河ならねどもしばしやすらはる

日數ふるたひのあはれは大井川　わたらぬ水もふかき色かな　光行

俊基あづま下り

〔太平記〕大堰河を過給へば都にありし名を聞て龜山殿の行幸の嵐の山の花盛り龍頭鷁首の船に乘詩歌管絃の宴に侍し事も今は再び見ぬ世の夢と成ぬとおもひつゞけ給ふ』

東武紀行　瀬は淵に思ひかはさは大井河　澤庵和尚

人の心の底もたのまし

駿遠兩國堺　大井河の半は遠州半は駿州也近世下流西の方へ落て河の東にも遠州の村里交はる事多し

〔丙辰紀行〕大堰河は駿河と遠江との堺也明日香川ならねど霖雨ふれば淵瀬かはる事たび〳〵なれば東の山の岸を流れて島田の驛河原の中にある事もあり西のかたに流て金谷の山にそふ事もあり又一すぢの大河となりて大木沙石を流す事もありあまたの枝流となりて一里ばかりが間にわかる事もありさればいにしへより徒杠輿梁もなりがたりきゆゑに往來の人馬河の瀬を知らざれば金谷に待もあり島田にとゞまるもあり渉りかゝりて溺るゝ者もあり辛ふじて向ひの岸に至るもあり島田金谷の民おのが家はたゞよひ流るれども旅客の甕をむさぼるゆゑに洪水を悅ぶ賣炭翁が單衣にして年の寒きを待がごとし河水の家を流し田を損ふゆゑに防鴨河使防葛野河使を置れしむかしの事も只今おもひ出ざらんや

尋常揭厦心過腰　叱馬呼奴魂欲銷　羅山

來往就中何處苦　無舟無筏復無橋

海道奔流第一川　籃輿舁輙擔夫肩　同

洛西大井雖同稱　此不レ矜レ梓彼有レ船

されば此大堰川は東海道第一の急流の大河にして蕪風にはみかさをまし穴師吹ぬれば水落るいにしへより舟なく桴なく橋無ふしてゆきゝの人は島田金谷の川越所に立寄て何文川の定めを聞てその賃をわたし割符を取つて渡丁に越さしむ遠臺肩車などの兩品ありて交易の賈人京登り吾妻下り伊勢まゐり富士詣など八人懸の臺に乘られ又は肩車にて渉すもあり相撲の闘取は人を雇ず自丸裸に成て土俵入の如くわたるもあり水勢ちからにや劣りけん波は左右へ別れける卿相の雲客列國の諸侯は駕を臺に居て多くの役夫をもつて舁渡す水堰の傅夫は前後に圍ひ急流に足を揃へ聲を合て渉す紅葉ちり時雨する頃は水落て冬川の寂しきに渡丁は弱りみかさます夏河を質に入れかしかりの沙汰羅山子いへる如く己が草の戸は流るれども首だけの借錢を納して五月雨の水に威をまし下り酒の瓢を解て所々に宴す島田金谷の渡丁都て七百人也霖雨降止ずしてみかさましぬれば河止とて東西の驛中所せくまでふたがり一驛二宿も跡へ戻りて水の落るを待もあり又色尾より渉りて藤枝へ出るもありなを此の行先に安部川富士川酒匂馬入六郷などいふ川々ありみなこれに准ふべし淮南子に水神を天吳といふ又水伯ともいふむかしより此河に至つて接遞夫急事の旅人もこれらの神の機嫌を嘱ぶてあなた次第なるべし　後白河法皇の御詞に鴨河の水と雙六の塞とは朕がこゝろに儘ならずと仰せられしも同日の論とぞ思はれける

駿　嶋田河

藤枝まで二里八町此宿に大井明神とて此所の生土神あり例祭九月十五日おかり屋村を御旅所とす

風雨頻來宿嶋田　家園万里思茫然　山崎閑齋

通脊洞却市樣滴　坐到天明不作眠

〔東紀行〕島田を過るに賤が家につゝじうの花を折て花瓶にさす

岩つゝしまたうつろはぬ春の色に　冷泉爲村卿

初うの花を折てへてけり

瀬戸　島田より一里許先にあり和名鈔に西刀と書して益頭郡に入る也今は志太郡とす海道の川を瀬戸川といひ川岸の山を瀬戸山といふ又此ほとりに鐙が池觀音堂あり

宮士紀行　うらかるゝ尾花の涙にかへるなり　　汐路は遠き瀬戸の山風　　堯孝法印

名物染飯　瀬戸村の茶店に賣る也强飯を山梔子にて染てそれを摺つぶし小判形に薄く干乾してうる也

駿河　藤枝

岡部まで一里廿九町此驛中左側は志太郡右側は益頭郡也

〔風土記〕大寶二年更爲二新驛一云々此宿鮮魚多し

家集　春なまつなけきはたれも有ものを　　おなしかれはの藤枝の里　　參議雅經

宮士紀行　春ならば花ぞ匂はん秋とてやうら葉色づく藤枝の里　　堯孝法印

青藤綠　寵恰好逃　藤枝村裡歎二晉猶一　　閑齋

家々不レ解二閑人意一　春杵聲忙八月秋

田中城　藤枝の南二十町餘にあり天正八年の頃甲州依田右衛門尉信蕃こゝにこもる同年五月三日遠州濱松より攻らる依田つよく防ぎければ雌雄決せず同九年二月二十日又攻られければ依田ちからつきて甲州に走る慶長六年酒井備後守忠利拜領同十五年より御番城と成寛永九年より諸侯代々在城し給ふ

蓮生寺　藤枝にあり宗旨東本願寺派宗祖親鸞聖人東國經回の時しばらく逗留し給ふ舊跡といふ

〔寺說〕むかし熊谷次郎直實親族久下直方と家督爭ひして鎌倉を逐電し伊豆の走湯山に登り佛門に入てそれより上洛して黑谷の法然上人の弟子と成出家し蓮生法師とあらため故郷熊谷へかへる道すがら此藤枝の驛にて宿しける其夜蓮生法師宿のあるじに云ふわれ故郷へかへり又上洛まで錢壹〆文借用したきよしをいふ則其質物として念佛十遍を預け置也あるじいぶかしながら十念を授り壹〆文を與ふ蓮生悅びて熊谷へおもむき親族にゆるゝ遇て又上洛の砌此宿に至りかの家に行壹〆文の錢を戻して曰日外質に入れし十念今日われに返し給へといふ亭主曰われに十念をさづけ給ふばかりにて外に何も預りし物なし蓮生曰其念佛あるじよりわれに授け戻し給へといふあるじいと安き事とて又十念を蓮生にさづけかへしければ不思議なる哉庭前の池に初め念佛をうけし時より青蓮華十葉咲出たり今又返す時に念佛一遍に蓮華一葉づゝ消失るあるじ此奇特を感心し涙を流し責て一遍はわれに殘し賜はれ生極樂の資用にいたし度と願へば一遍をあたへて上洛しけるとぞあるじそれより念佛門に歸入し我家を寺となして親鸞聖人をとゞめて弟子と成蓮生寺と號し其蓮池の跡も今にあり委は熊谷蓮生一生記にも見えたり

駿河　岡部

九子まで二里此宿の西に八幡村といふあり左の方の山上に祠あり土人岡部六彌太の靈を祭といふこれ謬也六彌太は武藏國岡部也こゝは岡部美濃侯の生土神といふ

後出新拾遺參照

夫木　露ふかきつたの下みち分すきて　　法印定圓

なかへにかゝるうつの山もと

建長元年あづまへ下りけるに岡部にて

家集　かへりくる程はなけかし朝霜の　　前大納言爲家

なかへのまくすうら枯にけり

歌枕名寄　身のうさのまた友もなきたくひ哉　中務卿親王
なかへの里の松の一もと
海道百首　夕日さすけしきもさびし　巻號爲朝
松たてるなかへのさとは山陰にして

〔光行記〕岡部のいますくを打過るほとかた山の松のかげに立よりてかれいひなととり出たるに嵐すさまじくはしにひゝきわたりて夏のまゝなる旅ころもうすきたもとにさむくおほゆ

これそこのたのむ木のもと岡邊なる　光行
松のあらしよ心してふけ

〔曙記〕岡部の里に櫻一木咲たるを見て

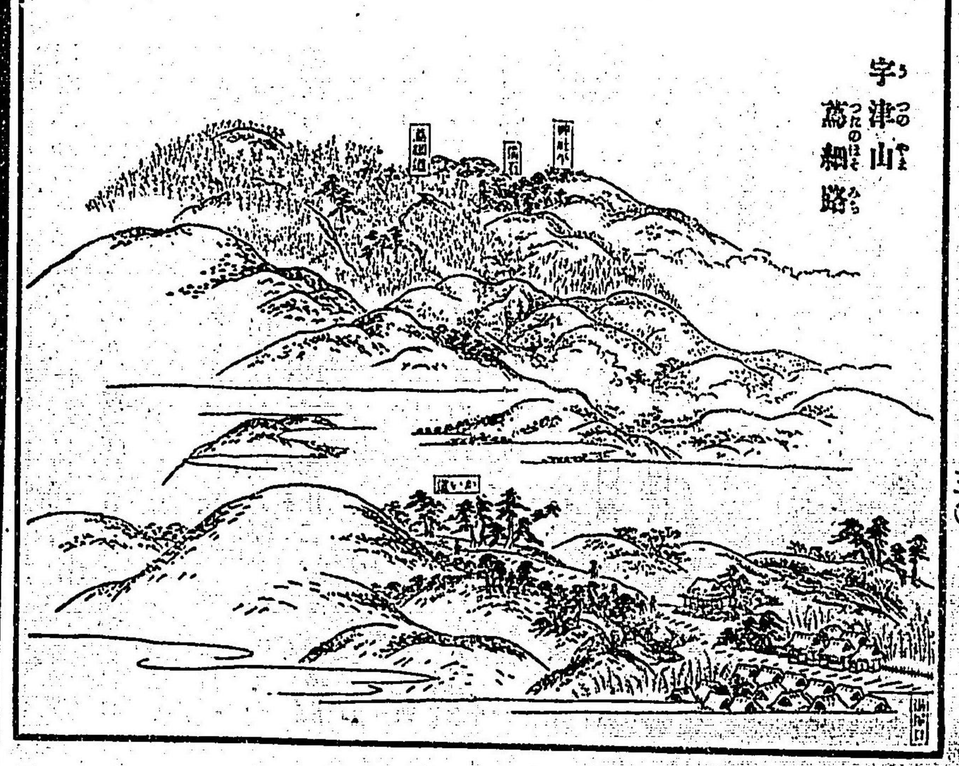
あさ露のなかへのさくら一もとの　光廣卿
杉のしるしやたちかはるらん

那閑神社　益頭郡當目村にあり岡部より壹里許南也延喜式内今土人虚空藏と稱す

宇津山　岡部より十石坂を歴て湯谷口より坂路也これをうつの山といふ宇津谷嶺まで壹里和名鈔内屋郷有度郡とあり今は安倍郡に屬す十石坂に西行山最林寺といふあり西行の安置佛といふ千手觀音を本尊とす又宇津谷に石川氏といふ者あり豐太閤小田原攻の時聊勳功あるによつて御召の胴服を拜領す今に傳來して家寶とす

蔦細道　宇津の山にあり海道より右の方に狹道ありこれ古の細道なり予東路巡覽の時此道を見んとて所の者を二人案内者とし備ひて此狹道を見るまづ案内者なる二人鎌を手々に持て篠原に入て薄茅を刈て行道を分る篠竹都て五六尺ばかり生茂りて中に嶮路所々にありて漸手を引れて歩み行く

夫宇津山蔦細道は勢語に出ていにしへより其名高く古詠多し上方よりこゝに至るには岡部の驛より海道を一里許行て湯谷口坂の下といふ所ありこゝの鼻取地藏堂の向ふなる熊野權現のやしろの側より右の方へ入る也これより道細くいさゝめなる溪川あり此流を右に添左につれて矼の橋五ッ六ッをわたる坂路にかゝればいよ〳〵道細く山深ふして幽寂たり茅すゝき萩荻篠竹生茂りて藤蔓蘿かづら足にまとひ薔薇荆棘袂を閑て歩しがたく二人の手引の者鎌をもて叢を薙刈て次第に登るに路峨しく杖をちからに行に少



したいらなる所ありこゝを神社平といふむかし社あり し古蹟也と敬ゆ按ずるに駿河風土記に宇津谷本原神社は　仁德天皇紀七年乙卯所レ祭　也云々若此神社の古蹟ならんか古歌に

現存六帖　おとにきくうつの社の現にも　　前大納言爲家
夢にも見えぬ人の慰しさ

其上の方に猫石といふあり古松六七株の蔭に猫の臥たる形に似たる巨巖有それより又登るに　漸　頂嶺とおぼしき所に出たり山郭依々として伐木の音さへかすかにだも聞えず實に陶潛が桃花源に至るの　餘　ありこれより東に降る坂路いよ〳〵　嶮し且眞砂地にして踏止がたくすべりなやみて靜に下る少しき道ある所へ出れば又溪川ありこゝにも　江　の橋あり路も　鮮　にして段々下るに遂に宇津谷嶺の東なる十團子の名物の茶店の傍たいら橋といふ圮橋の東爪に出たり是本海道也初の湯谷口より此所まで道法一里に足らずといへりこれを蔦細道といふ

〔伊勢物語〕ゆき〳〵て駿河國にいたりぬうつの山にいたりて我いらんとする道はいとくらうほそきにつたかへてはしけり心ほそくすゞろなるを見る如く思ふにす行者あひたりかゝる道はいかでかいまするといふを見ればみし人なりけり京に其人の御もとにとて文かきてつく

新古今　するがなるうつの山邊のうつゝにも　　藤原朝臣
夢にも人にあはぬなりけり

玄旨云古註に此す行者は僧正遍昭などいへり常流には用ず然るべき便宜なるべしとぞ夢にも人に逢ぬなりけりといひつめたる所はなはだおもしろしと俊成卿も此ところを褒美し給ひしとなり

新古今　旅れする夢路はゆるせうつの山　　家隆朝臣
闕とはきかずもる人もなし

詩を歌にあはせ侍しに山路秋行といへるこゝろを

同　都にも今や衣をうつの山　　定家
ゆふ霜ばらふつたの下みち

同　袖にしも月かゝれとは契おかず　　鴨長明
涙はしるやうつの山こへ

續古今　ふみ分しむかしは夢かうつの山　　登蓮雅經
あとゝもみへぬつたの下道

玉葉　夢路にも闕しやとみるうつゝには　　俊成

新千　あらし吹く高れの雲をかたしきて　　前大納言忠長
夢ちも遠しうつの山越

新拾遺　露しげき蔦のしげみを分越て　　法印定圓
岡邊にかゝるうつの山道

新後拾　里まではまた杏なるうつの山　　堯尋法師
夕ぬる雲に宿やからまし

新拾遺　明は又ひとりや行んよもすがら　　藤原政景
月にともなふうつの山越

左大臣宮士見侍らんとてあづまにくだり侍し時おなじくくだりしにうつの山をこえ侍るとて參議雅經ふみ分しむかしは夢かうつの山とよみけるを

新續古　昔たにむかしといひしうつの山　　權中納言雅世
こえてそ忍ふ蔦の下道

夫木　色〳〵の木葉しくるゝ露わけて　　俊成女
うつゝも遠きうつの山道

同　都より思ひこそしれ神無月　　從三位爲實
いかにしくれんうつの中山

濟濟殿色紙形
うつの山しげる緑の若楓　　有栖川宮
ともに秋たつ蔦の下みち　　威仁親王

信生法師ともなひてあつまのかたにまかりけるにうつの山の木に歌を書つけて侍ける後程なく身まかりけれは都にひとりのほり侍とてかの歌のかたはらに書そへ侍ける

續拾遺　うつの山現にてまたこえゆかは　　蓮生法師
うつの山邊の蔦ふける庵

拾玉　詠つる空ゆく月の行末に　　慈鎮
おもひも出ようつの山守

述懷百首　宇津の山さこそはかれて聞しかと　　僧正行意
かすみをわたる蔦の細道

同　佗つゝは夢こそあらめちる花の　　正三位知家
うつゝもつらき宇津の山風

家集　ちらぬより紅葉は波にうつろひて　　爲相
蔦の下ゆくうつの山川

〔十六夜日記〕うつの山こゆるほとにしもあさりの見しりたる山ふしに行あひたり夢にも人をなとむかしをわざとまねひたらん心地していとめづらかにおかしくもあはれにもやさしくもおほゆいそく道なりといへば文もあまたはえかゝすたゝやむことなきと心ひとつにぞをとつれきこゆる

我こゝろうつゝともなし宇津の山　　阿佛
夢にも遠き昔こふとて

つたかへてしくれぬひまもうつの山　　同
なみたに袖の色そこがるゝ

〔東紀行〕うつの山をこゆるにつたは見えずくずのみところ〳〵にしけりて見へければ草木もむかしにお

ひかはるにやあやしくて

聞をきしむかしには似ぬ宇津の山　　前中納言爲相

まくずや蔦に生かはるらん

爲相卿の下り給ふときは蔦見えずとなん今は蔦細道本海道ともに蔦多し多くは松杉なとに這かゝれりこゝの蔦は餘所にかはりて葉の切こみ多し里人取つてこれを見するに他の葉とは違へり予一本根引して携へ歸るに前栽に蔓る事多し

〔光行記〕うつの山をこゆれば蔦かづらはしげりて昔の跡たえすがの業平がす行者に云傳しけんほどいづくなるらんと見ゆくほどに道のほとりに札を立たるを見れば無縁の世捨人有よしをかけり道より近きあたりなれば少し立入て見るにわづかなる草の庵のうちにひとりの僧あり繪像のあみだ佛をかけ奉りて淨土の法文などを書り其外に更に見ゆる物なし發心のはじめ尋ぬればわが身はもと此國の者也さして思ひはれたる道心も侍らぬうへその身堪ざるかたなれば理を觀ずるに心くらく佛を念ずるに性物愛し難行易行の二の道ともにかけたりといへども山中にねふれるは里に有てつとめたるに優れるよし或人の教につきて此山に庵を結びつゝ數多の年月を送るよしをこたふ昔叔齊が首陽の空に入し猶三春のわらびをとる許由が潁水の月にすみしをのづから一瓢の器をかけたりといへり此いほりのあたりには殊更けふりたてたるよすがも見へず柴おりくぶるなくさめまでも思ひたへたるさまなり身を孤山のあらしのそこにやどして心を淨域の雲の外にすませるいはねどしるく見へてなか〳〵哀に心ぼそし

世をいとふ心のおくやしられまし　　光行

かゝる山邊の住家ならては

此庵のあたり幾程遠からす峠といふ所に至て大なる卒都婆の年經にけるとみゆるに歌どもあまた書付たる中に「吾妻路はこゝを專にせんうつの山あはれも深しつたの細道」とよめる心とまりて覺ゆれば其傍に書付し

われは又爰をせにせん宇津の山　　光行

わぎて色ある蔦の下露

〔貞應海道記〕岡部の里邑を過てはるかにゆけば宇都の山にかゝる此山は山中に山を愛する巧のけづりなせる山也碧岸の下に砂ながうして巖をたて翠嶺の上に葉落て壞をつく肱を背に負面を胸にいだきて漸にのぼれば汗肩袒の肩ながれて單衣かさぬといへども懷中の扇を動して微風の扶持可也斯て森〻たる林をわけて峨々たる峯を越れば貴名の譽は此山に高し大かたをちこちの木立にこゝろをわけられて一方ならぬ感望に思ひみだれて過れば朝雲峯くらし虎李將軍の栖をさり暮風谷寒し鶴鄭太尉が跡にすむ既にして赤羽西にとびまなこにさへぎる物とては檜原槙の葉老のちからてゝを疲れたり足にまかするものは苔の岩ね蔦の下道嶮難にたへず暫うちやすめば修行者一兩客繩乘そばにたてゝ又休む

立かへるうつの山ふしこさつてよ

都こひつゝひとりこへきさ

行々おもへばすぎきぬる此あひだの山河は夢に見つるかうつゝにみつるか昨日とやいはんけふとやいはんむかしを今とおもへば我身老たり今をむかしとおもへば我心わかし古今をへだつるものはわが心の中懷也生死涅槃猶如昨夢といへるもあはれにこそおぼゆれきのふ過にし跡はけふの夢となり今日此所をすぐる明日いづれの所にしてはと昨日といはん誠にこれ過ぬるかたの歳月を夢よりゆめにうつりぬ昨日今日の山路は雲より雲にゐる

あすや又きのふの雲におとろかん　　けふはうつゝの宇津の山こへ

一とせ夜にいりてうつの山をこえすなりしかは艷なるあやしの庵に立入侍りしか此たひは其花い跡も見へねは

家集　ひと夜れしかやの松屋の跡もなし　　兼好法師

夢かうつゝか宇津の山こへ

〔曙記〕よへ都の事を夢に見しかは

古郷の夢のかよひ路立わかれ　　光廣卿

今朝しもたとるうつの山越

かく嘯て入もて行に山は似屏風と劉禹錫がいひ青巖の形をけづりなすと江の相公のいひし眼にさへぎる花は興有雲かとみえてけふぞさかりとみゆ

見さりしよ我入かたにさく花の　　光廣卿

雲の夢路のうつの山ふみ

故殿「ゆきゝせし頃もしはしの夢の間に又げふこ
ゆるうつの山道」と讀せたまふた
東紀行　ありし世のゆきゝはいつのかれとも　冷泉爲村卿

したふ心も宇津の山道

〔丙辰紀行〕在原業平此山を過し時蔦楓いとしげりて道もなし修行者にあひて歌をよみて言傳ける事人のあまねくしれる事也俗に内屋とも書り

山中回レ首聚ニ吟呻一　遠愛蔦楓秋又春　羅山
今古冥々名與境　業平謂後更無人

宇津の山にて

十團子も小粒になりぬ秋の風　許六
むらさめの奏使や宇津の山　重厚

宇津の山にて

岩鼻や小春を眠る孕猿　木朶

おなしく

めくる日に照らしかへけり蔦もみぢ　祖風
細道や蔦の葉うらのかんこさり　籬島
夏の日急く用ありてあづまのかたへ赴く時
みじか夜をよぶかにたつて夢うつゝ　斑竹

宇津の山邊を走る雲行輿

駿府まで一里半〔東鑑〕文治五年十月手越平太丸子（駿河）
鎌倉に訴へて此所を驛舍にせん事を願ふ賴朝公許して散位親能に命じ内屋沙汰人等奉行して驛舍となる〕

此所に誓願寺といふ禪刹あり　後奈良院の勅願所也
〔東紀行〕河水落るをまつほど丸子にとゝまる卒保の渡り
故殿御下向にも河水まして〻こゝにまた止宿せり
思ひすも宿かるとまりこゝにまた　冷泉爲村卿

ふるとしたふ雨のつれ〻

名産盆山石　丸子の名産として市店に出して沽也
又薯蕷汁世に名高し

乙州餞別に

梅若菜丸子の宿のとろゝ汁　はせを

あるとし此宿にとまりしに名物とてとろゝ汁を出しければ此ところゝじるを句の上にすへて狂歌をよめる

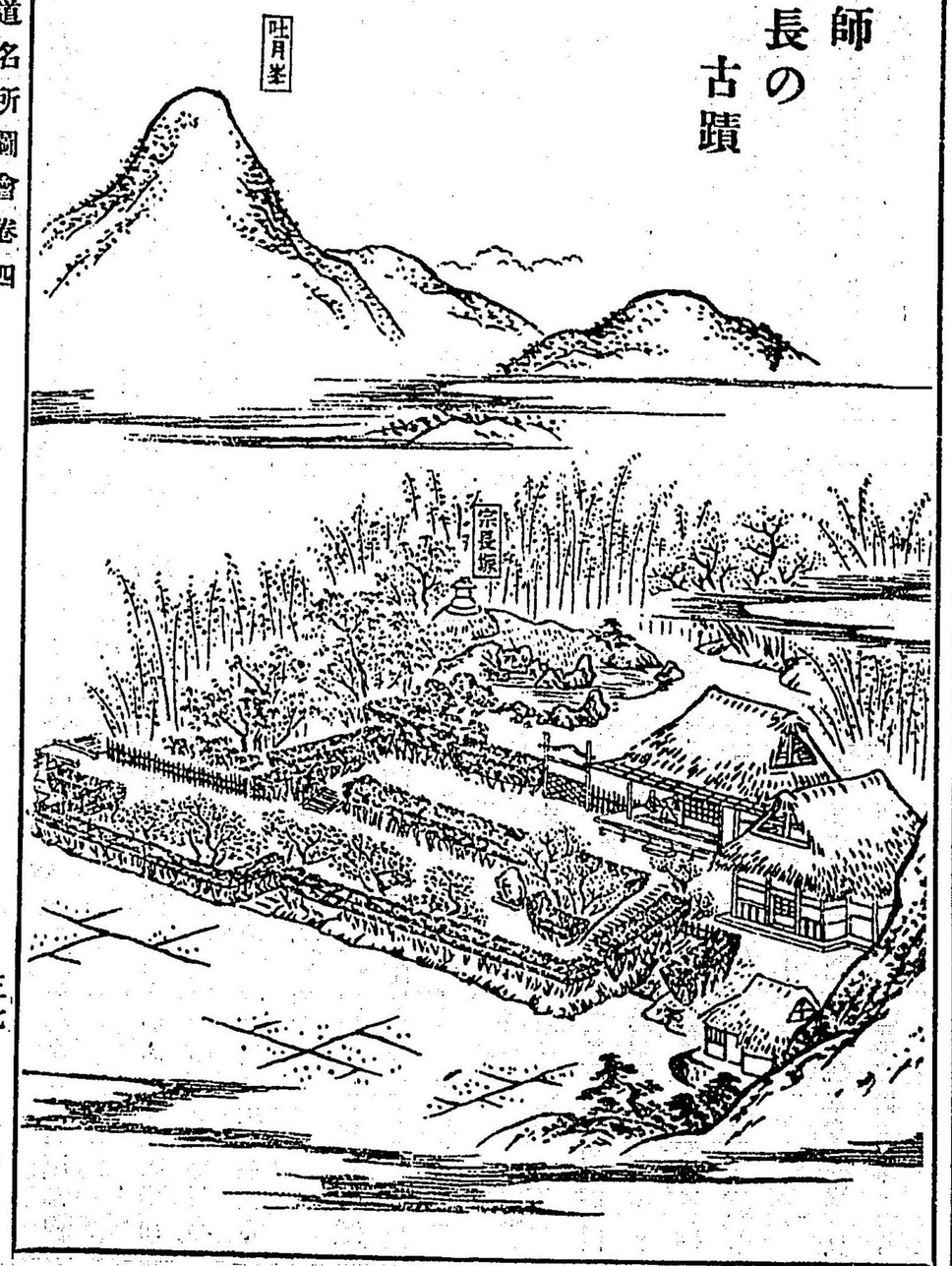
とん〻〻と路次をたゝいて爐ひらきを　湘夕

しらせに來たがるすにぞありける

連歌師宗長古蹟　丸子の西口六町許左の方泉谷にあり天柱山柴屋寺といふ禪刹也宗長を柴屋軒といふ故に寺の名とせり

柴屋軒宗長法師は　後花園院御宇文安五年駿州島田村にて誕じ初して叡智たり國主今川上總介義忠これを愛して左右に近仕する事三年十六歳にして上洛し宗祇法師に謁して連歌を學び世に鳴る十八歳にし

連歌師宗長の古蹟



て薙髪し醍醐普捨院にて 灌頂を遂紫野一休和尚の禪扉を敲て四大本來空を悟り大德寺の山門再興に力を竭し緣を慕ふて風雅に逍遙し諸國に遊ぶ明應四年宗祇法師に 勅有て新筑波集を撰す其中に宗長の唫二十八句あり永正九年今川氏親の招請によつて此泉谷に卜居し菴を結び 自柴屋軒と號し風流を專として常に一節切を愛て老を養ふ閑居幽邃にして西の方に天柱峯聳え東の方に吐月嶺の清輝鮮にして庭中に水を湛ふこれを七星池といふ曾て庭前の風色宗長の好にして庭造の法を洩す老松枝垂て風の音濃なり永正元年初て此廬に住給ふ時

山櫻おもふ色添 ふかすみかな　宗長

終に亨祿五年壬辰三月六日八十五歳にしてこゝに寂す寺に墳あり近隣の騷人懷舊の句を石に鐫て建る事多し書院に什寶あり宗長持念の大悲の尊像人麿の畫影蘆屋釜一節切一管銘を殘夢とよぶ連歌百韻同新式俱に宗長の自筆同影像は狩野秀信の筆宗祇法師の影は青山百助成昭の筆也さればこゝは風雅の名蹟なればゆきゝの旅人道を枉て古を慕ひ英風を欽し嘆息のともがらも多かりき

嘯月亭　藥品川の支流佐渡川といふあり此橋の西より右へ入れば小野藥師堂あり此寺の書院を嘯月亭といふ富士山庭中に見えて 鮮也又安部川をわたる旅人眼下に遮りて風景眞妙の奇勝なり

手越古驛　阿部川の西岸也むかしは驛にして東鑑平家物語などに見ゆ手越ヶ崎此ほとりにありしにや

續古　こく舟はさまもはらはてまかちとる　手越が崎を出る白浪　九條内大臣

紀行　旅人の手越河原をのる駒も　足なみはやくいそく朝立　堯孝法印

千壽前遺蹟　手越にありといふむかし中將重衡囚れて鎌倉に下り給ひしに右大將頼朝卿深く痛りさまゝ心をなぐさめらる此手越の長者が娘千壽前を御伽に付られし也又曾我五郎が愛せし少將といふ妓もこゝより出しとかや

〔平家物語〕中將重衡守護の武士に宣ひけるは扨も只今の女房は優なりつるものかな名をば何といふやら

んと問給へば狩野介申けるはあれは手越の長者が娘にて候が眉目姿心樣も優にわりなきものとて此二三箇年は佐殿に召置れて候名をば千壽前と申す此夕べ雨少し降てよろづ物淋しげなる折節千壽琵琶琴など持せて參りたり（中略）角て夜も漸更て心のすむまゝにあな思はずや吾妻にもかゝる優なる人の有けるよ其何事にても今一聲と宣へば千壽前重て一樹の陰に宿り逢同じ流れを結ぶも皆是先きの世の契といふ白拍子を誠に面白う諷ふたりければ三位中將も燈閨しては數行虞氏が涙といふ朗詠をぞせられける（中略）其後中將南都へ渡されて斬れ給ひぬと聞へしかば千壽前は中々物思ひの種とや成にけん軈て樣をかへ濃墨染に窶れ果て信濃國善光寺に行ひ澄してかの後世の菩提を弔ひけるぞあはれなる

手越河原合戰　建武二年十二月新田義貞矢矧驚坂の戰ひ打勝て手越河原に押寄て東西へ渡しつ渡されつ午の刻の始より酉の下りまで十七度までぞ戰ひけり夜に入ければ敵味方共に人馬を休め河をへだて篝火を燒初めは月雲に隱れて夜既に更にければ義貞の方より究竟の射手をすぐりて敵の陰より敵の陣近く忍びより後陣に控へたる勢の中へ雨のふるごとくこみ矢をぞ射たりける數萬の敵これにあはて騷ぎて跡より引ける間あら手の兵共命をかろくする勇士共是はいかなる事ぞかへせ〳〵と云ながら落行勢に引立られて鎌倉まで落たりける事など太平記に見えたり此時新田義貞勝に乘て鎌倉まで攻寄せなば足利勢はこと〳〵く亡ぶべきをよしなき伊豆の國府に逗留し給ふ中敵に勢つきて却て打まけ登られし事天運とは云ながら殘念なる事ども也

古枯杜　安部川の上藥科川の丘山にあり森の中に八幡宮立せ給ふ

〔清少枕艸紙〕森はこからしの森云々

新古　消ぬうつらふ人の秋の色に　身をこがらしの杜の下露　定家

續拾　秋の色をはらふと見へし風の　杜の梢は雪もたまらす　正三位知家

新後拾　人しれぬ思ひするかの國にこそ　讃人しらず

新續古今　此頃は路も時雨もひまそなき　身をこからしの森は有けれ　雅永朝臣

さそ風のもりの紅葉は

夫木　やよやまて今はかさりの秋の色は　安嘉門院高倉

もみちにかきるこからしの杜

拾遺愚艸　こからしのもりの梢のあさな〳〵　定家

名にあらはるゝ神無月哉

後撰　こからしのもりの下くさ風はやみ　讃人しらず

人のなけさは生そひにけり

〔東紀行〕阿部川を渡る西より東へ流て木枯の杜は西に見ゆるさしも名高き名所也（光廣卿）

建穂神社　古枯森のほとりにあり延喜式内今馬鳴明神と稱して建穂寺の鎮守となる東鑑に見ゆ

瑞祥山建穂寺菩提樹院　建穂にあり眞言宗本尊千手觀音は行基の作此邊にて七躰作り給ふ其一躰也天武帝白鳳十三年に道昭法師の開基なり當山の景勝美にして遠近これを賞す

〔丙辰紀行〕此寺はむかし役行者の草創せしやうにいひつたへり中頃より密家の者移り居て今にいたるまであり

此地元來法界宮　水雲心性似虛空　羅山

吟眸所々不知暮　石徑霜深古寺楓

用宗古城　古枯森の河向ひにありむかしは持船城と書す天正七年甲州方三浦兵部。向井伊賀守籠る同年九月十九日松平甚太郎家忠。牧野右馬允康成馳向ふて攻落す此南に日本坂見ゆる山を越れば花澤の古城花澤觀音堂あり當目の虛空藏へ行道なり

繁山　此所にも曹洞の禪刹あり大窪山德願寺といふ坂路五町登れば方丈あり本尊千手觀音は行基の作七躰の其一躰也

安部川　水源は甲斐の白根といふ上は二流也丸子の方を藁科川といふ駿府の方を安部川といふ八町許河上にて二流會合し街道にては一流となる此地安部郡なるゆゑ總名を安部川といふ河原より盆石出る駿府の町にて賣ふ河上藁科村は京師東福寺の開山聖一國師の出誕の所なり今に後裔ありて近年國師五百年法會にも上京せりといふ此河大井川に双びて歩渡りの大河也滿水の時は河止ありて旅人の難とす東川端を彌勒茶屋とて阿部川餅の名物也

駿府　江尻まで二里廿七町今の府中はいにしへの國府也和名鈔云國府在二安陪郡一云々當城の初は東海道驛路鈴に見えたればこゝに略す

萬葉　佐可故要氏阿陪乃田能毛爾爲流多豆乃等毛思吉伎美波安部左倍母我毛

拾遺　駿盛駿河守にてくたり侍けるに馬の餞し侍るとて　源順

わかれ路はわたせる橋もなきものを　いかてか常に戀わたるへき

續古今　駿盛駿河守になりてくたり侍けるに　清原元輔

しらさりき田子の浦波袖ひちて　老のわかれにかゝるものかは

夫木　さなへとる安陪の田面のむら雨に　中務卿親王

坂こえて啼ほとゝきす哉

寶治百首　山風に空行雲も坂こえて　從二位賴氏

あへの田面に歸るかりかね

阿陪市　今の府中をいふ名物は籠細工。桑細工。紙絹。紙合羽。藍簾細工。懐中練茶。芝川海苔。盆山石。鉢植樹木。閑其外いろ〳〵あり當國都會の府にして商人多し

散木　君かためやよひになれはよつまさへ　俊頼朝臣

阿陪の市路にはゝこつむなり

新撰古五百番　いとゝしくあへの市人さはくらし　民部卿爲明
　坂こへかゝる夕たちの雲　中宮權大夫家方
　こゝろさしあへの市路にたつ人は
　こひに命なかへんとやする

賤機山　府中淺間社の神山也風土記に青葉岡と號すなを古詠多し

續古　今朝みれば霞の衣おりかけて　後法性寺入道大政大臣
　しづはた山に春はさきにけり
風雅　たが爲そしづはた山のなかき日に　正三位知家
　聲のあやおる春のうぐひす
新拾遺　いつの間にしづはた山の初しくれ　正三位成國
　染てもみちの錦おるらん
拾玉　紅葉ちる賤はた山のさをしかは　大僧正慈鎮
　錦をきてやつまを戀らん
堀川百首　散しけるしづ機山のもみち葉を　藤原忠房
　こけ地におれる錦ぞてみる

淺間社　賤機山の麓にあり當府内生土神とす例祭四月初申日十一月同日

家集　しづはたや春らゐ花の神垣は　源氏眞
　春にやはらく光そふらん

『祭神木花開耶姫命』左瓊々杵尊右萬機姫命『總社』社内にあり祭神大巳貴命『奈吾屋祠』木社の側にあり祭神大山祇命

賤機の山もうこかぬ君か代に　後水尾院
　なひくなこやのもりの松風

〔吾嬬路記〕貝原益軒　當社は富士淺間の新宮也延喜年中富士の本宮をこゝに勸請す本社二所北にありて卯に向ふ攝社南に立て巳に向ふ山の宮石壇百四級あり同所南の山に穴ありそこしらずといふ當社の宮つくり美麗なる大社なり日本にて神社の美麗なる事日光を第一とし淺間を第二とすといふ社官は新宮左近總社宮内とて兩人あり

圓山　賤機山の麓にあり福田寺といふ〔駿河記〕慶長五年の頃　國初將軍家此寺に入らせ玉ひ京師圓山に似たるとて尊詠あり

まつ高き丸山寺のなかれの井　幾させすめる秋の夜の月

『流之井』寺邊にあり溪川の清泉也

別雷社　府中西の方にあり一說云延喜式内大歲御祖神社是也とぞ風土記に雷の宮とあり

草京集　れき年やしづはた山のほゝゝきす　太田道灌

り祭神大山祇命

清水　府中安東村にあり慶長年中京師清水寺をこゝに移す木尊千手觀音惠心僧都の作長五寸脇士勝軍地藏毘沙門天を安す一山に櫻多し彌生の開花には幽艶なり

旅行われなゆふかけてとへ

名産阿陪茶　府中の北二里許足久保より出る多くは江戸にて用ゆ上〻方宇治信樂に類す

駿河路や花橘も茶の匂ひ　はせを

足久保觀音　足久保村法明寺にあり此寺曹洞の禪刹也木尊觀世音はむかし大僧正行基七體作り給ふ其第一也其頃門前に大木の楠あり里人これを伐らんとて斧を打ちかけゝるに血汐ながれ大に恐れ靈木たる事をしる行基此國を巡行の時里人かくと告ければ則楠の片われをもつて七體の觀音を刻み近隣の寺に安置し給ふ門前に片破の楠今に繁茂せり

麻機山　府中の北の方一里許にあり今土人淺畑と書す一說に相模國といふ

名寄　夜さもにあさはた山におる物は　讀人しらす
　木々のもみちの錦なりけり

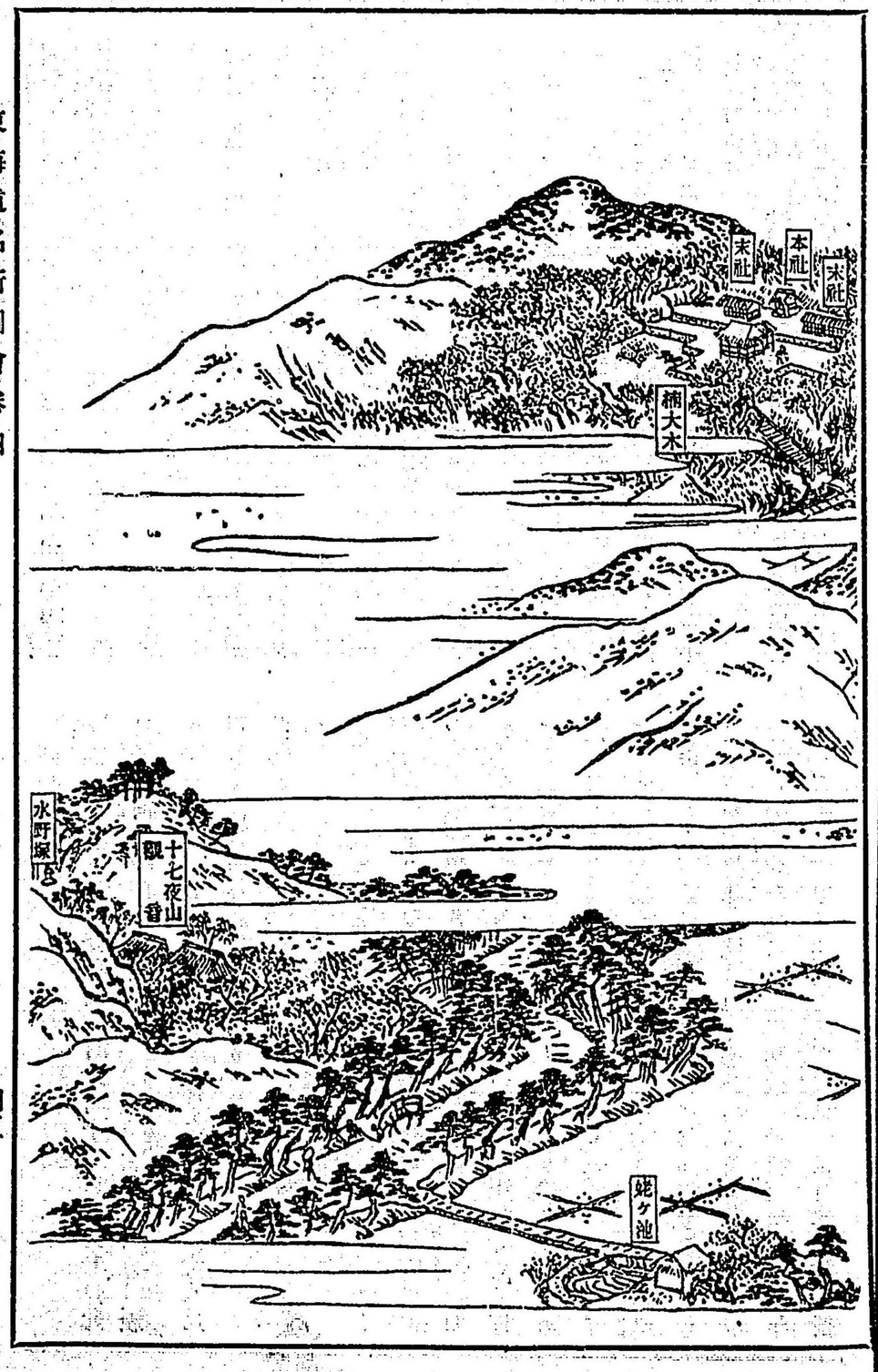
燒津神社　府中の南三里海濱燒津村生土神とす延喜式内也和名鈔の益頭郡は燒津の訛なるべしとぞ燒津は日本記萬葉集等に見えたり古事記には相模國とす

〔日本紀曰〕景行天皇四十年冬十月日本武尊初至二駿河一其處賊陽從レ之欺曰是野也鹿鹿茸多氣如二朝霧一足如二茂林一臨而應狩日本武尊信二其言一入二野中一而覓獸賊有二殺レ王之情一王謂二日本武尊一也放レ火燒二其野一王知レ被レ欺則以レ燧出レ火之向燒而得レ免一云王所レ佩劍叢雲自抽之薙二草因レ是得レ免故號二其劍一曰草薙也叢雲此云二芝羅玖毛一王曰殆被レ欺則悉焚二其賊衆一而滅レ之故號二其處一曰二燒津一

〔古事記曰〕入二坐其野一爾其國造火着二其野一故知レ見レ欺而解二開其嫉倭比賣命之所レ給甕口一而見者火打有二其裏一於是先以二其御刀一苅二撥草一以二其火打一而打二出火一着二向火一而燒退還出皆切二滅其國造等一即着レ火燒故於レ今謂二燒遣一也

〔日本紀秘鈔〕日本武尊東征の御時道を枉て伊勢太神宮に參禮し倭姫命より授らるゝ神劍の甕の口を解

草薙神社



開いて向ひ火を打出し姦賊を滅し退き給ふ靈の事舊本裏書兼文云興あり感あり秘すべしと云々

萬葉　焼津邊吾去鹿兒駿河奈流　阿陪乃市道留相之兒等羽裳

〔神皇正統紀曰〕景行天皇四十年夏東夷おほく叛て邊境さはかしかりければ又日本武の皇子を遣す吉備武彦大伴武日を左右の將軍として相副しめ給ふ十月に枉道て伊勢の神宮に詣て大倭姫命にまかり申給ふ彼命神劍を授て謹ておこたりそと敎給ひける駿河に至るに賊徒野に火を付て害し奉ん事を計りけり火の勢ひ免れがたけるに佩る叢雲の劍みづからぬけて側の草をなぎはらふ是より名を改て草薙の劍と云ふ又火うちをもて火を出してむかひ火をつけて賊徒を燒ころされにき是より船に乘し給て上總に至り轉じて陸國に入高見の國（其所異說あり）にいたりことゝく蝦夷を平らげ給ふ

草薙神社　駿府より二里許東草薙村にあり海道より入る事五町餘鳥居海道に立つ延喜式內有度郡三社の其一座也

『祭神』日本武尊『例祭』正月七日六月十五日九月廿日此日沓形餅を神供とす『末社』△本社の左の方住吉、春日、愛宕、白髭、殿島、稲荷、荒神、天神△本社の右の方內宮、賀茂、牛頭天皇、千安、八幡、山神、淺間『楠大樹』高さ一丈八尺周八丈餘社頭鳥居の側にあり

丙辰　欲下爲二黎民一解倒懸上　東征到處幾山川　羅山
紀行　腰間一自蟠龍動　雲氣吹消蔓草烟

〔社傳〕日本武尊東夷征伐の事日本紀に見えたる如く吾嬬國に下り給ひし時此邊にて逆賊おこり原野に火を放て尊を燒殺さんとしければ尊佩給へる劍をぬき遠かたやしげきがもとをやい鎌のと鎌をもちて打はらふ事のごとく唱へ祓ひて劍をふり給ひければあたりの草こと〳〵くなぎはらはれて夷賊の方へ烟なびき尊は恙もなくまします扨こそ初は天の叢雲の劍と申せしを草薙の劍とは名づけたれ尊を燒むとしたる所をば燒津と號け草を拂ひ給ふ所を草薙と名づけて尊の荒魂を茲に祭る也其後　景行天皇五十三年秋八月天皇群卿に詔して曰　冀はくは日本武尊の征せし國郡を巡視せんとて直に車駕を薙し給ふまゝ伊勢に行幸し東に入て九月二十日こゝに鑾輅を停められて尊の神靈を鎭め給ふ其所を天皇原といふ初は少し西に神社ありしが天正十八年官家の台命によつてこゝに移し再興ある御手洗川は鳥居の東にあり毎年九月廿日は沓形祭とて餅を沓の形にして神供とし社家より產子の家々に配るこれは　天皇の御沓を遺し給ふ遺風也都て社頭及び村中の土地みな黑色の土にして灰の如し按るに逆徒征伐の時草を薙拂ひ向ひ火をもつて戮し給ふ兆ならんと思はれける

梶原景時墳　狐崎の東岩原の左の方梶原山にあり

こゝに靈山寺とて眞言の淨刹あり木尊を大內の觀音とて行基の作の七體觀音の其一體也又峻路を十七八町登れば景時自殺場とて五輪の石塔あり又名馬摺墨馳來りて其時馬の喰ひたる小篠とて壹町の間今に笹の葉半喰ひたるが如く生ず此嶺より國中見えて風景の地也又山中に摺墨馬蹄石髮水石などあり山下に龍泉寺といふ毘沙門堂ありこゝに梶原が像七人の牌あり其外賴朝卿の室政子の持念佛の如意輪觀音を本尊とす

〔東鑑大意〕正治二年正月梶原平三景時當國一の宮に城をかまへしが將軍賴家卿に憎まれ奉りて子息家の子を相具し上洛す駿河の清見ヶ原にて其近所の甲乙人的を射るとて集りしが途中にて行あひ色代もなく騎打しければ人々怪み箭を射けるに梶原此狐崎にてかへし合せて遂に軍に成にける芦原小次郎飯田五郎吉香小次郎などいふ所の武士先に進で戰ひけるほどに梶原景茂等みな討れぬ是より國中の兵ども大勢あつまりて責ければ景國。景宗。景則。景連も討死しけり景時。景季。景高叶はじと思ひ後の山に駈入て腹十文字に掻切て亡びにけり頓て其首をとりて大路にさらしつゝ後には馬の蹄にかけて草村に朽果たり梶原は楫山のふし木の中にして兵術佐殿を助け奉りし陰德によつて賴朝卿天下をとり給ひしかば景時則時を得て威を海內に輝せり殊更辯舌才智ある人なるにより侍大將となつて平家追討の爲に西海に赴き

源廷尉と逆櫓の爭論に面目を失ひ義經を讒しける其酬也と人々申あへり其頃廷尉あるひは範頼源家譜代の良臣多く滅亡しけるはみな北條時政子息義時が姦計によるとぞしられたる

〔光行記行〕尚うち過る程にある木蔭に石を高く積上て目にたつさまなる塚あり人に尋ぬれば梶原が墓となん答ふ道のかたはらの土と成にけりと見ゆるにも顯基中納言の口すさみ給へりけん年〳〵に春の草のおひたりといへる詩思ひ出られて是又古き塚となりなば名だにも殘らじと哀也羊太傅があとにはあらねども心ある人はこゝにも泪をや落すらんかの梶原は將軍二代の國にほこり武勇三略の名を得たり側に人なくぞ見へけるいかなる事かありけんかたへのいきとをり深して忽ちに身をほろぼすべきに成にければひとまども延んとやおもひけん都の方へ馳登りけるほどに駿河國吉川と云所にて討れにけりと聞しがさはこゝにて有けりと哀に思ひ合されける讃岐の法皇廢所へ赴かせ給ひて白峰といふ所にて崩れさせまし〳〵にける御あとを西行修行のついでに見まいらせて「よしや君むかしの玉の床とてもかゝらんのちは何にかはせん」とよめりけるなど承るにまして下さまのものゝ事は申に及ばねどもさしあたりて見るにはいとあはれに覺ゆ

あはれにも空にうかれし玉鉾の　道の邊にしも名をとゞめけり　光行

姥ケ池　海道平川地村田畑の中にありこゝを姥ケ原といふ方三間許の盆池也其側に松榎の古木二株あり里談に云文祿二年二月八日龜氏なるものゝ妻嫉妬深く此池に身を投て空しくなる其怨靈此池にとゞまりて今にゆきゝの人こゝに立寄姥〳〵とよべは涌上りて水音あり又姥甲斐なしといへば彌高く浮涌して泡を出す按するに滯血の水脉此池に淀み聚りて溢沸すると見えたり旱天にも涸すとなん能田圃の養ならん庭中の泉水などにあらば奇逸なるべし又攝州有馬にも妬湯といふものありこれは温泉にして怒沸する事姥ケ池の如し羅山先生の銘あり攝州名所圖會に出せり

有度濱　有度郡の海濱をいふ風土記云久能浦より御穗吳服神社の前に至るまでを有度濱といふ

新古今　うと濱のうとくのみやは世をはへん　讃人しらず

涙のよる〳〵逢みてしかな

新勅撰　いつとなく戀するかなる有度濱の　相模

うとくも人の成まさる哉

駿河守に成て久しうおとつれさりけれは

兼盛集　あやしきはするかのかみといひしより　大中臣能宣

なとうと濱のうとく成らん

返し

有度濱のうときにはあらす田子の浦の　平兼盛

戀しからんを兼てならふそ

久能山　駿府東南三里にあり當山の開基は古人の記行貝原益軒吾孀記羅山子の丙辰紀行等に見えたればこゝに略す

久能の山寺にて月を見てよめる

山家　なみたのみかきくらさるゝ旅なれや　さやかに見よと月はすめども　西行法師

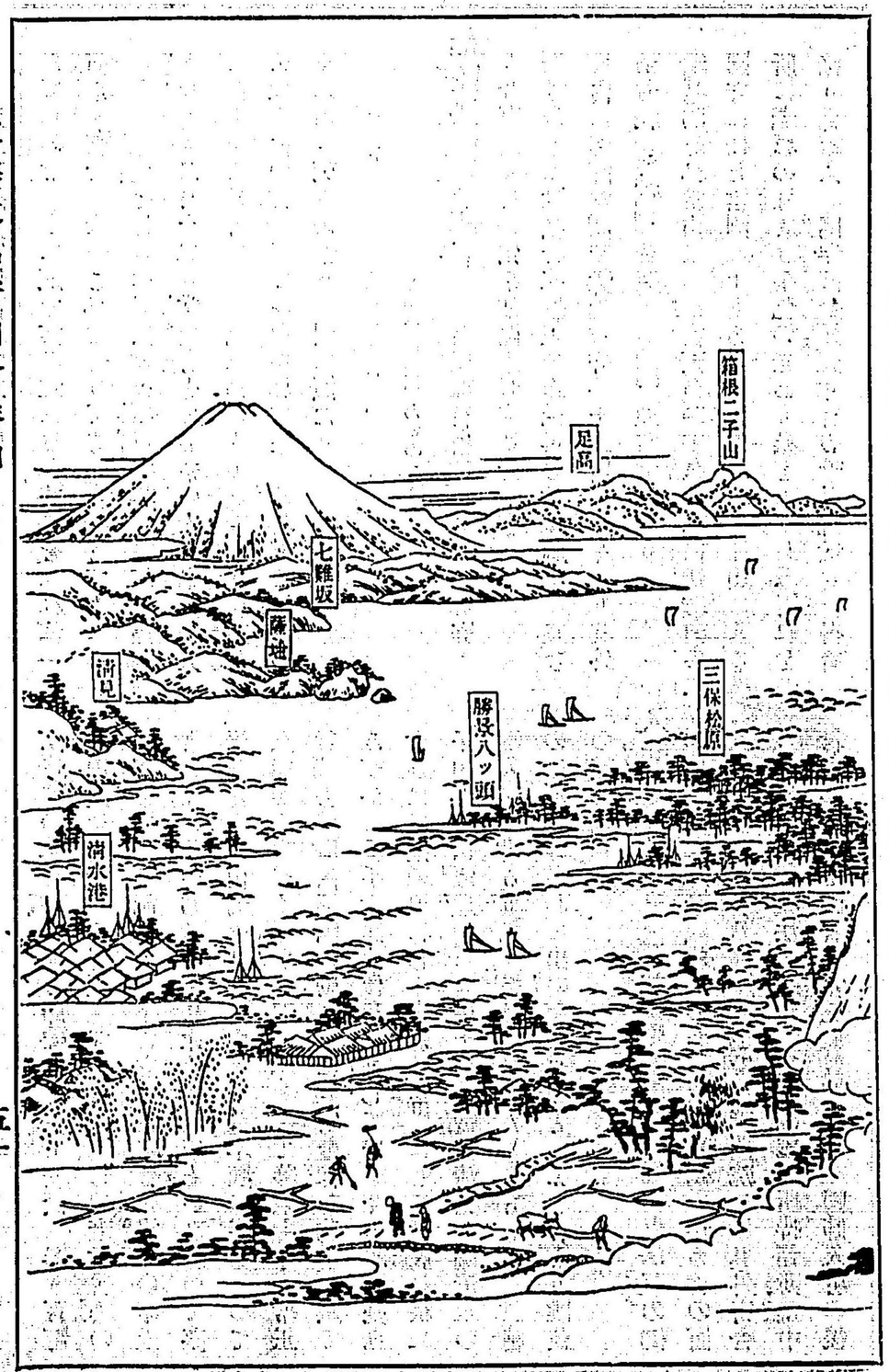
龍興記　あつまよりてらす光のこゝにありて　源左大臣

けふまふてつる久能のみやしろ

丙辰紀行　寂然長隱久能宮　明德惟馨神國風　羅山

偉兆小臣認不及　帝鄉路遠白雲中

〔真應海道記〕宇度の濱を過れば浪の音風の聲殊にこゝろすむ所也濱の東北に靈地の山寺あり四方たかくはれて四明天台の末寺たり堂閣繁昌して本山中堂の儀式をかり一乘讀誦の聲は十二廻中に聞絶る事なく安居一夏の行は採花汲水のつとめ驗を爭ふ修する所は中道の教法論談を空暇の頃に決して利する所は下立の乘生歸依を遠近のさかひにいたす伽藍の名を聞ば行基菩薩の建立土木の風情し本尊の實を尋れば觀世音と申補陀洛山の聖容出現の月あきらかなり大かた佛法興隆のみぎり數百箇歲の星霜ふりたり俗止住のみね三百餘宇の禪房霞ゆたか也雲船の石神山腰に護て惡障をふせぎ天形の木容は寺内に納めて善業をなす千手觀音かの山より石船に乘て此地にくだり給ひけり其船善神と成て山路の大坂に石船護法と號す彼海岸山の千眼は南方より北へ飛て有緣を此山に導き宇度濱の品天面を地に得て舞樂を此濱にまなべりむかし稻河太夫といふ人天人の濱松の下に樂をしらべて舞けるをみてまなび舞けり又人の見るを


箱根二子山
足高
七曲坂
薩埵
清見
三保松原
勝景八ッ頭
清水港

村松
久能寺
豆州天城
駿陽
張安画

みて鳥のごとくに飛で雲に隱にけり其跡をみれば一面形を落せり太夫これをとりて寺の寶物とすよつて其寺に舞樂をしらべて法會を始行す其太夫が子孫舞人氏とす二月十二日常樂會とて寺中の大營也其後天人歸り廻雪は春の花の色みねにとゞまり曲風は歳月の聲と聞ゆよつて此濱を過れば松に雅琴有て波につゞみあり天人の樂を今聞に似たり

袖ふりし天津をとめがはころもの
おもかけにたつあさのしらなみ

補陀洛山久能寺

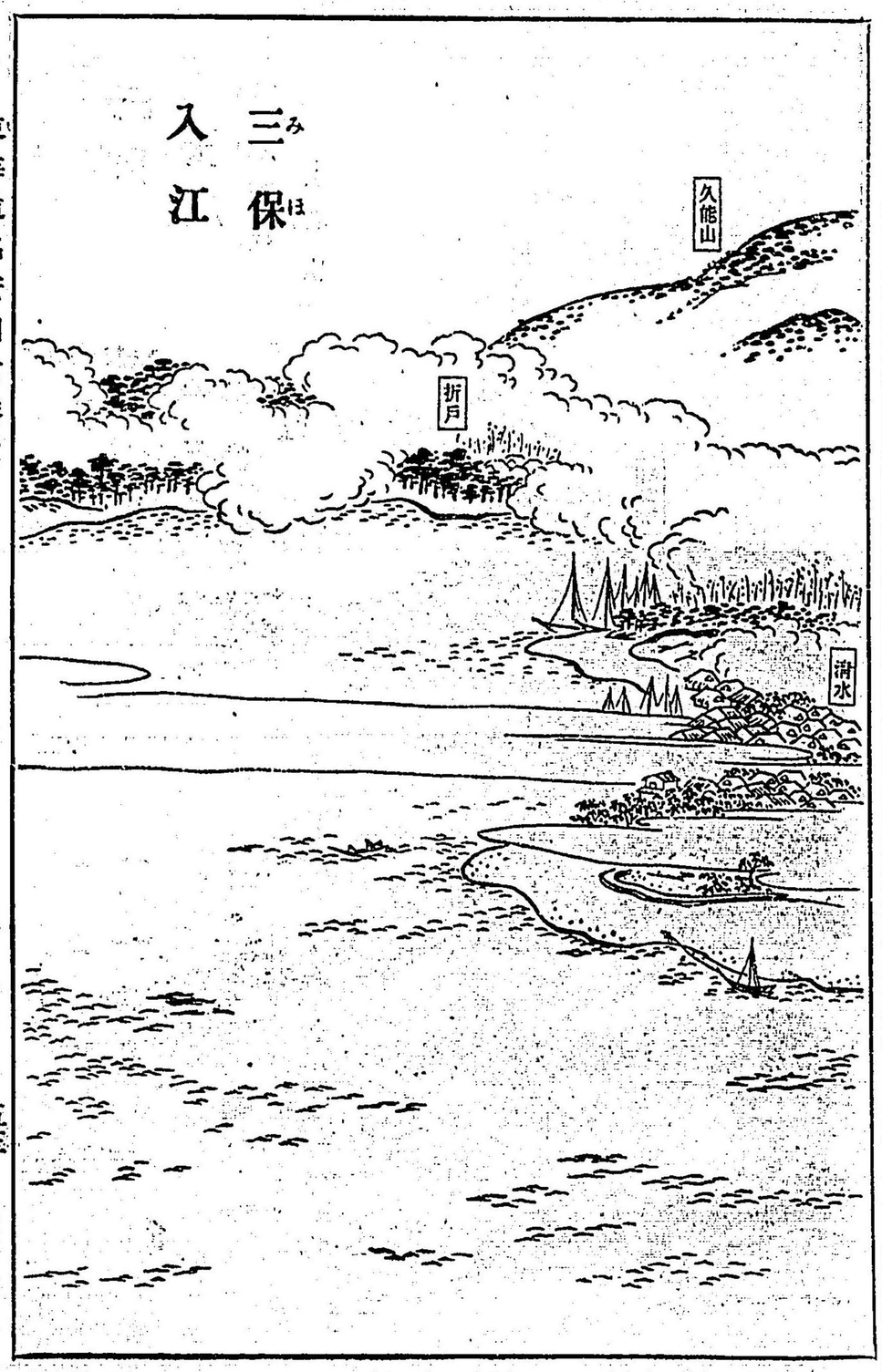
有度郡村松村にあり江尻驛より廿町新義眞言宗來迎院と號す坊舍十宇

『本尊千手觀音』行基僧正の作感得の尊像胸中に藏む境内に藥師堂。閻魔堂。鎭守。十二所權現を祭り其外稲荷祠。荒神祠。鐘樓。二王門。地藏堂等あり

〔寺記〕それ當山は　推古天皇御宇久能忠仁卿駿河の國守に任じ當國に下りある時田獵し給ひ深山に入る所に老杉の株より金色の光あり殆どあやしみこれを探り見給ふに閻浮檀金長五寸許の千手觀世音を得給ふ奇特の思ひ膽に銘じ即佛院を營て安置し奉り百町の田園を喜捨して寺產とすある夜八句の老僧香染の袈裟を掛て久能卿の枕上に立て我は補陀洛山の淨土より度衆生の爲にこゝに永く影現すといひ終つて夢覺む　故に山號を補陀洛山といひ本願の名をもつて久能寺となづく厥后百四十年を歷て養老七年大僧正行基菩薩海内巡國の砌こゝに立寄金像を胸中に藏てみづから千手大悲の像を彫刻して安す今の本尊是也當寺は風景の地にして士峰は鮮にして愛鷹箱根二子山近くは薩埵の行人田子浦の鹽竈清見ヶ關清水の湊入江を走る眞帆片帆漁の船所〳〵にちいさく三穗の松原眞妙にして出崎を八ツ頭といふこれより眺望の隨一也

久能寺什物

『互相御影』二幅八幡宮弘法互の御影也弘法大師筆『龍王の面』天竺釋鶴の作あまの面共云『法華經廿八品』鳥羽院待賢門院初め其外寄合書『翁の面』弘法大師作『笛』源義經所持銘海墨中村式部少輔添翰有『廿五條袈裟』聖一國師入唐の後



三保松原

三保神社

羽衣松

信濃國
善光寺門
左近敬小

そもそも三保の
神はれ
羽衣きや
つるめふうの
浦の松原

開院一品大宰帥
典仁親王

當山に納む其外弘法大師筆。惠心僧都筆。鎌倉啓書記筆。雪舟畫等あり

〔丙辰紀行〕久能山の狀を見るに海岸孤絶の所にて觀音老人堅座の地なれば補陀洛山とも申也壹里餘り東に寺あり久能寺となづく聖一國師藥科の產にて此寺の堯辨法師を師とし台教を學びしが入宋の後達摩宗を傳へて東福寺の第一祖たり世の人尙も久能の爾長老と稱じける宋より渡しける瑪瑙の羯鼓を此寺へ送られける又源豫州も游墨といへる横笛を寄進せられしがいづれも池魚の殃にかゝりけるとなん寺僧の書おけるとて勸進帳のありけるを見侍りしにあら〳〵かくなんありける其外　推古天皇の御時草創せしなどあれど大やう疑しければよく心をとめず忘れ侍りぬ

遊寺幽寺到斜陽　過客居僧談興忘　羅山
ハレ身起此山清淨色　何求無垢在南方

三保松原　三穗或は御穗とも書す三保浦三穗埼等古詠多し駿府より二里東追分村より入て清水の湊まで八町これより入江廿町船にて三保の松原へ着す又陸地は清水より海濱を廻り折戸村を歷て三保へ到る行程一里半餘三穗は西より東へ指出たる洲崎也折戸より三保の洲崎といふまで四十二町九十間南北島幅十九町四十間三保村より島崎まで廿四町四十二間此間に字多し貝島。羽衣濱。洲崎。八ツ頭。渡瀨濱。戌亥尻。宇津久呂等也『風早浦』三穗浦の一名なるべし

萬葉又玉葉
かぜはやのみほのうらはをこぶねの風早之三穗乃浦廻乎榜舟之
ふねびとさわぐなみたつらしも船人動浪立良下

緩古　忘れすよ清見ヶ關の波まより　霞て見へし三ほの浦松　中務卿親王

玉葉　きよみかたふしの煙や消ぬらん　月影みかく三保の浦松　後鳥羽院

風雅　清見かたいそ山寺は暮初て　入日殘れるみほの松原　藤原冬隆朝臣

玉葉　きよみかた浪路の霧は晴にけり　夕日にのこる三保の浦松　平宗宣

新六帖　絶すのみもしほ燒てふ風早の　みほのうらはにけふり立なり　左京太夫信實

鶴山殿七百首
しほ風に夕きり晴てみほか崎　松原とをくすめる月哉　親敎

百首歌合　清見かた夜舟こぎ出て三穗が崎　松のうへ行月を見る哉　中務卿親王

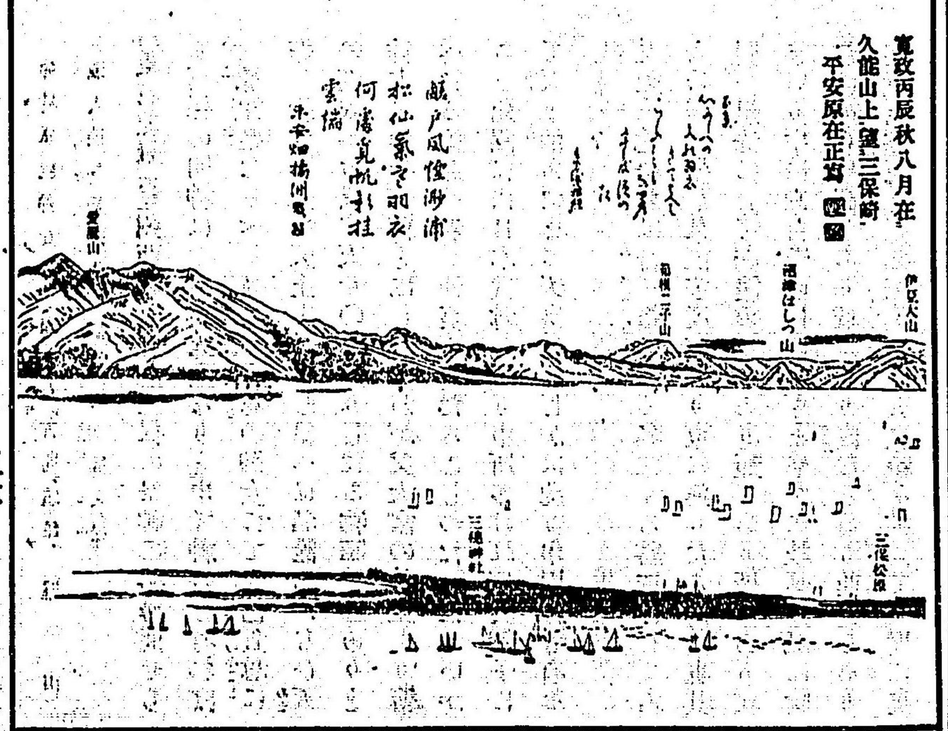
紀行　三穗が崎ほのみる船かくれれど　さなからすゑはきゆる松原　冷泉爲村卿

御穗神社　御穗松原の中にあり延喜式內廬原郡三座の其一也三保村生土神とす例祭十一月中申日

『祭神』〔風土記〕御穗津彥命。御穗津媛命。三穗津彥は大己貴命。三保津姫は其妃なりとぞ二神出雲國三穗ヶ崎よりこゝに遷座し給ふゆゑに三穗神と名づく『牛頭天王祠』本社の西にあり末社に神明。稻荷子安神。白幡祠等を祭る

相生松　本社より一丁西松原の中にあり『古楠』神籬に三株あり俱に大樹なり株の中空虛にして洞の如し

羽衣松　御穗社より東南五町四十間を過て海濱にありこゝを有度濱といふ古松一株ありこれを羽衣掛の松といふ其松の下に石造の祠あり〔風土記〕に三穗の雌宮羽車磯田祠と稱す土人今辨財天と崇む　抑羽衣松といふはむかし天人降りて此松枝に羽衣を脫がけ



じを漁夫ひろひ取て返さず吾妻遊の舞を好し事謠曲にもありて世のしる所也神代に大己貴命天の羽車に乗て妻求め給ふ其羽車を羽衣といひあやまりて天人の事も附會せしにやと貝原吾嬬記にも書り愚案するに羽衣。羽車の事源順の竹取物語より出て古歌にも多く詠り羽車は天子行幸の時神寶を乘するの器なり内侍所西廂に御羽車置あり

式部太輔資業伊豫守に侍ける時彼國の三嶋明神にあつまあそびして奉りける夜讃る

懷拾遺　有度濱にあまの羽衣むかしきて　ふりけん袖やけふのはふり子　能因法師

此歌は伊豫の三島神社に奉りし也

家集　うと濱のあまの羽衣春はきて　今も霞の袖やふるらん　從二位家隆

〔丙辰紀行〕三穂にまします明神は神籍に載る所の美穂神社是也羽衣の松とてむかし天より乙女くだりて此松原に羽衣を忘れしを漁夫のひろひ得たる事いづれの文に有やらんと人の尋ねしにかの能因法師か有度濱に天の羽衣むかしきてとよめるはこれなるべし三保は駿河國有度郡にあればなり

綽約氷肌神女容　問名自古問遊蹤　一題山
漁人洗耳是何曲　仙袂飄々風入松

〔東行紀錄〕尾州亞相義直卿三保の祭神の事尋問せらる三保の明神は　仲哀天皇なりと申す神書を考れば三穂津姫なるべし高産靈尊の御女にて大己貴尊に嫁し給はんとて天上より下し給へは名詮相かなひ天の羽衣かけほす天女の天降りしたる物語是なめりと神主に申せば何とはしらずわが父大宮の神主より傳へたる緣起一卷　仲哀天皇たるよしつたへたりいかさま此國には日本武尊を祀り申所多ければ其御子にて天下治めたまふ天皇なりしかは祀り申因緣も有べしと云々

夫此三穂松原は吾嬬路に於て名たゝる勝地にして古人の秀詠多し久能宇度濱より東に連りたる出島也其間一里餘にして洲濱の長きあり短きあり廣きあり狹きあり中は數百千の松の緣こまやかに枝葉汐風に吹たはめられ高きあり低きあり直なるあり曲れるあり其氣色窈窕として三千の美人紅粉を粧ふて一度に笑

るか如し邈に東北の方を見渡せば名にしをふ富士の高根愛鷹の翠巒前には浮島ヶ原。吉原。浦原の驛。薩埵山。興津川の流れ清見が關清見寺の鐘の聲は悠揚として月に清霜に冴たり田子の浦端を漕船は松の梢を走るかと疑はる北には清水湊喧しく入船あり出船あり漁の家軒をならべて魚賣る聲の囂し南は滄海洋々として大鵬三千里の羽をうつ　俤　あり荒磯浪に青藻刈わらは鮑取る海士潮くむ賤女皆世を渡る業くれのさま〳〵何れかあはれならざるはなし洲濱の中に字あり渡瀨濱。八ツ頭の洲崎。戌亥尻。宇津久呂。貝島など呼ぶ其中央に三穂神社立給ふ社頭は神さびて鬼鐘の銘は羅山子の書れしとかや羽衣の濱には羽衣の松磯田祠ありいと物閑なる海邊也神社の什寶に天羽衣とて羅の長絹なるものあり天人より傳りしとかや漁夫より天人に羽衣を戻しかはりに霓裳羽衣の曲を舞し七寶充滿の寶を降したると謳へばこゝにあるべきにもあらず總じて此松原は廣く隴々として紀の岩代の結び松に倣ふて枝を繞て結びたるも多かりきいかなる祈願ぞやおぼつかなし此松の下には芽薄生繁で松露多く又肉蓯容もありとかやむかしは此松原に野馬あり今も其例遺りて正五九月の十五日には近郷の馬を多く神前に繫ぐ也抑此勝地はむかしより風流の名どころにして士峰を黛は三保の松原を圖するなり然れば三國の名山に相對の名勝なるべし

興津まで一里三町中古江尻城あり甲州山縣三良兵衛或は穴山梅雪もこゝに籠らる甲州沒落の後城廢せり

〔紀行〕かくて日高く江尻の驛につく人の案内にまかせてちかき濱邊にいづ清見潟ふしを見るめはまたぐひなみのそなたの三保の松原見渡す所々を折何に

江尻　駿河

ふじの山　富士見むと汐みつ濱邊のころ日に　冷泉爲村卿
宿立出て松かけをゆく
清見かた　清見かたよせ來る涙の汀より　同
岩城山　岩城山はる〳〵こゝにきて見れは　同
やゝ程とたくまふ友なき
三保か崎　三保か崎ほのみる木末かくれれと　同
さなからすゑはきゆる松はら

清見崎（きよみがさき）

清見寺（せいけんじ）

千五首

清見潟
うき寺の海ふ
やしろ秋い
月ゆかの
ちゆるえ
くり

後成女

清見潟
西ふり
ゆくえ
同し
秋の風
ふく

瀬名川　江尻の驛中巴川の上流也西奈は郷名にて和名抄に出今瀬名村あり川上にて淺畑の沼と瀬名川と落合て巴川といひ橋を兒橋といふ

夫木　せな川の早瀬に見えす行水や　いも戀わたる涙なるらん　前大納言爲家

庵原　此邊の郡名也又廬原とも昔す庵原郷庵原村あり舊事記に廬原國あり駿州志に國後世降て郡となるとは非也むかしは郡縣を國と讀る例多し難波國。廣田國。長田國。初瀬國などいふをもつてしるべし

新千載　清見潟關より外もいほはらの　松こそ浦のへたて成けれ　前中納言有光

新後撰　清見がた打いて丶見れは庵原の　みほのおきつは波しつかなり　前大納言爲氏

夫木　われも又かりねにむすふ庵原の　清見か崎に月もか丶れり　從三位行能

清見關　村老云關の古跡は今の清見寺の門前也といへり八雲御抄には駿河の海邊富士の裾なりと昔給ふ

廬崎　廬原崎の署訓なるべし都て廬原郡の濱をいふ又磯崎ともいふ

續後撰　いほ崎のこゝみの濱のうつせ貝　藻にうつもれて幾世へぬらん　源俊頼

夫木　磯崎のこゝみの濱の友ちとり　朝みつしほに聲さはくなり　藤原定氏

現在六帖　風吹はとはに波こす磯崎の　こゝみの濱は舟もかよはす　前大納言爲家

角田川　廬崎のひかし清見寺の少し西にあり今旗打川といふ土人云足利尊氏薩埵山合戰の時此川邊に旗を打立しよりなづくとぞ伊勢物語の角田川は武藏下總の堺にして江戸也又大和にも角田川あり大和名所圖會に見えたり澄月歌枕には紀伊とすこれは大和紀伊の國堺なれば謬れるなるべし

井蛙抄　都鳥こゝにもあれや庵崎の　角田川原も名こそかはられ　定家

夫木　庵原やすみた河原の磯枕　たひ〳〵見れとあかぬ浦かな　源家長

家集　すみた川河風立て行千鳥　聲も清見か磯傳ふらし　源氏眞

詞花　よもすからふしの高根に雲消て　清見か關に澄る月かけ　左京太夫顯輔

千載　清見かた關にとまらて行舟は　風のさそふ木葉なりけり　大納言實房

續後拾古今　忘れすよ清見か關の波間より　霞て見へし三保の浦松　中務卿親王

新後撰　清みかた雲をはとめぬ浦風に　月をそやとす波の關守　前大納言賢季

新後撰　關の戸はまた明やらて清見潟　空よりかよふさよ千鳥哉　今上御製

同　きよみかた磯山つたひ行暮て　心と關にとまりぬるかな　前中納言有房

同　さすらふる心に身をもまかせすは　清見か關の月をみましや　信正行意

風雅　駒とめて過そやられぬきよみ潟　きよみが關の月をみましや　法橋顯昭

續後撰千載　さやかなる名をはとゝめて清見かた　ちりしく花や波の關守　中臣祐殖

續後拾遺　身はこえぬ心はとめつきよみかた　かたふく月に關守そなき　法橋顯昭

千五百番　あけぬれと波はゆるさす清見がた　いかにすへける關路なるらん　從三位保季

草庵　清見潟關こえすくる旅人の　關路は鳥の音まてと思ふに　頓阿法師

淨見ケ崎　今の清見寺のほとりなるべし

萬葉　廬原乃淨見乃崎乃見保之浦乃　寛見乍物念毛奈信　田口益人

清見川　今の廬原川をいふなるべし

夫木　清見川いつるみなとにしほみては　せかれてたゝぶ浦の入海　衣笠内大臣

清見浦　今の清見寺村をいふなるべし此所に名代の齋藥の店茶店には常に麪類を賣ふ其外魚物の店多し浦はみな汐滾なり

夫木　大かたにものをおもへとするかなる　月は清見か浦の秋かせ　大藏卿有家

清見潟　今の清見浦なるべし潟は以レ澮寫レ水又傾也泄也

新古今　ちきられとひと夜は過ぬ清見かた　波にわかるゝあかつきの雲　從二位家隆

同　見し人の俤とめよ清見かた　袖にせきもる波のかよひ路　參議雅經

風雅　清見かた波をかたしくたび衣　又やはかゝる月をきて見ん　皇太后宮大夫後成

新拾遺　清見かた沖津汐瀬の夕なきに　入日うつらふ三穗の松原　從三位行尹

千首　きよみかた磯うつ波も音そへて　はるかにおくる入相のかね　權大納言爲尹

月清　清見かた波の千里に雲消て　いはしく袖によする月かけ　後京極攝政前大政大臣

〔十六夜日記〕暮かゝるほど清見が關をすぐ岩こす波の白き絹をうち着するやうに見ゆるいとおかし

清見潟としふるいはにことゝはん　涙のぬれきぬ幾かさねきつ　阿佛

ほとなくくれてそのわたりの海近き里にとゞまりぬ
浦人のしわざにやとなりよりくゆりかゝるけふりい
とむつかしき匂ひなれば夜のやとなまぐさしといひ
ける人のこゝはおもひ出らるよもすから風いとあれ
て浪おほく枕の上にたちさはぐ

ならはすよ餘所に聞こし清見潟　阿　佛
あら磯波のかゝるれさめは

〔光行記行〕清見が關も過うくてしばしやすらへば沖の石むら〳〵しほひにあらはれて波にむすぶ磯の鹽屋所〳〵に風にさそはれてけふりなびきにけりあづま路のおもひともなりぬべきわたり也むかし　朱雀天皇の御時將門といふものあづまにて逆謀起しけるこれを平らげんためにうぢの民部卿忠文をつかはしける此關に至りてとゞまりけるが清原の重藤といふ者民部卿伴ひてくんかんと云つかさにて行けるが漁舟の火の影は寒して浪を燒驛路の鈴の聲は夜山を過といふ唐の歌をながめければ民部卿涙をながしけりと聞にもあはれ也

清見がた關とはしらで行人も　光　行
こゝろはかりはとゞめをくらん

巨鼇山清見興國禪寺求玉院　宇度郡興津清見

寺村にあり俗に清見寺といふ禪宗濟家京師妙心寺の末寺なり

『本尊正觀音』座像長三尺客殿に安ず當山いにしへは天台宗なり慶長年中今宗となる

永世孝享　客殿緣側の狹間に掲る額也琉人裔孫朝陽の筆

朝鮮人青　皎月長輝清見寺
螺山人書　芳瓜不斷駿河山

諸佛宅　同所にかくる額也客殿にかくる聯なり琉人裔孫廷翼の筆

『足利尊氏公像』客殿本尊の側に安ず又其側に琉人の牌あり其書に云琉人求玉院大洋尚公大居士又山中に此塔あり『客殿畫』獅子に牡丹狩野探幽筆『開山堂』當山開基關聖禪師の像を安ず世に此禪師を鮪和尚といふむかし此清見浦の漁人丈餘の鮪を漁す則濱邊にて熟んずる所を和尚見給ひ價をやりて買求め法語を授け給へば忽蘇りて頭をふり立光を放ちて海底へ

游ぎかへる淨見の長者此奇特を見て此和尚は凡庸の人にあらず菩薩の化現也とて財寶を多く　抛て此清見寺を再營す今に長者屋鋪とて寺の西にあり諸に作れる三非に至る狂女の住たる跡も此の所にありける『護國禪師像』開山の左に安す第三世と稱じて當山中興とす今川義元の伯父也雪齋長老と號す『自覺聖智禪師像』開山の右に安ず當山第二世とす『龍虎兩軸』書院に掲る軸の物也狩野主馬之助の筆『衝立畫』表糸櫻。裏紅葉。狩野古法眼元信筆『石浮屠一基』客殿の前にあり山梨氏の碑也文略す原驛沙羅樹下白隱叟撰『同一基』當寺門前にあり鐫に云ふ蘆山一居士慶安二己丑年八月十五日生國參州岡崎爲仕官住北之國田中清左衛門尉長世云々寺僧云ふ此人は關ヶ原合戰の時石田光成を捕し人なりとぞ

夫此禪刹は世に名高く前には江海渺々として清月禪心を照し後には山嶺巍々として啼鳥鐘聲に和し祖堂の四君樹は朝鮮木にして四時に花を結ふ其花形毎々に變れるゆゑ此名あり臥龍梅は客殿の前にありて枝の流れ丈餘尺其側に垂絲梅あり早春の頃は匂ひ芬々として羅浮の夢に雪芳しうして拂へども〳〵去らず壽陽公主の粧あり書院の庭中には九段に落る飛泉ありこれを九曲泉となづく庭の前の牛石。虎石。龜石は其形によつて銘ずる也什寶は國初將軍家の鑾輿清見ヶ關の兵器四品あり杁頭、抓子棒。鋺。眉尖刀などの類也其外寶器かず〳〵あり常は清見寺の鐘を聞しと三非の狂女が諷ふ鐘樓も庫裡の前にあり此門前は則東海道にして賑しく卿相の雲客萬國の諸侯多くは此寺に怨を停て詩を賦し歌を詠ずるもあり茶店の前栽はみな鹽濱にして汐汲。鹽竈のけふりいと寂々として風流也こゝはむかしより月の名ところにして須磨。赤石にも双びたる勝邑也謝莊が月の賦に白露空に曖て素月天に流ると贊せしは此ほとりの事なるべし

清見寺十境　當山十一世關棍和尚稿

清音閣　山門

嶒崸高閣倚二祇林一。直對松原十里臨。大海風烟連幔卷。

諸天鐘皷傍レ波沈。鶴邊聲落應眞錫。霜後月明長者金。千歳依然形勝地。將下令中騷客一此投レ簪。

將軍石 在山巓

尊公陣跡澗之濱。石古名存苔自新。鶴唳ニ淝西ニ三十萬。天扶ニ漢運ニ五千人。皷聲合磐城浪。旌旆色迷櫻野春。維昔將軍茲所レ憩。老松風雨鬱蒼々。

清淨觀

海邊花木五雲興。櫻在ニ補陀岸上ニ懸。風靜潮音隨ニ梵唄ニ。天昏樹色掛ニ龍灯ニ。瑤池玉佩空中響。銀漢仙槎月裡昇。坐想人間難レ可レ到。蓬峰鐘磬度ニ崚嶒ニ。

分境亭 在山巓

絶頂樓閣霄漢間。清秋此日一堪レ攀。洲前暮色三峰雪。樹杪人家四水灣。引雨纔分龍爪嶺。凌波欲レ動鷲頭山。雄風須レ賦披袷客。不ニ是園臺一興距閑。

三保

平楚蒼然浮ニ海潮ニ。中存ニ古廟一蒼蒼々。羽衣松掛ニ烟霞色ニ。鳴浦波連ニ鳥鵲橋ニ。日暖千帆如ニ雪點ニ。雲飛四面似ニ山朝ニ。夕陽一半漁村晚。天樂時聞月裡簫。

利生塔 客殿西云ニ北塔壇一

湧ニ出瑠璃界ニ。塔標落ニ海中ニ。攀レ梯過ニ鳥道ニ。卷レ幔倚ニ龍宮ニ。咫尺天城雪。烟霞巴水東。勝因隨ニ所化ニ。色相是眞空。

巖腰亭 觀音堂名

亭子藤蘿外。潮光戸牖間。魚龍吹レ浪出。舟楫傍レ欄還。驛樹橫沙月。徐霞當目山。原耽ニ詩思一瘦。早晚此占レ閑。

九曲泉 庭中湧布

九曲懸崖上。銀河下ニ碧霄ニ。潺々穿ニ樹杪ニ。細々落ニ芭蕉ニ。疑レ入ニ匡廬岳ニ。也攀ニ烏鵲橋ニ。許由不レ洗レ耳。此地無ニ煩敵ニ。

袖子浦

鴈影橫沙晚。淚痕袖浦濤。蘆花連ニ斥鹵ニ。紅樹照ニ林皐ニ。江白風頭促。月低船楫高。凄其多ニ旅思ニ。砧杵搗ニ綈袍ニ。

田子浦

三保從レ西出。正東田子洲。江雲分ニ駿豆ニ。

嶽雪照ニ春秋ニ。山向ニ五原一起。波連ニ七澤一流。漁樵風化在。猶詠古人謳。

〔春曙記〕今日は清見寺に尊輿をとめらる春の夕波靜にむかひに三保の松原見へ渡りてその景いへはさらなり

舳風のかすみもはてす清見潟　なみに波しくみほの松原　光廣卿

悪詩などいくちのうそとやらんの樣に作りて住持に見せければ出られて和韻有

絶妙新詩聽更佳　推敲酬和隔天涯　大梁和尚
芳聲驚レ世京花客　囑レ月吟レ風伸ニ雅懷一

かくいへるを聞しめして御前にめす所に付たる御物語なとあり即興の發句つかうまつれとあれは

月よいかに思ふ春の名清見かた　送芳
かすみひきそふ遊のゆふ波

かくさま〳〵夜更るまでおき居させ給ひてとはかり有て御詠

名にめてゝ今宵は月を清見かた
うら波とかくよし復さも

清見かた一夜はあかす鐘の聲　惡詠

月もおほろのなみのまくらに

此紀行は寛永十二年の頃二條殿の左相府若公烏丸亞相光廣卿などおほやけの御使に吾妻へ赴き給ひし紀行を春のあけほのといふなるべし

〔丙辰紀行〕清見關は延暦の頃奥州の逆賊高丸駿河國まで攻入この關に陣をとりしを坂上將軍討破りて高丸奥へ退し事久しければ語りも傳へ侍らず此所に寺あり京なる惠日山の爾長老聖一國師の弟子開創この寺をひらき清見寺と名づけ又は巨鰲ともいへり近頃妙心寺に屬するやうに聞へ侍る

經歷巨鰲山　入門心自閑　禪徒今住寺
寇賊昔攻關　三保窺檻裏　大洋机案間
起糧征馬去　斜日照人顏　羅山

〔貞應海道記〕清見が關を見れば西南は天と海と高低ひとつにまなこをまどはし東北は山と磯と嶮難同じく足をつまだつ磐の下には波の花風にひらく春のさだめなく峰のうへには松の色みどりを含て秋をおそれず浮天の波は雲を汀にて月のみふね夜出て漕沈陸の磯は磐を道にて風の使脚あしたに吹てすく名を得

たる所かならずしも興を得ず耳に耽る所かならずしも目にふけらず耳目の感ふたつながら得るは此浦にあり浪に洗てぬれ〳〵屋に道をとへば松風空しくこたゝふ岸柳にくるしみを尋れば擂花變じて石あり關屋の邊に布たゝみといふ所ありむかし關守の布をとりたるが積りて石になりたると聞ゆ

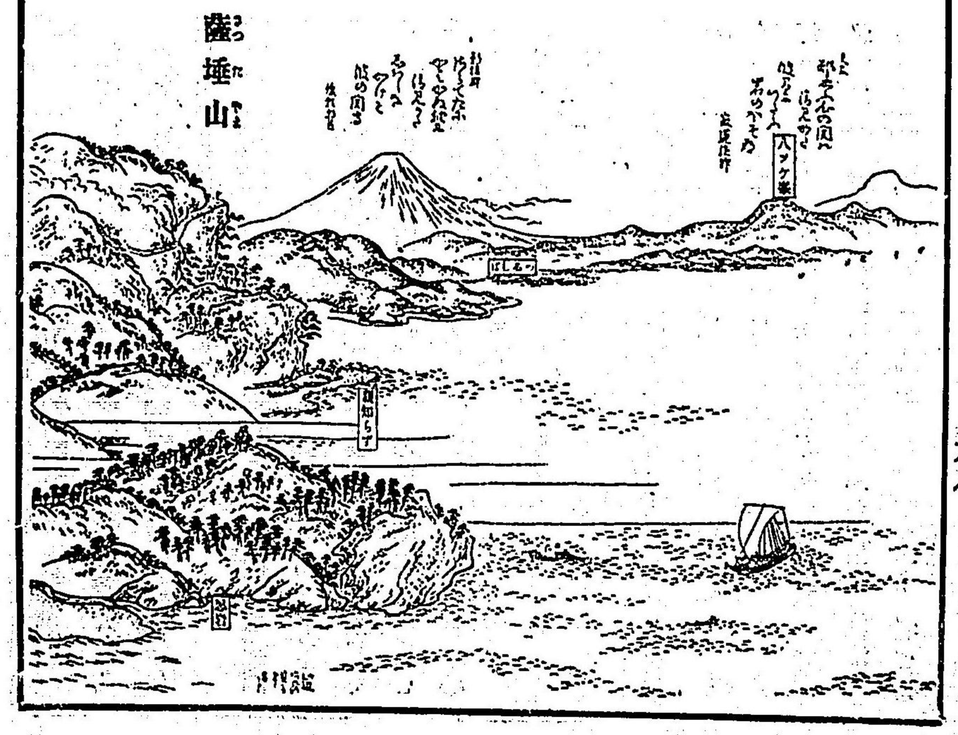
吹よせよ清見うら風わすれ貝
　　ひらふなこりのなにしおはゝや
かはらはやけふみるはかり清見かた
　　おほはし釉にかゝる涙は

駿河　興津

和名鈔に息津と書す或は奥津又は沖津などとも書り由井まで弐里拾弐町此道は山水の風景眞妙にして東海道第一の勝地也名産興津海苔

夫木　おきつかた磯れにちかき岩枕　　源光行
　　かけぬ涙にも釉はぬれけり

甲州身延山道　興津驛左の方に法華題目堂あり是より身延山への參詣道也麓まで十三里餘其道法は興津より宍原まで四里八町萬澤まで三里南部まで三里身延山麓まで三里こゝに於て諸堂を巡拜し日蓮上人



眞骨寶塔へ詣し奥院まで五拾町此の道に諸堂多し奥院より赤澤村まで五十町赤澤より泰氣川を渡り七面山一の花表まで廿町餘一の花表より神前まで五十町坂路嶮岨也又江戸より詣するには富士川の西爪岩淵より入る萬澤まで六里餘也萬澤より身延山まで京江戸共に同じ街道也富士川より身延山まで都て十一里なり

興津川　驛の東にあり又浦田川ともいふ此川瀬にて初夏より中秋の頃まで鮎を漁する事多し至て美味也川の左に女體森辨天祠あり

夫木　清見かた月にむかへるおきつ河　　權僧正承覺
　　流るゝ影や海にいつらん　　イニ水鏡

明玉　波たてるくぬぎが陰に駒とめて　　法親王
　　興津河原にしはし涼まん

家集　海にいつるみなとはおなじ興津河　　參議雅經
　　たへすや瀬々の網深くして

〔十六夜日記〕興津の濱に打いつなく〳〵あとの月かげなどまつ思ひ出らるひる立入たる所にあやしきつけのをまくらありいとくるしけれはうちふしたるに

すゝりも見ゆればまくらのしやうじにふしながらかきつけつ

なをさりに見るめはかりをかり枕　　阿佛
　　むすひおきつと人にかたるな

古奴美濱　興津の海邊をいふなるべし

緩後撰　跡たへて今はこぬみの濱ひさき　　家隆
　　幾よの涙の下に朽なん

新拾　頼めてもこぬみの濱の沖津風　　能登法師
　　なにいほ崎の松に吹らん

續古新　駒なつむ岩木の山を越かれて　　定家
　　人もこぬみの濱にかもれん

續千載　我袖にうちはの波はかくれとも　藤原資明
　　さひしこぬみの濱の名そうさ

岫崎　與津川を渡りて薩埵山の海岸をいふこれ古の海道也仙覺抄萬葉の註に清見ヶ崎は今の岫崎也と云々此道は岩石多くして高浪打よするゆゑ容易に通り難し壹騎打の道にてゆき〻の人更に跡を顧るに暇なし扨こそ親しらず子しらずの名あり越後國糸魚川の邊にも此名あるは同じく浪打際也此所の中道は明暦元年朝鮮の信使來りし時はじめて開かる上道は近年開かれて旅人の難を助く今の海道是なり

〔光行記〕くき崎といふなる荒磯の岩のはさまを行過る程におきつ風はげしきに打よる浪もひまなければいそぐしほひのつたひ道かひなき心地してほすまもなき袖のしづくまではかけても思はざりしたびの空ぞかしなとうちながめられつ〻いと心ほそし

おきつ風けさあら磯の岩つたひ　光行
　　濡わけ衣ぬれ〳〵そゆく

夫木　波の花くきが崎よりちりくめり　堀川院中宮上總
　　こすゑも見へす風のはやきに

新後撰　清かに見た浦風寒きよな〳〵は　院大納言典侍
　　夢もゆるさぬ濱の關もり

〔藻鹽艸〕浪の關守と申は今の世に久岐賀崎といふ所也いにしへは此道を通りけるにしほみちぬればゆき〻の人立もとほりて女波男波をかぞへて小浪よする時かよひけるゆへに浪の關守とも浪の關の戸とも申ける

〔貞應海道記〕岫崎といふ所は風飄々と飄りて砂をまはし波浪々とみだれて人をしきる行客こ〻にたづさはりてしばらくよせ引浪間をうかゞひて急き通る。ひだりは峻岳の下と岩のはざまをしのぎ行右は幽なる浪のうへをのぞめば眼うけぬへしはる〳〵とゆくほとに大和田浦に來りて小船の沖中にたゞよへるを見る飄帆飛て萬里風便をたのみて白煙に入鷁波うごきて千雲夕陽をあらひて紅藍にそむ海舘のうちに此所をのみとめて身をばとゞめず

わすれしな波の面影立そひて
　　すくるなこりのおほわたの浦

此大和田浦は駿州志に云古へ菟崎より持船村小坂村のほとりまでに入江の湊ありて大和田浦といふ後世うつもれて陸地となりぬ今大和田新田ありと云々同名近江國攝津國にあり近江は志賀郡坂本にあり攝津西成郡の内神崎と尼ヶ崎のあいだにあり駿州志に大和太濱は兵庫津の古名也大坂入津の船まづこ〻に泊る古より然り故に萬葉に千船の泊ると讀りと書しは非也萬葉の大和田は大坂より武里餘乾にして兵庫とは十里ばかり東なり今の大坂廻船の水門にならざる已前は萬葉に讀し如く大和田。神前。江口などみな千船のとゞまる湊也大坂へ入船して水門となりしは豊臣秀吉公已後の事也

袖師浦　〔風土記〕烏度濱より東を袖師浦と號す又或が云袖師浦は江尻より横須賀までをいふと也又袖師洞といふは今の洞村をいふならんか出雲國に同名ありて古歌はみな出雲を讀り此袖師浦は古詠聞えず

磐城山　今の薩埵山をいふ右にいふ今は上道往還也いにしへも此上街道ありしが古詠多し

萬葉　磐城山直越來益　磯崎乃

新六帖　つれなさはいはきの濱のしき波の　許奴美乃濱田舎立勝侍　衣笠内大臣
　　何とこゝろをかけはしめけん

歌合　磐城山こえてぞ見つる磯崎の　法性寺入道前關白
　　こぬみの濱の秋の夜の月

家集　山の名の岩木も哀しら波の　源氏眞
　　きよみが月をおろす秋風

薩埵嶺　磐城山の峠也西の麓を洞村といふこれより登れば切通し坂女夫坂葛籠坂牛房坂山神平これが峠也武軒茶屋。蜂か澤。貳番坂。壹番坂を經て東の麓西倉澤に到る中古地藏薩埵の像此濱より漁夫の網にかゝりて上りしより薩埵山といふ此峠より左の方五町に薩埵村ありて村中東勝院の地藏堂に此尊像を安置すといふ

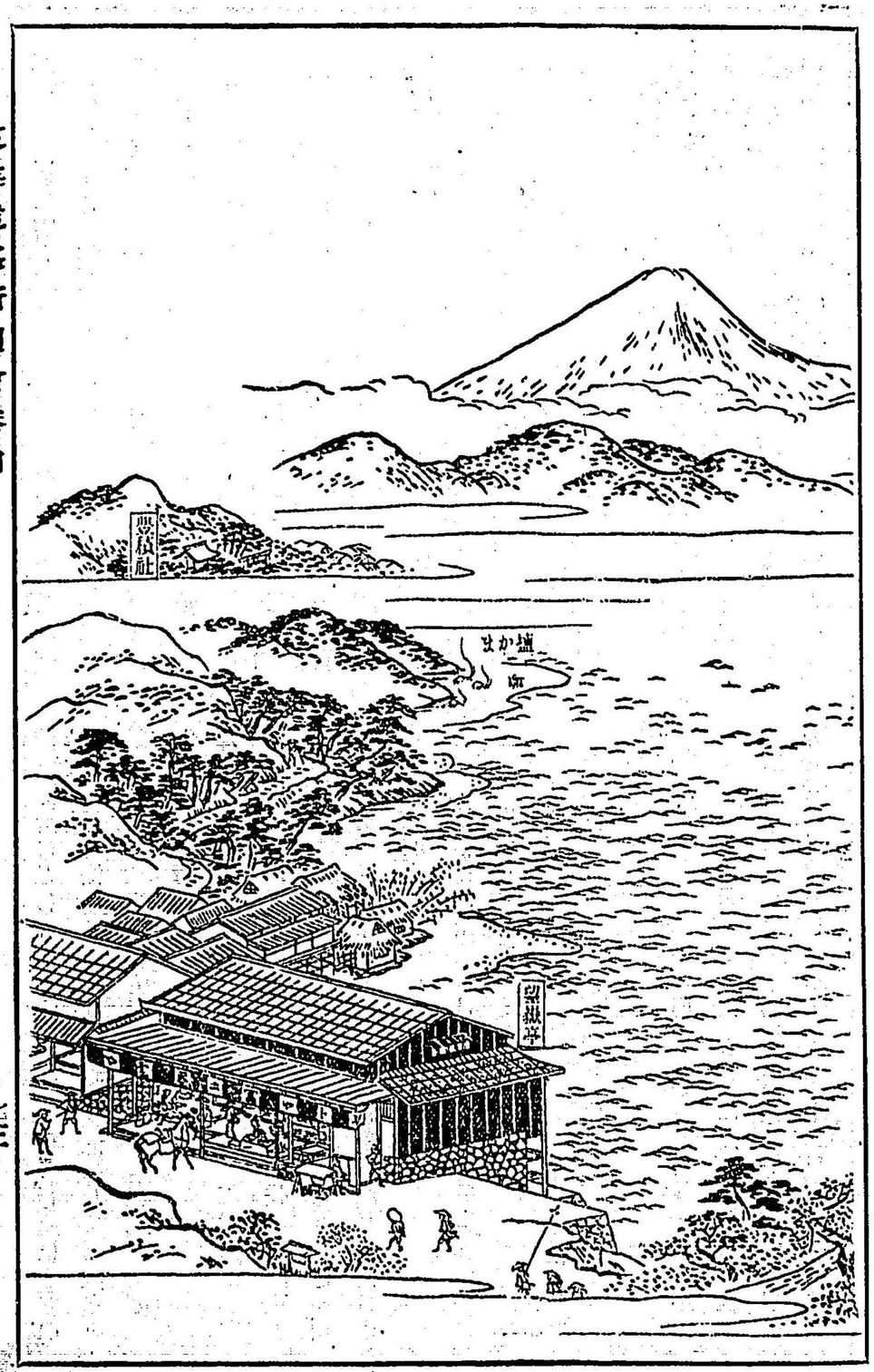
鮑とる女房を呼ん春の海　九鯉

それ此嶺は絶景にしてまづ寅の方には富士の高根白妙にして時しらぬ雪をあらはし卯の方に愛鷹山巳の方には伊豆の岬酉の方には三保の松原みな鮮に見えわたりて前には江海渺然として長閑き春の波間に鮑とる海士榮螺掘漁夫夏は磯邊の螢飛かふけしき初

薩埵山

東麓
西倉澤
茶店

此所富士山鮮に見えて東海道第一の風景なるべし



鴈の渡る影は雲と水との中に消て浦の苫屋の秋の夕ぐれにこゝろを傷しいさゝ波にむれゐる小夜千鳥の聲すごく氷と見ゆる冬の月かげいと寒しこゝはむかし覯應の頃かとよ足利のおとゝひ此山に戰ふ直義のぬし利なくして數十萬騎の兵を一時に慶しの計にのりて二三里のあいだは修羅道の苍となりて 蹤腥く屍は路を塡みしと太平記にも署してこれを薩埵山の合戰といふ其中に書し櫻野も此山續きとかや又小田原北條と甲斐の武田と爭ひしも此山嶽なり抑薩埵嶺の崔嵬たるはむかし清見關の要涯なりと云傳へしも宜ならん今は太平を凱ふ 聖代なれば干戈の音永く絶て禮樂と變じ貴となく賤となく足を躊躇してこゝの風色を賞じ歌よみ詩つくりて過行人も多かるべしとぞしられける

名産榮螺鮑 薩埵山東の麓西倉澤茶店に榮螺鮑を料理て賣ふなり此茶店海岸に崖造りにて富士を見わたし海面幽邈にして三保松原手に取る如く道中無双の景色也茶店の中に望嶽亭といふあり遠近人立寄て詩歌俳諧などしるして此亭に遺す事多し此ほとりの賤女出汐を汲みあるは鮑拾ふ體風流にして奇觀なり

豐積神社 菴原郡町屋原村にあり延喜式内鳥原より社前まで櫻多し

『祭神木花開耶姫命』社說に云むかし 天武天皇御宇勸請其後大同元年坂上田村將軍東夷征伐の時祈願として再興あるむかしは官幣祭祀も立しなりとぞ今川義元駿府在城の時常幣社司となる例祭四月初酉日十一月初酉日此日饗應の神式あり

駿河 由井 油伊或は由膳又は湯居とも書す蒲原まで一里家續きにして鹽燒多し

由井濱　山崎閑齋

輕風湯井堰　ノ〳〵掉三漁船一　借問莫二膠西一　無情鹽竈煙

蒲原古城 蒲原の西向田村の左にあり永祿中小田原北條新三郎綱重を首將として狩野新八郎義忠清水上野介正令笠原新六郎秀範多目周防守長宗荒川豐前守國清など籠りし也永祿十二年十二月六日武田信玄大軍にて押よせ家臣吉田左近介兼宣落合市之丞初鹿傳右門等一番に城に乘込戰ひける北條方利なくして數千騎討れ終に落城しけり

駿河 蒲原 神原とも書す吉原まで二里三十町富士川まで壹里八町此驛東立場より少し北の方に七なん坂といふありこゝに清水あり土人源義經硯水と云又右の方に吹上けの濱といふありこゝに六本松とて淨瑠璃姫の塚あり里談曰むかし此姫矢矧の宿より判官殿を戀慕ふて陸奥へ下る時こゝに到り疲れて死す里人憐て葬り塚の印に松を六本植置たり天正の頃小野於通といへる風流の妓女淨瑠璃姫の生涯の事を書つらね十二段とし薩摩といへる傀儡師にをしへて節をつけ語らせける是淨るりの中祖也於通は眞田氏にて豐太閤の御前へも出て舞諷ひしとなり

富士川 駿河富士郡にあり郡名によつて名とす日本紀不盡河と書す水源は信州八ヶ嶽より流れ甲州に到つて諸流會して大河となる末は海に注ぐ第一の急流也河の幅水の增減によつて際限極らず常流には船わたし滿水には船とまる也

懷古　船よはふ富士の川波に日は暮ぬ　夜半にやすさん浮島が原　藤原基政

今　

同　ながれてと思ひし物をふし川の　いかさまにしもすますなりけん　知家

續後撰　朝日さすたかねのみ雲空晴て　たちもおよばぬふじの川霧　家隆

新後撰　雨はる〳〵高根は空にあらはれて　山もとのほろふしの河霧　親入道二品王性助

夫木　浮島に竹のよりつな打はへて　をふねならふるふしの川波　法眼慶融

同　岩はもえふもとは氷るふし川の　われも浮世をすみそわつらふ　清原深養父

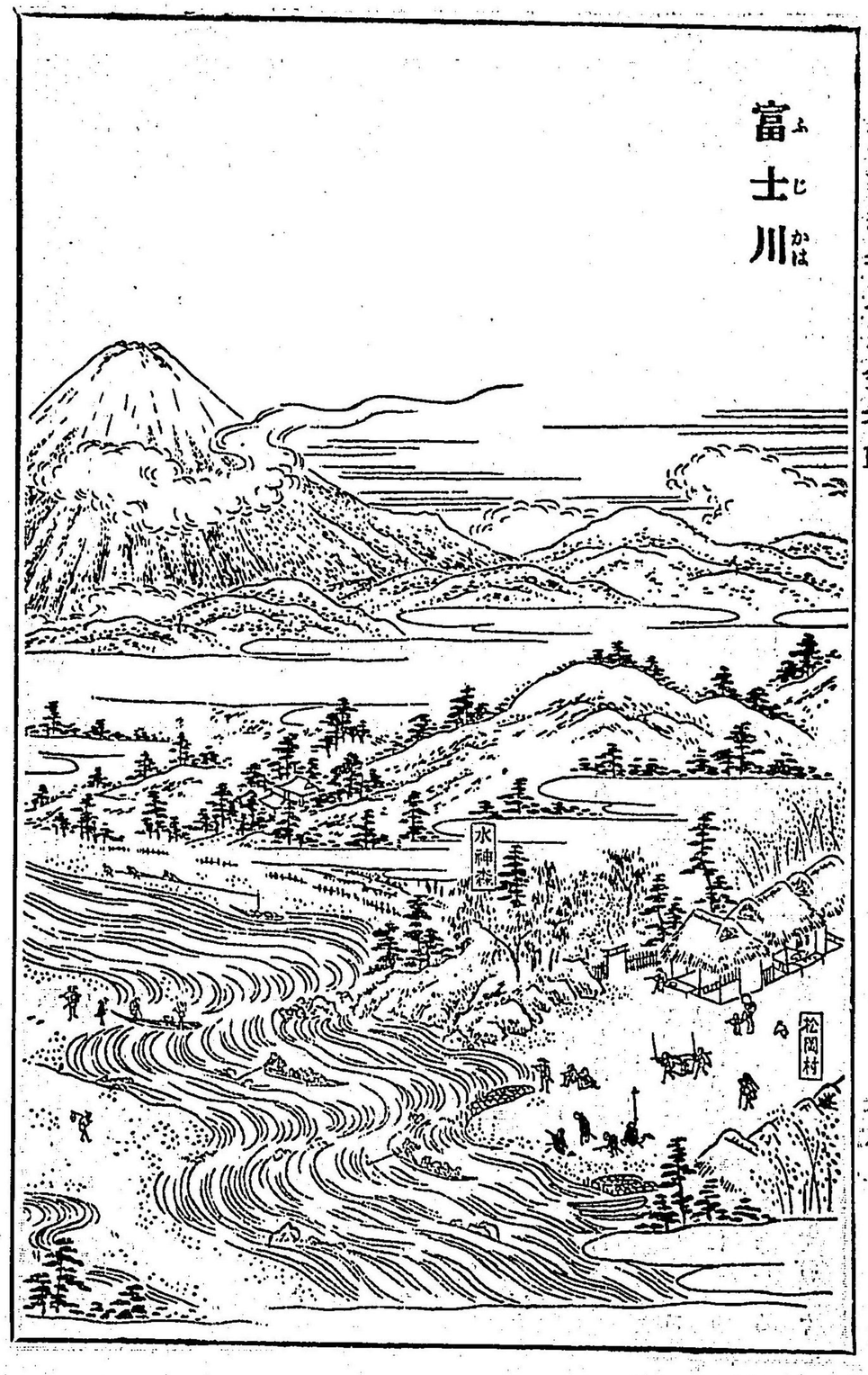
家集　夏もなを雪けの水の末なれは　富士の川すそ冬こゝ地すれ　源三位頼政

同　吹おろす雪かと見れは白妙に　まさこそなひくふしの河風　前大納言爲家

同　あはんとは思ひわたれとふし川の　つねにすますは影も見えしを　凡河内躬恒

〔貞應海道記〕蒲原を立てはるかに行ば前路に進みさきだつ賓は馬に水かひ後河にさがりぬ行程にさがりくるをのれは野に草しきてまたこぬ人をさきにやる先後のあはれは行旅の習ひにも思ひしられて打すぐ

富士川（ふじかは）



る程に富士川を渡ぬ此河中にこそ石を流す巫峽の水のみなんぞ船をくつがへさんや人の心は此水よりもさかしければ老馬をたのみて打渡る老馬〳〵汝は智有ければ山路の雪のみにあらず川の底の水のこゝろもよく知りにけり

音に聞しなたかき山のわたりとて
底さへふかし富士川の水

〔東紀行〕夜あけて此里を出たつ富士川の水深ければけふも蒲原までと人〳〵いひさわぐきのふやう〳〵安陪川を渡りてけふ又川水のみかさにとゞめられぬるいといぶせしされと富士の根をきのふはれまに見そめずは今朝立道の雨やうからんこゝに日をさへかさぬ

清出てはる〳〵高根をいつかみん　冷泉爲村卿
渡りになづむ富士の河舟

十一日漸〳〵水落たるよししらせあれば出たつまた雨ふり出れば

富士川のわたりまちえて出つれと　同
はれぬ高根で雲にうづめる

〔丙辰紀行〕我國に名を得たる大河はあまたあれどことに富士川は海道第一の急流也舟に乘てわたるに渡し守ちからを出して竿をさし櫓を押出す時岸より見るものはあはやと危うく思ひ船中の人は目まひ魂の消る心地しにける

往來停レ馬此踟躕　天下滔々豈獨吾羅山
河畔爲レ道名利路　陪陵慙愧一樵夫

『水神森』富士川右の山際にあり巖上に松柏生茂れりむかし此川筋定らず或は岩本の下へ流れあるひは數多の支流と成て水神の森河中の瀨となる事もありしゆゑ其あたりの人此水難を歎きしにより八十年前より長堤を水神の巖に築つけたり此已後水筋定りて洪水の時は此堤の内にて流水を湛へしゆゑ水難なし其ところを土人稱して袋堤といひならはしける

富士川水鳥古蹟　富士川の東に壹里許の大沼ありこゝに水鳥多く聚るとぞ

〔丙辰紀行〕に平氏鳥の羽音に驚て逃去しは富士沼の事にて今の善德寺は其所也と云々〔駿河記〕に善德寺

村今は今泉といふ今の吉原の北に有其地に平家越と云所あり治承の亂の遺跡也とぞ

〔東鑑〕治承四年十月廿日己亥武衛令レ到二駿河國賀島一給又左少將惟盛。薩摩守忠度。參河守知度等陣二于富士河西岸一而及二半更一武田太郎信義廻二兵略一潛襲二件陣後面一之處所レ集二于富士沼一之水鳥等群立其羽音偏成二軍勢之粧一依レ之平氏等驚騷爰次將上總介忠清等相談云東國士卒悉屬二前武衛一吾等悉出二洛陽一於二中途一已難レ遁レ圍速令二歸洛一可レ搆二謀於外一云々

〔平家物語〕去程に右兵衛佐殿謀叛のよし風聞ありしかば福原には公卿僉議有て今一日も勢の付ぬ先に急ぎ討手を下さるべしとて大將軍に小松權亮少將維盛副將には薩摩守忠度侍大將には上總守忠清を先手として都合三萬餘騎治承四年九月十八日新都を立て明日十九日には舊都に着し同き廿日東國へこそ赴かれける（中略）十月十六日には駿河國清見關にぞ着給ふ都をば三萬餘騎にて出たれども路次の兵付副て七萬餘騎とぞ聞へし前陣は蒲原富士川に進み後陣は未だ

富士川水鳥
劫二平家大軍一

手越宇津の屋に支たり（中略）大將軍維盛東國の案内者とて長井齊藤別當實盛をめして汝程の強弓の精兵東八箇國にはいか程あるぞと問給へば齊藤別當嘲笑て君は實盛を大箭と思召れ候にこそ僅十三束を仕候へ實盛程候者は八箇國には幾等も候大箭と申條者十五束に劣て引くは候はず弓の強さも健なる者の五六人して張候かやうの精兵共が射候へば鎧の二三両は容易かけず射徹し候大名と申條の者は五百騎に劣つて持は候はず馬に乘て落る道を知らず惡所を馳れども馬を倒さず軍は又親も討れよ子も討れよ死れば乘越〳〵戰ひ候西國の軍と申は總て其儀は候はず親討れぬれば引退き佛事孝養し忌明て寄子討るれば其愁歎とて寄候はず兵粮米盡ぬれば春は田作り秋は刈收めて寄せ夏は熱しと厭ひ冬は寒しと嫌ひ候東國の軍は凡て其儀は候はず其上甲斐信濃源氏等案内は知たり富士の裾より搦手にや廻り候ずらんかやうに申せば大將軍の御心を臆せさせ參らせんとて申とや思召れ候らん其儀では候はず但軍は勢の多少にはより申さず大將軍の籌によるとこそ申傳へ候と申ければ是を聞兵共皆ふるひ慄き敢りけり去程に同き二十四日の卯の刻富士川にて源氏の矢合とぞ定ける二十三日の夜に入て平家の兵とも源氏の陣を見渡せば伊豆駿河の人民百姓等が軍に恐れて或は野に入り山に隱れ或は船に取乘て海河に浮びたるが營の火の見へけるをあな夥しと源氏の陣の遠火の多さよ實に野も山も海も皆武者で有けるいかゞせんとぞあきれける其夜の夜半計富士の沼に幾等も有ける水鳥どもが何にかは驚きたりけん一度にばつと立ける羽音の雷大風などの樣に聞へければ平家の兵ども源氏の大勢の向ふたるは昨日齊藤別當が申つる樣に甲斐信濃の源氏等富士の裾野より搦手へ廻り候らん敵何十萬か有やらん取籠られては叶ふまじ爰をば落て尾張河洲俣を防げやとて取物も取敢ず我先に〳〵とぞ落行ける餘りに周章噪て弓取者は矢をしらず箭とる者は弓をしらず我馬には人乘り人の馬には我乘繫ける馬に騎て馳れば株を繞る事限なし其邊近き宿々より遊君遊女ども召集め遊び酒盛しけるが或は頭を蹴破られ或は腰踏折られて喚き叫ぶ事夥し同き二十四日の卯の刻に源氏二十四萬騎富士川に押寄て天も響き大地も颯ぐ計に聞をぞ三箇度作りける平家の方には定り返つて音もせず人を入れて見すれば皆落て候と申す或は敵の忘れたる鎧取て參る者もあり或は平家の捨置たる大幕取て歸る者もあり凡平家の陣には蠅だにも翔り候はずと申す兵衛佐殿急ぎ馬より降甲を脱手水鶏飼をして王城の方を伏拜みごれ全く頼朝が私の高名に非ず偏に八幡大菩薩の御計ひ也とぞ宣ひける嘲て打取所なればとて駿河國をば一條次郎忠頼遠江國をば安田三郎義定に預らる猶も續て責べかりしかども後も流石覺束なしとて駿河國より鎌倉へぞ歸られける落首に

富士川の瀬々の岩こす水よりも　はやくも落る伊勢平氏哉

〔丙辰紀行〕相國の御前にて平家物語の事ありしに平氏水鳥の羽音に驚て逃去しは富士沼の事にて今の善德寺は其所也齊藤別當が東國に精兵多き事を語りしによりて平家の兵ども臆病神のつきてかくの如くありける也御前に侍りける某を御覽じて辨士をして敵の美を談せしむる事なかれと兵法にいへるは是也と仰せける事も只今の樣に玉音耳にとゞまりて覺え侍る

陶國中分源與平　東方氣勢壯豪英　羅山何須繼八公山上竿是旌旗木是兵

曾我兄弟禿倉

富士川の東平垣の左の山際厚原といふ所にあり土人曾我八幡といふ今も敵討の者信ずるに靈應ありといふ其側久澤といふに福泉寺といふ寺ありこゝに曾我兄弟の石塔あり苔古く文字剝落して見えず寺に牌あり十郎祐成を高崇院殿峰巖良雪といひ五郎時宗を應岳院殿士山良富と見えたり此ほとりを應が岳といふ五郎の斬られし跡とて首洗水。首懸松などあり抑建久四年五月廿八日の夜曾我兄弟富士の御狩の旅館井出の屋形に推參し父の敵工藤左衛門祐經を討取剰へ直居の侍五十餘人を切り三百八十

餘人に手を負せける祐成は仁田四郎忠常に討れ時宗は五郎丸に生捕らる頼朝卿直に子細を聞し召て寛仁の御志ありともいへども祐經が嫡子頻に望申により終に誅せらる又此ほとりに虎御前の禿倉もあり祐成討死の後出家して跡を弔ひこゝにて空しくなるとなん云傳へ侍る

〔曾我物語〕工藤左衛門尉祐經は無明の酒に醉ぬれば敵の入るをもしらずして前後もしらで臥たりける十郎松明傍にさし置枕にまはりければ五郎は跡にぞめぐりける手越の少將龜鶴などいふ貳人の遊君同じ席に臥たりけれ共餘りの恐しさに音もせず兄弟の人々は祐經を中に置て各目と目を見合うちうなづいて悦びけるぞ哀れなる三千年に一度花咲實なる西王母が園の桃優曇華よりもめづらしやそれに譬ふる敵なれば早く斬れやとて二人の太刀を祐經に當ては引引てはあて七八度こそ當にけり良あつて時宗此年月の思ひ只一太刀にと思ひつるけしき顯れたり十郎まて暫し寢入たる者を切るは死人を斬に同じ起さんものとて太刀の切先を祐經がもとに指當て如何に左衛門殿ひる見參に入つる曾我の者共參りたり我等程の敵を持ながら何とて打解臥給ふぞ起よや祐經殿と起されて心得たり何程の事有べきと云も果ず起さまに枕元に立たる太刀を取らんとする所を優しき敵の振舞哉といふ儘に弓手の肩より右手の脇の下板敷までも通れとこそは切付たれ五郎も得たりや應と勾匂て腰の上手を差上て疊板敷切通し下股までぞ切入たるも理なる哉源氏重代の友切丸何ものかたまるべき當るにつゞく所なし我幼少より願しも是ぞかし妄念拂へや時宗忘れよや五郎とて心のゆく〳〵三太刀づゝこそ斬たりけれ云々

古家川　吉原の西にあり和名鈔に古家郷あり土人訛て潤川とよふ富士川の支流にて底深し古より歩行わたりなり『三度橋』此古家川にかくる橋なり一年朝鮮人來朝の時官家より橋を掛られし也其跡京大坂の三度飛脚より官に願ふてこれをかくる也故に三度橋といふ

淺間神社　高島の山際久爾の庄にあり延喜式内又三代實錄授二正三位一初めは富士山にあり後世にこゝに移す故に大宮淺間社と云例祭五月五日流鏑馬あり

四月廿日ふしの社にて櫻のさかりを見て　法印隆辨

續後撰　ふしのねはひらけるはなのならひにて　猶時しらぬ山櫻かな

新勅撰　千早振神代の月のさえぬれは　するかのふしの宮にてよみ侍る　平泰時

みたらし川もにこらさりけり

△此社頭の清泉みたらし川をよめるなるべし

東海道名所圖會卷四終

東海道名所圖會卷之五

駿河吉原

原まで三里六町此驛はじめはこれより東南の方にあり延寶八年八月六日暴風烈しく潮水滿上り津濤して家屋漂流し人馬溺死する事多し天和二年の春此地に移す

富士山　四海無雙の名山にして駿河。甲斐。相模三國に蟠るといへども駿州富士郡にあれば富士山と號し駿河の富士ともいふ

【本朝文粹】

富士山記　都良香

富士山者。在二駿河國一。峰如二削成一。直登屬レ天。其高不レ可レ測。歷覽二史籍所レ記。未レ有下高レ於二此山一者上也。其登峰欝起。見在二天際一。臨二瞰海中一。觀二其靈基所一。盤連一亘數千里間一。行旅之人。經二歷數日一。乃過二其下一。去レ之顧望。猶在二山下一。蓋神仙之所二遊萃一也。承和年中。從二山峰一落來珠玉。玉有二小孔一。蓋是仙籠之貫珠也。又貞觀十七年十一月十五日。吏民仍レ舊致レ祭。日加レ午天甚美晴。仰觀二山峰一。有二白衣美女二人一。雙舞山巔上一。去レ巔一尺餘。土人共見。古老傳云。山名「富士」取二郡名一也。山有レ神名淺間大神一。此山高極二雲表一。不レ知二幾丈一。頂上有二平地一。廣一里許。其頂中央窪下。體如二炊甑一。甑底有二神池一。池中有二大石一。石體驚奇。宛如二蹲寅一。亦其甑中常有レ氣蒸出。其色純青。窺二其甑底一。如二湯沸騰一。其在レ遠望者。常見二煙火一。亦其頂上匝二池生一レ竹。青紺柔愞。宿雪春夏不レ消。山腰以下生二小松一。腹以上無二復生一木。白沙成レ山。其攀登者。止二腹下一。不レ得レ達レ上。以二白沙流下一也。相傳昔有二役居士一。得レ登二其頂一。後攀登者。皆點二額於腹下一。有二大泉一。出レ自二腹下一。遂成二大河一。其流

寒暑水旱無有盈縮。山東脚下有小山。土俗謂之新山。本平地也。延暦廿一年三月。雲霧晦冥。十日而後成山。蓋神造也

（萬葉）望不盡山歌並短歌　山部宿禰赤人

天地之。分時從。神左備手。高貴寸。駿河有。布士能高嶺乎。天原。振放見者。度日之。陰毛隱比。照月乃。光毛不見。白雲母。伊去波伐加利。時自久曾。雪者落家留。語告。言繼將往。不盡能高嶺者。

返歌　（新古今）白妙之

同　田兒之浦從打出見者眞白衣
不盡能高嶺爾雪波零家留

同　詠不盡山歌并短歌　高橋蟲麻呂

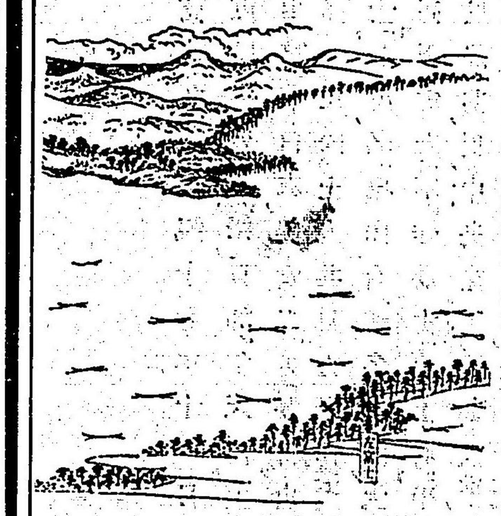
奈麻餘美乃。甲斐乃國。打縁流。駿河能國與。巳知其智乃。國之三中從。出之有。不盡能高嶺者。天雲毛。伊去波伐加利。飛鳥母。翔毛不上。燎火乎。雪以滅。落雪乎。火用消通都。言不得。名不知。靈母。座神香聞。石花海跡。名付而有毛。彼山之。堤有海曾。不盡河跡。人之渡毛。其山之。水乃當烏。日本之。山跡國乃。鎮十方。座神可聞。貴十方。成者山可聞。駿河有。不盡能高峰者。雖見不飽香聞。

返歌

同　不盡嶺爾零置雪者六月十五日消者其夜布里家利

同　布士能嶺乎高見恐見天雲毛伊去羽斤田菜引物絡

同　吾妹子爾相緣乎無駿河有不盡乃高嶺之燒管香將有



吉原驛より富士かねを眺れば西の方の山趾はるかに長く駿野より生出るやうに見えて異國にもならひなき名山こゝにしられて尊く思はれけり

同　阿敝良久波多麻能乎思家也古布良久波布自乃多可禰爾布流山伎奈須毛

同　妹之名毛吾名毛立者惜社布仕能高嶺乍乍渡

同　安麻乃波良不自能之婆夜麻己能久禮能等伎由都利奈波阿波受可母安良牟

同　不盡能禰乃伊夜等保奈我伎夜麻治乎毛伊母我理登倍波氣爾餘婆受吉奴

同　可須美爲流布時能夜麻備爾和我伎奈波伊豆知武吉氐加伊毛我奈氣可牟

拾遺　千早振神も思ひのあれはこそ　人丸
年へてふしの山ももゆらめ

祠花　日くらしに山路のきのふ時雨しは　大江嘉言
ふしの高根の雪にそ有ける

古今　君といへは見まれみすまれふしのれの　藤原忠行
めつらしけなくもゆる我戀

同　ふしのれのならぬ思ひにもえはもえ　紀のめのと
神たにけたぬむなし煙を

同　人しれぬ思ひをつれにするかなる　讀人知らず
ふしの山こそ我身なりけれ

後撰　しなのなる淺間の山ももゆなれば　するかふしの煙のかひやなからん

續後撰　ふしのねはひらける花のならひまて　法印隆辨
猶時しらぬ山櫻かな

玉葉　めにかけていくかに成ぬ東路や　前大僧正隆辨
三國みさかふふしのしばやま
風雅　田子の浦にもしほもやかぬ五月雨に　清輔
絶ぬはふしの煙なりけり

同　ふしのねは晴行空にあらはれて　惟宗光吉朝臣
すそ野にくたる白雨の雲

〔義楚六帖〕後周　齊州開元寺講俱舍論賜紫
明敎大師進釋氏六帖　義楚集

日本國亦名倭國東海中秦時徐福將五百童男五百童女止此國也今人物一如長安中略東北千餘里有山名富士亦名蓬萊其山峻三面是海一朶上聳頂有火煙日中上有諸寶流下夜即却上常聞音樂徐福止此謂蓬萊至今子孫皆曰秦氏彼國古今無侵奪者龍神報護法不殺人爲過者配在犯人島其他靈境名山不及一一記之

〔史記〕卷之一百一十八淮南王安傳

昔秦絶先王之道云々又使徐福入海求神異物還爲僞辭曰臣見海中大神言曰汝西皇之使耶臣答曰然汝何求曰願請延年益壽藥神曰汝秦王之禮薄得觀而不得取即從臣東南至蓬萊山見芝成宮闕有使者銅色龍形光上照天於是臣再拜問曰宜何資以獻海神曰以令名男子若振女與百工之事即得之矣秦皇帝大說遣振男女三千人資之五穀種種百工而行徐福得平原廣澤止王不來

〔焦氏筆乘〕日本國名倭國東北數千里有山名富士又名蓬萊國中最高山三面皆海一朶直上頂有火烟秦時徐福入海求藥終止此至今子孫稱秦氏

〔竹取物語登天段〕かぐや姫いふこゝにも心にもあらでかくまかるにのぼらむをだに見おくり給へといへども何しにかなしきに見おくり奉らん我をばいかにせよとてすてゝはのぼり給ふぞゝしてゐておはせねとなきて伏せれば御心まどひぬ文をかきおきてまからんこひしからんをり〳〵とり出でて見給へとてうちなきて書ことには『此國に生れぬるとならばなげかせ奉らぬほどまで侍らで過わかれぬる事かへす〳〵ほいなくこそおぼえ侍れぬぎおく衣をかたみと見給へ月の出たらん夜は見おこせたまへ見すて奉りてまかるそらよりもおちぬべきこゝちすと書おく天人の中にもたせたる箱ありあまの羽衣いれりまたあるは不死の藥入れりひとりの天人いふつぼなる御藥奉れきたなき所の物きこしめしたれば御こゝ地あしからむものぞととてもてよりたればいさゝかなめ給ひて少かたみとてぬぎおくきぬにつゝまんとすればある天人つゝませず御ぞをとり出でてきせんとすその時にかぐや姫しばしまてといひてきぬきつる人は心ことになるなりもの一こといひおくべき事ありといひて文かく天人おそしと心もとながり給ふかぐや姫物しらぬ事なのたまひぞとていみじくしづかにおほ

源順が竹取物語は寝覺物語に比して劣れりと宣ひしが如くに、竹取は實ひけり竹取の翁が娘は美麗容貌の絶倫なれば後宮に入内いたすべしと宣旨ありしかば、翁いとゞ嬉しゆ思ひ給へともこれにもしたがひ奉らず不死の藥を捧げて上天し給ひけり。これぞよしの山といふ歌といへり王元之が竹樓記に琴を弾するにより琴調絃堂しと記す。しかし月夜を賞じる味は此姫を竹樓記に記述されしは大いなる過ちなりや

やけに御文奉り給ふあわてぬさまなり（文詞）『かぐあまたの人を給ひてとゞめさせ給へどゆるさぬ向へまうできてとりゐてまかりぬればくちをしくかなしき事宮つかへつかうまつらずなりぬるもかくわづらはしき身にて侍ればこゝろえずおぼしめされつらめどもこゝろつよくうけたまはらずなりにし事なめけなるものにおぼしめしとゞめられぬるなん心にとまり侍りぬるとて姫「今はとてあまの羽衣きるをりぞきみをあはれと思ひいでぬる」とてつぼのくすりそへて頭中將をよびよせてたてまつらす中將に天人とりてつたふ中將とりつればふとあまの羽衣うちきせ奉りつれば翁をいとほしかなしとおぼしつる事もうせぬ此きぬきつる人は物思ひなくなりにければ車にのりて百人ばかり天人具して昇りぬ其のちおきな。嫗ちのなみだをながしてまどへどかひなしあの書おきし文をよみてきかせけれど何せんにか命もをしからんたがためにか何事もやうもなしとて藥もくはずやがておきもあがらずやみふせり中將人々ひきぐしてかへりまゐりてかくや姫をえたゝかひとめずなりぬるとをこま〳〵とまうす藥のつぼに御文そへてまゐらすひろげて　御らんじていとあはれがらせ給ひて物もきこしめさず御遊などもなかりけりだいじん上達部をめしていづれの山か天にちかきととはせ給ふにある人そうするがの國にある山なん此都もちかく天もちかく侍るとそうすこれをきかせ給ひて

あふ事もなみたにうかぶ我身には
しなぬくすりもなにかはせん

かの奉る不死のくすりの壺に御文ぐして御使にたまはす勅使には調の岩笠といふ人をめしてするがの國にあなる山のいたゞきにもてゆくべきよしおほせ給ふみねにてすべきやうをしへさせ給ふ御文不死のくすりのつぼならべて火をつけてもやすべきよしおほせたまふそのよしうけたまはりて兵者もあまたぐして山へのぼりけるよりなん其山をふしの山とは名づけけるそのけふりいまだ雲の中へたちのぼるとぞいひつたへたる』

此物語は源順の作なり詞幽玄にして久代より世に

賞ずる事久し按るに富士は兵士に富といふに書なせり又不死の藥を燒しよりふしのけふりとは詠しならん或は不二。不盡とも書り秘藏抄に富士の十名を擧て云

藤嶽。鳴澤高根。常盤山。塵山。二十山。三重山。新山。見出山。三上山。神路山。

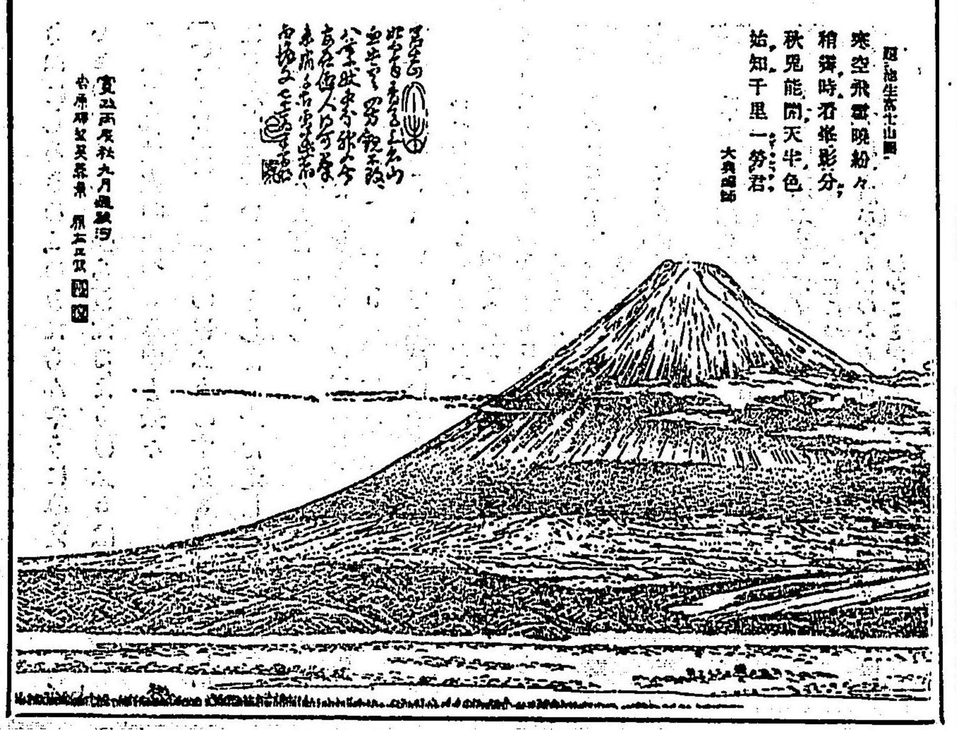
〔伊勢物語〕富士の山みれば五月のつごもりに雪いとしろうふれり

新古今　時しらぬ山は富士のねいつとてか　かのこまたらに雪のふるらん　藥平朝臣

其山はこゝにたとへばひえの山をはたちばかりかさねあげたらん程してなりはしほじりのやうになん有ける

鹽尻は伊勢物語七箇の秘訣の其一也所謂七箇とはひしき物の歌。月やあらぬの歌。あくた川。しほじり。都鳥。あまのさかての事。終に行道とはの歌等也

丙辰紀行　一山高出衆峯巒　炎煙雪冰雲上烟　羅山
大古若同仁者樂　蓬萊何必覓神仙



詣嶽　徐

何物芙蓉落日寒　關中霽適彩雲端
青天一柱崢嶸出　白雲千秋突兀看
雖指仙衣懸縹緲　自疑玉女剖琅玕
于今石跡山陰地　喚取驪駒問大丹

同　萬花

落日秋寒海上峰　危樓西顧眺芙蓉
浮雲不隔瑤臺色　雪下珠簾十二重

芙蓉峯　金華

大海天此盡　連天芙蓉出　芙蓉白雪光
更含海上日

駿州道中逢故人　周南

西馬悲征役　相逢風雪中　炎州發屬在
范叔綈袍空　蓮嶽雲猶闊　萍洲途已窮
君今從此去　何處問春鴻

賦富峯贈熊箕山　朝鮮國文學　秋月

芙蓉獨立臥清虛　始信大東天帝居
堪競俊才高復潔　氣調來追奈君如

〔さらしな日記〕其山のさまいと世にみえぬさまなりさまことなる山のすがたのこんじやうをぬりたるやうなるに雪のきゆる世もなくつもりたればいろこききぬにしろきあこめきたらんやうにみえて山のいたゞきのすこしたひらぎたるよりけぶりはたちのぼるゆふぐれは火のたつもみゆと云々

〔いさよひにき〕ふじのけぶりのすゑも朝ゆふたしかに見えし物をいつのとしよりかたえしととへばさだかにこたふる人だになし

たかかたになひきはてゝかふしのれの　阿佛
けぶりのすゑのみえすなるらん

古今の序のことばまで思ひいでられて

いつの世のふもとのちりかふしのれか　同
雪さへたかき山となしけん

くちはてしなからの橋をつくらはや　同
ふしのけぶりもたゝすなりなは

新撰古　限あれはふしのみ雪の消る日も　順德院
さゆる氷室の山の下柴

新勅撰　ふしのれはとはても空にしられけり
雲より上にみゆる白雪　守覺法親王

新拾遺　時しらぬ山郭公五月まて
雪にやふしのれをしむらん　祝部行氏

新後拾　ふしのれをふりさけ見れは白雪の
を花につゝくむさしの原　藤原長秀

家集　人しれす思ひするかのふしのれは
わかこゝかくや山ももゆらん　伊勢

月清集　ふしの山きゆれはやかてふる雪の　後京極攝政
一日も夏になる空そなき

家集　燒人もあらしとおもふふしの山　源重之
雪のうちより煙こそたて

萬代集　舟さむる田子のうらはの夕しほに　紫金臺寺入道二品親王
ふしのみたけはきりこめてけり

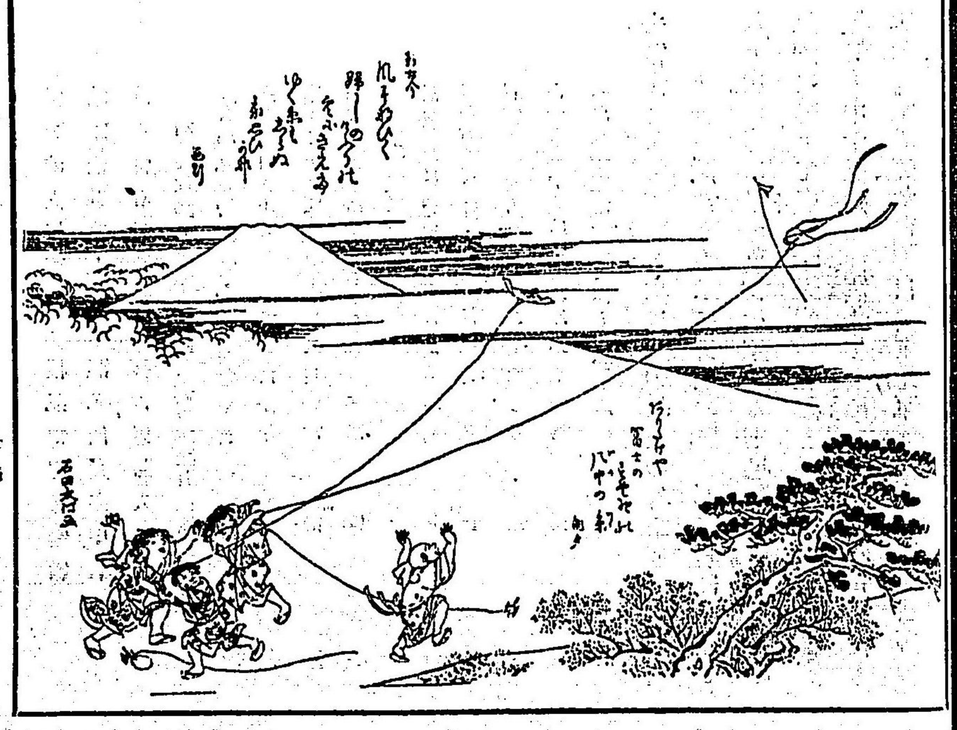
家集　草ふかみまたきつけたる蚊やり火と　大中臣能宣
みゆるはふしの煙なりけり

新六帖　するかなるふしのくはこのにあわたは　前大納言爲家
高根の雪の色に似るらし

〔光行紀行〕田子の浦にうち出て富士の高根を見ればときわかぬ雪なれどもなべていまだ白妙にはあらずあをうして天によりすがたゑの山よりもこよなう見ゆ貞觀十七年の冬の頃白衣の美女あつて二人山の岑にならひ舞と都良香が富士の記に書たるいかなるゆゑかと覺束なし

富士の根の風にたゞよふ白雲を　光行
あまつをとめか袖かとそ見る

〔曙記〕きのふの名殘なく空はれて富士の麓まで雲もかゝらず春の雪もきえ間見えざりし曙也まづ〳〵參かりたる人あまた物すれば御旅宿うちあひ所せきなればこれにけふはやすらはせ給はんと御定有つゝさらば富士の御當座あるべしとて御詠



おもかけのかはるとはかり見るたひに　二條左相府
さらにそむかふふしの白雪

おの〳〵あまたゝびずしの〳〵しる中に誠に幽玄拔群の尊詠なるべし若君

あけほのゝ巻に見そむるふしのねを
われ宮人に行てかたらん

御うゐこと山口しるくにげなからず　光廣卿

毎見士峯懸口號　九天霞霧仰彌高
韮周曾曰泰山北　一箇比倫秋兎毫　同

八重かすみたちもかくさてふしの山
ゆきのよそめのさくらさく頃　同

東紀行

ふしゝより高根をかけて晴る日に　冷泉爲村卿
山もへたてゝむかふふしのね

帝掬崑崙雪。匿之扶桑東。突兀五千仞。　秋玉山

芙蓉秀碧空
ふしを見て

人とはゝいかゝかたらん宮の蕊も　琉球人コレシクンサウンス
およはぬ宮士のゆきの曙　讃谷山王子

浮島原にて

ふしのねの雪吹おろす風見えて　同
一むらくもる浮島か原

詠宮士山

嶽色遙浮遠客航　擬從高處振衣裳

瓌形屹立雄天地　積氣常寒擁雪霜
瑞靄清能池上竹　瀛光低襲海中桑
詩篇恰有愚公力　移得厚顏入彩毫

右　朝鮮人李碩東郭詩　次日本隨月韻贈云々

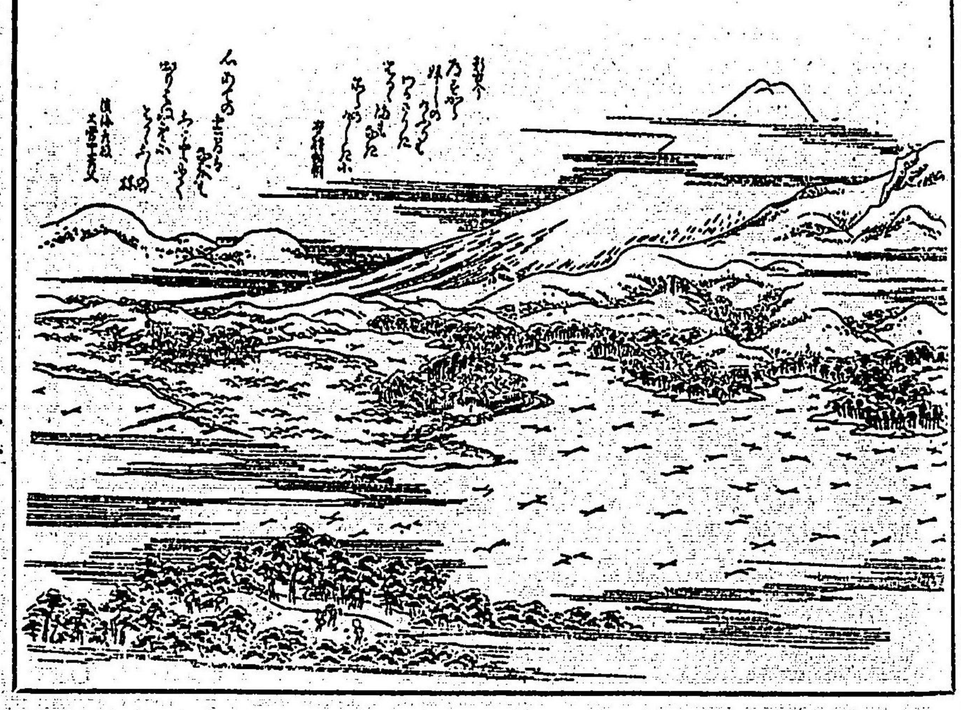
元日の見る物にせんふしのやま　宗鑑
宮士の山師走ともなきすがたかな　湖春
宮士にそふて三月七日八日かな　信德
目にかゝる時やこゝさら五月不二　はせを

不二の繪賛

三帆舟は塩尻になるかすみ哉　其角
宮士の笑ひ日に〳〵高し桃の花　千代
百宮士やそも元日のあしたより　蒲國
あつき日や空にしられぬふしの雪　佳栄
四萬八千丈宮士にはふしのかすみ哉　雜島

夫富士を芙蓉と號る事は八の峰八の谷ありて其體八葉の蓮華に似たり不二は都氏の宣ふ郡の名によりてなり山は産にして萬物を生ずる謂也麓は駿甲相の三國に跨りて嶺は十五州の壯觀とて靑天忽見素羅笠羅笠擔中十五州と悍窩先生も詠じ給ひ又石川丈山も雪如二紈素一煙如レ拓。白扇倒懸東海天とも賦し京師の

四明。大和の金峰よりも見ゆる尙も肥の崎陽より百里ばかり潛出て大洋より宮士峰見えて外夷の船我邦へ渡海の的にすとぞ聞ゆむかし　孝安帝九十二年此山初て現ずとも又　孝靈帝五年近州琵琶湖と倶に一夜に現ずともいひ傳り或說には大むかし此山雲霧深くしていまだ現れず人民も少くして尋ね登る事なし孝靈の御時初て霧はれ見顯しけるとぞこれらも都氏の記に見えざれば正說にあらず本朝の高嶺にして絕頂まで九里餘直立の高さを積れば都て一千五百丈にして北斗に近し峰の貌妙にして業平も搖尻に似たりといひ夏天に雪を戴いて萬葉に詠ず嶺は平原にして其中を鳴澤とて凹にして甑の如し底に池あり今は水涸てなし虎石とて虎の蹲るに似たる石あり玆にては夜陰に旭を耀し昼には三尊佛を拜すとかや遙に東北を見下せば海面幽にして島嶼浪に臥す鷗の如し西南は只雲霧朦朧として水や空とも見えわかず山路は三の街ありてこれより登り千筋に分る裙野は長うして百里につらなる尾の宮士見原遠の汐見坂までは山の

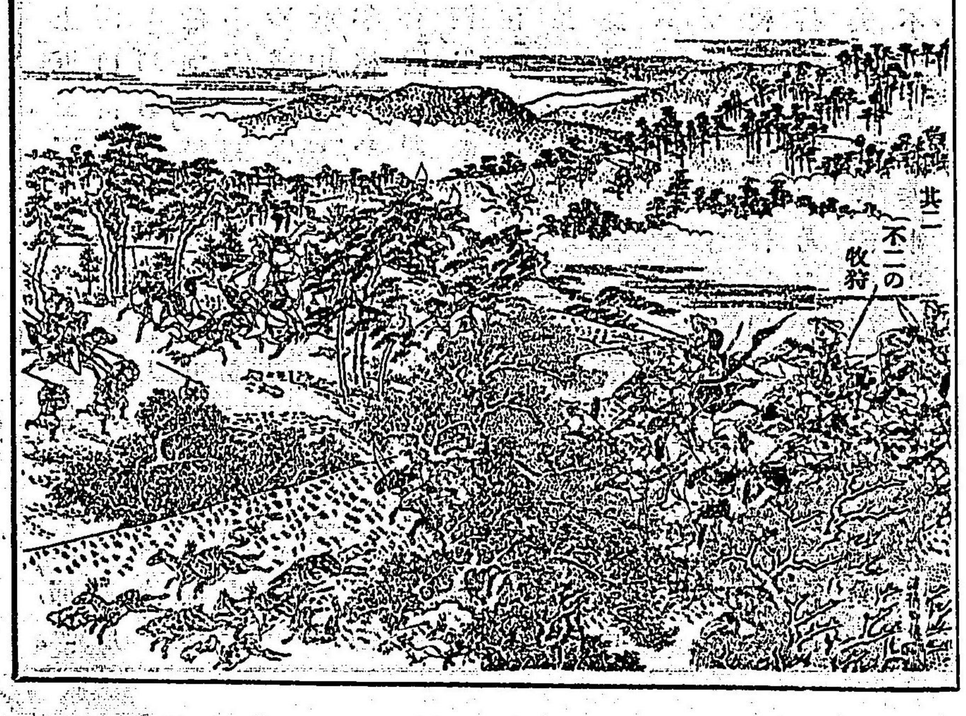


形相同じ三穂。清見。神原よりは長に當て嵯峨たり原より原は正面にして裙野まで鮮にして山趾東西に長し三島箱根よりは伏籠の貌に見えて鎌倉よりは北の方へ甚延たり武藏野よりは西南にあたりて江府の赤坂駿河臺よりは籠輿の窓に眸を動し日本。兩國の橋上には馬上の人の首をめぐらし駿河町の名も富士に寄なり延喜式内淺間神社は此山の神にして木花開耶姫を祭る此命は大山祇の御女にして瓊々杵の皇妃木花とは櫻樹に天降り給ふによつて富士に櫻を詠ずる事は此縁也三島は大山祇の命なれば土俗御親子ともいふなるべし水無月の禪定は松明を照らせる事幾千萬といふ數しらず眞砂は詣人の裾に就て下れば其夜又峰へ登る其音瀧水の如しとて峰に鳴澤の名ありこれは里人いふ富士の御神の砂ををしみ給ふとぞ竹取物語には竹とりの翁といふ者有て竹をとりに行ける時其竹の中に三寸ばかりの人ありいと美しければ養ひ育たるに幾の間に生長し艶顔なる事限なし屋の内は光滿々たれば名をかぐや姫といふ風土記には之を

頼光の源頼光公は大江山の鬼神を退治にとて君臣ともに山伏の姿にて登山し給ふは同日の論にあらず君子は危ふきに近つかずにもはづれ侍る

武御雷胡卿は列國の諸侯を從へ三國に双びなき富士山にて牧狩し給ふ事は實に從實將軍のいさほしなるべし

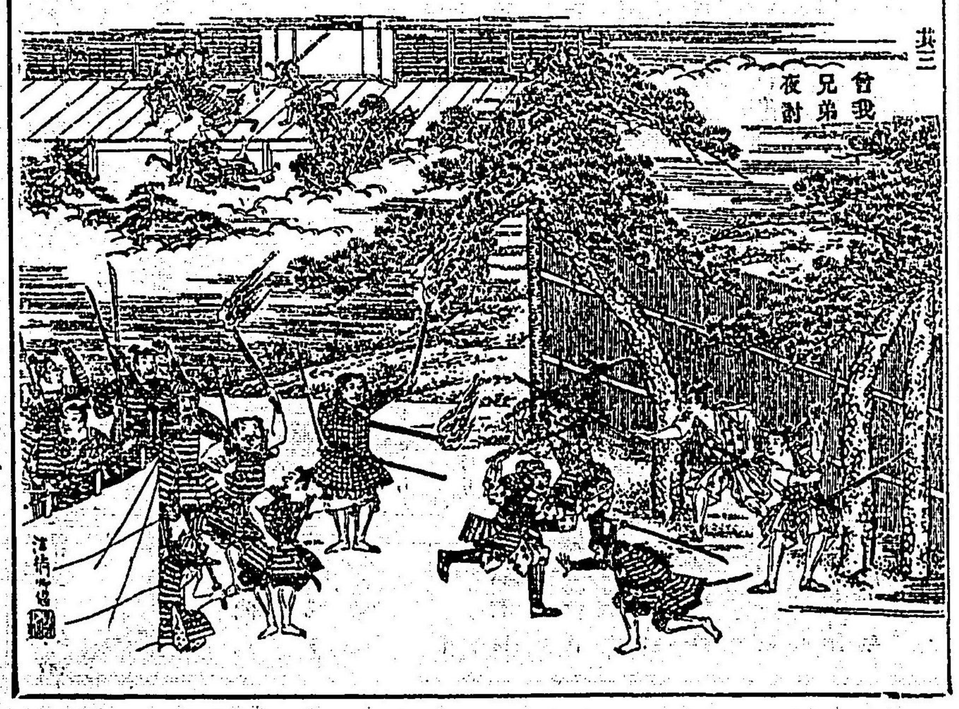
鶯姫と稱し今昔物語にも見え詞林採葉にも　天智天皇此姫を慕はせ給ひ俱に此山嶺の窟に隱れて崩じ給ふと記し又　桓武天皇かぐや姫を戀給ひ勅使を遣はされければ不死の藥を献り天上しける此ゆゑに藥を煙となし富士の名けふりの立のぼる事こゝに起ると書り　天智帝は京師御廟野より昇天し給ふとて御沓の止る所に陵を築て陵村の名今にあり日本紀には大津宮にて崩じ給ふとあり或人の云實は天皇巡視し給ふ時薩摩潟鹿兒島のほとりにて崩じ給ふ今も御陵かの地にありと其國の人の語りきと告る是秘藏の事となん　桓武帝陵は京師深草柏原にあり一千年に遐ぶといへども其所顯然たり故に　柏原天皇とも申奉りき源順の竹取物語を書れしは莊子に敎て寓言也雜波の契沖阿闍梨は寶樓閣經によりて著されしと宣ひし也古雅の名文にして歌道の標となる赤人は白妙に譽を取俊成卿はなるさに仇名を殘し西行法師は五文字を置かね賴朝卿は牧狩に武將の威を耀し曾我兄弟は俱に天を戴ざるとて本意を達し常陸房は仙境に入仁



田忠常は人穴に名高く役小角は木履にて歩み上宮太子は驪駒を馳空海。圓珍も登山して石佛を鐫じ徐福は秦帝を欺いてこゝに來り絶頂の終半腹の雀富士松の紅葉不二甘草。ふじ黄芪。ふじ海苔。富士の八湖は倒に影を浸し甲州の府には三つの嶺に見えて古法眼の霞のふじはこゝなるべしむかしの東海道は富士。愛鷹ふたつの山のあひだを通り其中に横走關といふあり愛鷹。清見。横走これを富士の三關といふむかしの道を旅人しげく通り重服觸穢もあれば愛鷹明神ふかく厭せ給ひ南海の中にゆられてありける島を打よせさせ給ふて今の海道は出來にけり其寄られし島は浮島原といひ傳へ侍る抑三國無雙の名山と賞じ義楚六帖及び宗學士が日東曲にも褒て蓬萊山と號る所紀の熊野。尾の熱田。此山なるべしそれが中にも最上にして眞に我邦の仙境梅福。九華。眞妃も出ざるは慨多き事なるべし

〔神社考〕孝安天皇九十二年六月富士山涌出初雲霞飛來如穀聚無嶮岨後頂上五盤石出其落下趾作溪壑取郡名而曰富士山形似合蓮華絶頂八葉層々到第八層中央有大窪窪底湛池水色如藍染物飲之味甘酸治諸疾池傍小穴形似初月穴中或燃出黑烟雨土沙或白雲金光映徹現鬼神形赤黑色承和三年春垂珠簾雨玉四方貞觀五年秋白衣神女出現雙立舞遊時火炎揚有圓光即祭之號火御子古老傳云昔大網里有老翁嫗共居翁愛鷹嫗飼犬後住乘馬里作箕爲業竹節中得一女其長一寸餘奇之裹綿養之經十六月漸長成能行步容貞端嚴言語和雅于時天子詔諸國撰美女令獻之采女使者至駿河國富士郡乘馬里宿老翁宅終夜有光使者怪問曰何故通夜燃火哉答曰我女之光彩也使者覓之其女甚美也於是謂云天子求女汝誠當矣女不從使者奏事于時女語父母曰親子之愛養育之恩誠重誠深雖然我久不可住今我登山去母云思慕如何女云常來相見乃上富士山入巖窟已而天子來於此幸乘馬里翁曰其事天子大歎遂與翁登山休於第五層脫玉冠留此處漸進陟絶頂臨巖嶺女出迎微笑曰願天子住此因共入嶺中玉冠所在積石以爲陵云延曆二十四年詫曰我號淺間大神平城天皇大銅元年立社祭之改乘馬里號一齊京所謂翁者愛鷹明神也嫗者飼犬明神也愛鷹山今云蘆高山二神共住新山宮

富士鳴澤　不二の峰にあり都氏記に昔は神池ありて水火起し煙をなし時々雷の如き音するを鳴澤といひふじの煙と詠り後世池も埋れ水も涸て音もせずけふりも立ざれば古今の序にふじのけふりも立ずと貫之も書れたり或が云今も岩間より糸すじの如く煙立のぼるといふむかしの俤ならん歟



萬葉　佐奴良久波多麻乃緒婆可里古布良久波
布自能多可禰乃奈流佐波能其登　後鳥羽院

續古　けふり立思ひも下や氷るらん
ふしの鳴澤音むせふなり

新拾　さみたるゝふしのなる澤水越て
音や煙に立まかふらん　慈圓

同　飛ほたる思ひはふしと鳴澤に
うつる影こそもえはもゆらん　權中納言公雅

夫木　紅葉ちるふしの鳴澤風越て
清見か關に錦おりかく　後頼

同　さみたれは高れも雲のうちにして
なるさは富士のしるし成ける　後成

〔無名抄云〕五條三位入道は此道の長者にていますがされどふじの鳴澤をふじのなるさとよみてなるさの入道と人に笑れ給ひしかばいみじき此道の遺恨にてなん侍しこれほどの事しり給はぬにはあらじおもひわたり給へりけるにこそ

〔藻鹽草〕一説には鳴澤にあらずなるさと書也なるさとはふじの山よりいさごふる事あり其鳴音を鳴砂といふふじの山には白砂麓へながれ下る事は一定なり人のおるゝにつれていさご下りて一夜の間に上ると云々

田子浦

田籠あるひは田兒とも書す都て清見。興津よりひがし浮島原迄の海邊の惣號なるべし

萬葉　後居而戀乍不有者田籠之浦乃海部有申尾珠藻刈々

拾遺　田子の浦にかすみのふかく見ゆる哉
もしほの煙立やそふらん　大中臣能宣

古今　するかなる田この浦波たゝぬ日は
あれとも君をこひぬ日はなし　讀人しらず

新古今　沖津風夜さむになれや田子の浦の
あまのもしほ火燒まさるらん　越前

續拾遺　田子のあまの宿さて埋むふしのれの
雪もひとつに冬はさにけり　信實朝臣

風雅　たこの浦のもしほもやかぬ五月雨に
絶ぬはふしの煙なりけり　藤原清輔朝臣

新拾　五月雨のふる江のむらの菅屋かた
軒までかゝる田この浦波　法印定圓

續千載　旅人のたゝぬ日もなしあつま路の
ゆきゝになるゝ田子の浦波　平齊時

草庵　たこの浦やふしのたかねの影見えて
波もひとつにふれる白雪　頓阿法師

家集　わか戀はなくさめかねつするかなる
田子のうら波やむ時もなし　源信明

新造内裏清涼殿色紙形に
白波の見るめなそへて植わたす
さなへになひく田子の浦波　飛鳥井右衛門督雅威卿

富士の根の雪のなかめもわすれ貝
わするはかりの田子の浦浪　元政法師

澤庵和尚

雖思盤竈空烟　世路艱難最耐憐
悲愛風光多子蜃　擔頭潮汐二川明

〔續日本紀〕天平勝寶二年駿河國守猶原造東人等於二部内廬原郡多胡濱一獲二黄金一獻之云々

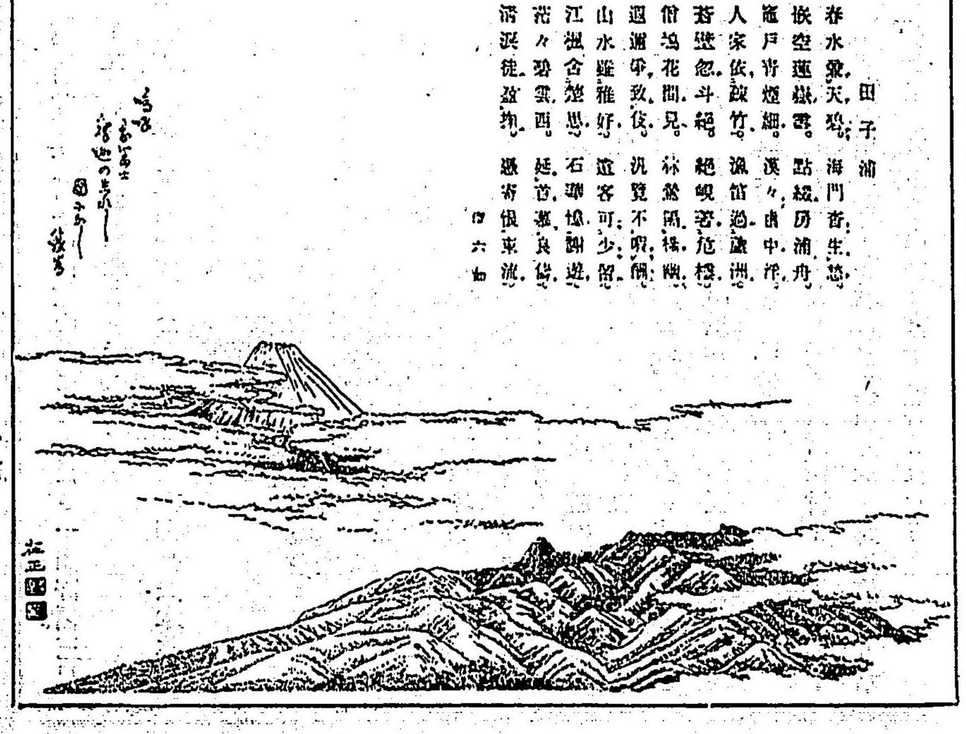
富士沼

吉原の北にあり富士八湖の其一也〔丙辰紀行〕に羅山子のいへる古の善德寺村今は今泉といふ治承の戰場の遺跡はこれなりと書り按ずるに昔は此沼東西三里餘もありて富士川のほとりまでも續き平氏の軍勢水鳥の羽音に驚き敗走せしも此沼ならん今はあせて總の沼となりこゝにて漁したる鰻を四つ屋柏原の茶店に出して商ふなり

夫木　菖草はかりかふはかり成にけり
ふし野の沼に駒やとめまし　源仲遠

宿次百首　水ちかきふしもとの沼のよそなから
いまゐる鳥のさたかには見す　前中納言爲相

〔光行紀行〕浮島が原はいづくよりもまさりて見ゆ北はふじの麓にてみどりかげをひたして空も水もひとつなり蘆かり小舟所々に棹さしてむれたつ鳥おほ



くさりきたり南は海の面遠く見わたされて雲の波煙の浪いとふかき眺なりすべて孤島のまなこに遮るなし終に遠帆の空につらなれるを臨むこなたかなたの眺望いづれもとり〳〵に心ぼそしはらにはしほ屋のけふり絶々立わたりて浦風松の梢にむせぶ此原むかしは海の上にうかびて蓬萊の三つの島の如くに有けるによつて浮島となん名付たると聞にもおのづから神佛のすみかにもや有らんといとゆかしく見ゆ

夫木　影うつす波の入江のふしの根の　煙も空にうき島か原　光行

左富士　吉原驛より五町許東の方中吉原といふ所より西一町斗の間を土人左富士といふこれは江戸より京師に登るに都て右の方に富士を見て行也こゝに於て道の非規によりて暫く左の方になるにより此名をよぶ京師より江府に赴く時は又これに反す

元吉原　今の吉原驛初はこゝにあり砂山地藏香久山妙法寺といふ日蓮宗の寺あり又毘沙門堂あり此尊像は聖德太子の御作にして長八尺肩上に聖德王の尊像立給ふ初は江戸にあり又香久山稲荷明神の祠あり

『鐙石』妙法寺毘沙門堂の前にあり長さ一間許幅三尺形鐙に似たるゆゑ此名を呼ぶ

手兒呼坂　元吉原四つ屋にあり八雲御抄夫木集藻塩草倶に駿河國に入る

萬葉　安都麻道乃手兒乃欲婢佐可古要氏伊奈波　安禮婆古非牟奈能智波安比奴登母

同　安豆麻治乃手兒乃欲妣左賀古要我禰氏　夜麻留可禰牟毛夜抒里波奈之留

夫木　ましもなを遠方人の聲かはせ　われこしわふるたこの呼坂　紫式部

寶治百首　いましはやとりも鳴なりあつまなる　たこのよひ坂雛かこゆらん　藤原光俊

要石　一本松村の濱邊にあり傍に石造の祠あり高潮打上る時此石より陸地へ來る事なし故に要石の名あり此邊みな漁家にて初夏の頃は大網を地引して鰹を漁する事多し海濱の風景妙にして伊豆の岬まで見えわたりて駿浪天を浮むの勝境なり

芝瀬川　風土記に出たり土人云猪頭村より流出て下流は富士川に會す和歌には芝川と詠ず此川筋より水苔を生ず所謂芝川のり富士海苔これなり

夫木　夏も猶雪けの水に月さえて　こほりしぬへきふしの芝川　法眼源全

家集　高根より消ぬ雪をも流すらん　月にみなきるふしの芝川　源氏眞

駿河原　委は浮島原なるべし北に富士沼南に大洋漫々たり其中の賤原なれば此名あり原。吉原。蒲原これを三原といふ沼津まで一里半

新勅撰　あしからの關路越行しのゝめに　一むらかすむ浮しまか原　後京極攝政大政大臣

風雅　吹おろすふしの高れの朝風に　袖しほれそふ浮島か原　前參議俊言

新拾遺　白妙のふしの高れに月冴て　氷をしける浮島か原　源道長朝臣

夫木　たひ人の道行くらすひかりとや　よはに盤のうき島か原　安嘉門院四條

同　ふしの根の荻野なかけて鳴鹿の　聲もあらしに浮島か原　同

建保百首　ときしらぬ山は雪けの雲なから　有明の月の浮島か原　順德院

同　さよちとり聲道さかる波の上に　はるかに月の浮島か原　正三位知家

同　雲の波尼花か涙のはてもなし　霜かれわたる浮しまか原　從二位行能

千五百番　あつまちを雪に打出て見わたせは　波にたゝよふ浮島か原　法眼顯昭

原驛のほとり一本松村は多く漁家にして初鰹とる時は磯に出てあごとなふる聲めづらかなり故國三千里長江十二風と作れるも此ほとりの事なるべし

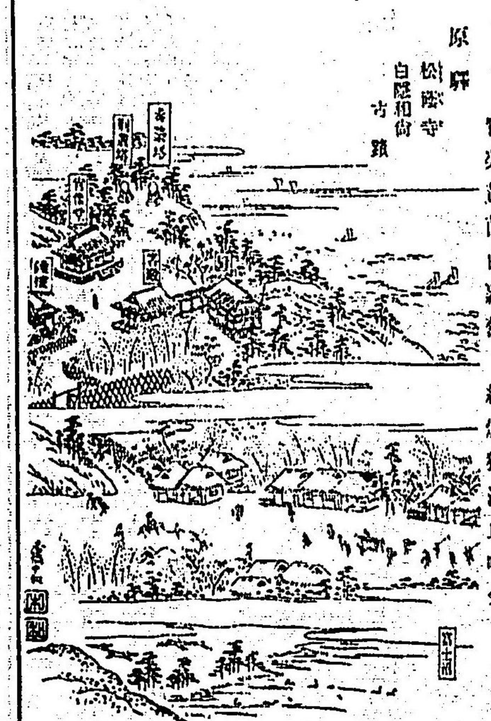
家集　よの中はなをうき島のあた波に　むかしをかけてぬるゝ袖哉　　參議雅經

澤菴和尚

行處是皆浮島原　此生如寄不留痕
雖藏身倘未藏影　歸去來號無月村

〔貞應海道記〕うきしまが原を過れば名はうきしまと聞ゆれどまことは海中とは見えず野徑とは見つべし草むらあり木の林あり遙に過れば人煙片々と絶て又たつ新樹程を隔て隣たがひに疎し東行西行の客は見る知音にあらず村南村北のみちにたゞ山海を見る

白隱禪師蹟　原の驛鶴林山松蔭寺といふ禪宗濟家此僧は當驛中長澤氏の子にして叡智聰明の奇童也十五歲の時松蔭寺にて得道し京師に登り諸山に亘り又尾の名護屋に止まりて菩提の妙理を究め三界門を出て四衢の道に至る近世の智識なり終に明和五年十二月十一日寂す年八十四謚を神機獨妙禪師と號す寺に肖像あり存日の時編述の書多し世に行ふ第二代遂翁和尚も亦博識の名僧也謚を宏惠妙順禪師と號す白隱和尚行狀一卷を書り左に著す



〔白隱禪師語錄〕中　頌古

清淨行者不入涅槃　　白隱和尚

問蟻爭引青蠅翼　新燕並休楊柳枝
山婦携籃多采色　村童倘拗折疎籬

同

深山佛法

深林源月寒猿叫　舊巢受風宿鵲鳴
烟霧輕浮補岸岡　藤蔓倒掛引新行

偈頌

示徒

活理自性葛藤窟　刺殺己殺荊棘林
青柴黃茜白蘿蔔　紅爐猶泣止啼金

同

或問死後斷滅乎。不斷滅乎。予云
即今問著底是斷乎。是常乎。又示偈
夢裏明々有二六趣一　了時無一點精魂一
善惡機一起一斷常見一　生入泥犂永刼昏一

駿州原驛松蔭寺
勅謚神機獨妙禪師白隱畧行狀

師諱惠鶴號白隱駿州原驛人也。俗姓長澤氏。以貞享二年臘月廿五日生。幼而穎達。年甫十一。隨母聽僧談地獄苦報。忽發求法之願。十五歲辭父母出家。因松隱寺單嶺傳公薙染。十九歲參問于諸州老禪。三十一歲歸鄉。嗣法於透鱗承公。遂住于松蔭寺。元文五年庚申春。評唱虛堂錄。妙機英發。名聞于海內。參學之徒數百。後應四方之請。講評經錄者凡五十會。帝子諸侯延師聽法。無虛歲。明和元年甲申春。就本院提唱大應錄。參徒以千數焉。五年戊子冬罹疾。端然而寂。實十二月十一日也。享年八十四。癧遺骸於寺巽隅。扁塔曰荊叢。嗣法者龍澤東嶺延慈松蔭遂翁元盧也。所著槐安國語。闢提記聞。息耕錄。普說。荊叢毒藥。及國字法語。遠羅天釜等若干卷。行于世。

明和六年六月八日
勅謚神機獨妙禪師

師齒迫山　浮島原の側にあり土人芝山といふ

萬葉　荒熊之住云山之師齒迫山
　　賣而雖問汝名者不告

夫木　あらくまのなれてすむなるしほせ山　やまもいかにかはけしかるらん　後嵯峨院

興國寺古城　原の東今澤村の左の方なる篠山をいふ當國大守今川氏の持城也元龜の頃甲州の穴山梅雪の家臣保坂掃部といふ者こゝに籠る小田原合戰の後中村式部少輔に此國を賜はつて家來川毛惣左衛門を據置たり慶長六年天野六兵衛尉康景拜領す然るに同十二年三月九日天野が家人同國原田村の鄉人と論してこれを殺す代官井出甚助聞糺し官に訴れば康景が

非道露顯によつて改易せらる其後當城破却に及ぶ

阿野禪師古蹟 足柄山の麓井出里といふ所也此禪師は右大將頼朝卿の弟にして阿野禪師全成といふ

〔東鑑〕建仁三年六月於二下野國一誅二阿野法橋全成一云々

此井出村大泉寺といふに禪師の遺物を什寶とす

阿野細江 阿野郷井出村にあり水源足柄山より流落て富士沼へ入末は海に注ぐ藻鹽草に見えたり古詠聞えす

井出館古蹟 井出の里をいふ右大將頼朝卿富士の裾野に狩し給ひて士卒を屯なさしめ給ふ所也其時曾我兄弟父の敵工藤祐經を斬殺して御館を騒しければ諸士出會相戰ひ終に十郎は仁田忠常に討れしかども五郎はなをも頼朝卿に一太刀恨申さんとて切つて入しを五郎丸に生どられて庭上に引る右大將直に對面有て誅せらる其頃十郎祐成が心をかけし虎といふ遊女井出館を尋んとて三島社に通夜し明れば三島を出て車返し千本松原を心細くあゆみて浮島が原にも出ぬこれよりして井出里に赴んとてある叟を誘ひて北へ六七町行ばあれこそ十郎殿の討れさせ給ふ井出の屋形の跡にて侍る又あれに見え候松の中こそ五郎殿の誅せられ給ふ所なりとをしゆ虎御前なく〳〵なみだのひまより

露とのみ消にしあさをきて見れは　尾花が末に秋風そ吹く

竹下道 富士の裾野にあり一説に嶽下道なるべし駿相兩國の堺なり建武三年十二月十一日新田。足利の兩陣此所にて戰ひし事太平記に見ゆ

續拾　あしからの山の麓に行暮て　一夜やとかる竹のした道　平長時

風雅　あしからの山の嵐の跡とめて　花の雪ふむ竹の下道　前中納言爲相女

同　深き夜に閨の戸出て足柄の　山本くらきたけの下道　藤原頼成

横走關 富士足柄の間にありいにしへの東海道也清少納言〔枕草紙〕に云關は横走の關又〔朝野群載〕にも出たり富士のすばしりは直走の略訓なるべし横ばしりはこれに對したる名なるべし

夫木　いかにせんすくにはゆかてあしからや　源仲正

横ばしりする人の心を

愛鷹山 又蘆高或は足高或は足柄とも書す古來より名所集相模國とす然れども富士に連り原驛より近きをもてこゝに載る也原より北の方三里にあり諺云延暦廿二年三月雲霧朦朧たる事十餘日を過て此山出現せり故に新山といふ山頂の形鋸乃の如し俗呼んで鋸が嵩といふ愛鷹と富士とのあひだむかしの東海道也清見が關より富士の裾野を通り足がらやまをへて箱根山へかゝるなり此間に横走關。足柄關あり今に於ても此道ありて甲州の往還とす

萬葉　とふさたつ足柄山に舟木切　水に切よせつあたら舟木を　滿誓

新後撰　旅衣しくれてさまる夕暮に　なを雲こゆるあしからの山　從三位顯基

玉葉　岩かれをつたふかけちの高けれは　雲のあとふむ足柄の山　爲家

新拾遺　あしからの山路の月に岑越て　あくれは袖に霜そ殘れる　祝部成茂

足柄關 あしがら山上古の東海道にあり清少枕草紙に云ふ關はあしがらの關

新勅撰　あしからの關路越行しのゝめに　一むらかすむ浮島かはら　後京極攝政良經公

續古　たゝ暮ぬ關の戸さゝぬ頃なれは　月にも越んあしからの山　家隆

續古　秋まではふしの高れに見し雲を分てそこゆる足柄の關　藤原光俊

新拾遺　しくれつる雲を外山に分捨て雲に超行あしからの關　卜部兼直

新後拾　行人の心とめすはあしからの關守神もかひやなからん　藤原行朝

足柄神祠

あしがらやまにあり神主沖津氏

〔神社考〕足柄明神昔赴レ唐其妻神獨留守三歲明神歸朝妻神色白肥美明神曰思慕之情待レ歸之心必可二瘦衰一今何肥而麗哉不レ思レ我也遂去二妻神一

富士人穴

足柄山の麓也富士に續きたればふじの人穴といふ建仁三年六月三日仁田四郎忠常鎌倉將軍頼家の命を受て富士の人穴に入し事人口に膾炙す

〔北條記〕建仁三年六月三日將軍頼家卿駿河國富士の狩倉に赴き給ふ山の麓に大なる穴あり世の人これを富士の人穴とぞ名附ける此穴の奥を見極めさせられんが爲にとて仁田四郎忠常を召て重寶の御劔を給り汝此穴の中に入て奥を極め來るべしとの上意也忠常畏りて御劔を賜り御前を罷り立て主從六人穴の内にぞ入にける次の日四日巳の刻に忠常人穴より出て歸り來る往還既に一日一夜を歴たり將軍御前に召て聞召す忠常申けるやうは此洞甚狹くして踵を廻らす事叶ひがたし縱に一人通るべくして心の如く進み行れず又其暗き事いふばかりなし主從手毎に松明を燈し互に聲を合せて行程に路の間は水流て足を浸す蝙蝠幾等といふ限なく火の光に驚きて飛翔り行さき滿ふさがり色黑き物は世の常也白き蝙蝠も亦少なからず水の流に隨ふて小さき蛇の足にあたり纏つく事隙なし刀を拔て切流し〳〵進み行に或は腥匂ひ鼻を衝て嘔噦せしむる時もあり或は芳しき薫來りて凉になる事もあり奥は漸々に廣くして上の方には何やらん色透通りて青き氷柱の如くなる物ひしと見えたり郎從の中に物に心得たるが申けるはこれは鍾乳とて石藥也仙人是を取て不老長生の藥を煉と傳聞しと語候又歩行足の下俄に雷のはためく音して千人ばかり一同に鬨を作ると聞えしは是は定て修羅窟の音なるべしすさまじき事に存じて猶行さきいよ〳〵暗く松明を燈し續け少し廣き所に出たり四方は黑暗幽々としして遠近には時々人の泣聲聞ゆ心細き事さながら迷途の旅路に向ひたどり行心地ぞするかゝる所に一つの大河に行かゝる事問ふべき都鳥も見えず漲り落る水音は其深さ淵瀨も定かならず逆まく水に足を浸し入たりければ其水の早き事矢の如く冷なる事極寒の氷に增れり紅蓮大紅蓮の地獄の氷は是なるべし川向ひ其遠さ七八十間もあるべし其中に松明の如くなる物向ひに見えて光さながら火の色にもあらず光の中を見れば奇異の御姿あたりをはらつて立給ふ郎從四人は其まゝ倒れて死す忠常かの御靈を禮拜するに御聲幽に敎させ給ふ御事有て即下し給はりし御劔を其川に投入ければ御姿は隱れ給ひ忠常は命助り歸り出候也と申す頼家卿聞召なを其奥は定て天地の外の世界なるべし重て渡し舟を作らせ人數を多くつかはして見屆くべしと仰けり古老の人々はこれを聞き此穴は淺間大菩薩の住所也と申つたへむかしより遂に其中を見る事能はずと聞傳ふ只今加樣に事破り給ふは將軍家の御身にとりて御愼なきにあらず恐し〳〵とぞ私語ける

八重山

足柄のほとりの山の幾重もかさなりたるをいふなるべしかならずしも一所の地名にはあらざるべし

上總國朝集使大椋大原眞人今城向京之時饑之歌

萬葉　安之我良之夜敝也麻故要氐伊麻之奈婆　郡司要等多禮乎可伎美等彌都々志努波牟

新千　さらに今都も戀し足からの關の八重山なをへたてつゝ　津守國基

名寄　降つもる雪はやへ山道とめて行衛そうときあしからの關　中務卿親王

丸子神社

東間門村にあり延喜式內社說祭神國常立尊此所の生土神とす例祭三月十六日六月十七日

千本松原

沼津の驛の西南五反田村の海濱の松原をいふ天正の頃武田勝頼合戰の妨也とて此松原を伐拂ひける今の松林は後世植繼たる松原なるべしこゝに六代御前の石塔あり初の時はこゝに誅せらるべきを文覺上人頼朝卿に命乞して助り後に又鎌倉にて誅せられ給ふ

〔光行紀行〕千本松原といふあり海のなぎさ遠からず松はるかに生わたりてみどりのかげきはもなし沖には船ども行ちがひて木の葉のうけるやうに見ゆかの千株の松の下の雙峰寺一葉の舟の中の萬里の身と作れるにかれも是もはづれず眺望いづくにも勝たり

見わたせはちもとの松のすゑ遠み　光行
みさりにつゝく涙のうへかな

〔平家物語大意〕去程に北條四郎時政鎌倉殿の御代官として都に登り平家の子孫を亡さんとて小松三位中將維盛卿の若君六代御前十二歳に成給ふを搜出し六波羅にて既に誅せんとする所に高雄文覺坊廿日命延をして鎌倉に下る最早廿日も過けれども何の沙汰もなければ北條時政六代御前を具して建久四年十二月十七日曉雲井を餘所に顧てけふを限の東路や逢坂の關打過て大津の浦粟津が原も行々て野くれ山暮宿々打過〳〵下り給ふ駿河國にも成しかば若君の御命けふを限とぞ見えし千本松原といふ所に御輿を据させ若君下りさせ給へとて布皮にする奉る北條急ぎ馬より飛でおり若君の御傍近く參つて申されけるは若道にて文覺の聖にや行逢ひ候とこれまで具し奉て候得共山のあなたまでは鎌倉殿の御心中も計難ふ候へば近江國にて失ひ參らせたる披露仕候はん一業所感の御身なれば誰申共よも叶はせ給ひ候はじと申されければ若君兎角の返事にも及び給はず齋藤五。齋藤六を召て宣ひけるは穴賢汝等都へ登り我道にて斬れたりと申べからず其故は終には隱あるまじけれども正しう此有樣を聞給ふて歎悲み給はゝ後世の障とも成んずらん鎌倉まで送付て上たる山中べしと宣へば二人の者共涙をはら〳〵と流す良有て齋藤五涙を押て申けるは君の神にも佛にも成らせ給ひなん後命生て再び都へ歸り上るべし共存じ候はずとて又涙を押て臥にけり若君今は角と見えし時御髮の肩に懸りけるを少さう美しき御手にて前へかき越させ給ふ守護の武士共見參らせてあな最惜未御心の座すぞやとて皆鎧の袖をぞ濡しける厭后若君西に向ふて手を合せ高聲に十念唱へさせ給つゝ頸を延てぞ待れける狩野工藤三親俊斬人に撰れ太刀を引側め左の方より若君の

御後に立廻り既に斬んとしけるが目もくれ心も消果ていづくに刀を打付べしとも覺す前後不覺に候他人に仰付られ候へとて太刀を捨てぞ除にけるさらばあれ斬これきれと斬人を撰ぶ所に爰に墨染の衣着たりける僧一人月毛なる駒に打乘て鞭を打てぞ馳たりける其邊の者ども嗚呼最惜あの松原の中にて世に嚴き若君を北條殿の只今斬奉らるぞやと所の者共ひし〳〵と走集りければ此僧心元なさに鞭を揚て招ぎけるが猶も覺束なさに着たる笠を脱て指上聲を揚てぞ招きける北條仔細有とて待所に此僧程なく馳來り急ぎ馬より飛で下り若君を乞請奉たり鎌倉殿の御教書是に有とて差出す北條是を披て見るに誠や小松三位中將維盛卿の子息六代御前尋出されて候然るを高雄の聖文覺坊の暫乞請候疑をなさず可レ被レ預北條殿へ賴朝と遊して御判あり北條押返し〳〵二三遍讀て神妙也〳〵とて指置れければ齋藤五。齋藤六は云に及ず北條家の郎等共もみな悅びの涙を流しける其より若君を文覺坊預り奉り齋藤兩人共に都へぞ還登ける

文覺房はじめ院宣を申請て祖明卿に義兵を擧させ今又此千本松原にて六代御前跡せらるべきを鎌倉に下り祖明卿に命乞の兎し文を申請て命を助く此上人は源家平家のわいためなく只嶺を見て悔む邪の苦しき也これらを阿羅漢阿羅漢果の佛道とやいふべき

〔平家物語長門本〕には頼朝卿蕊じ給ふ後文覺坊六代御前に謀叛をすゝめ平家の殘黨を聚る所を鎌倉北條より討手を登し文覺を豆州へ流刑し六代御前を此千本松原にて斬よしを書り故に今こゝに石塔あり又世間流布の平家物語には相州田越川原にて終に斬られ給ふとあり今も田越川のほとりに六代御前の墓ありこの事〔鎌倉志〕にも書れたり末卷鎌倉の部下に見えたりいづれか其是非分明ならず

駿河 沼津 三島まで一里半當驛中淺間町に富士淺間神祠あり例祭九月十五日又社頭に猿田彦神降石あり又神寶に雌雄の鸚鵡石あり大さ三寸餘新田町に山王神祠あり例祭九月廿四日社内に富士の牧狩の時用ひしといふ大釜あり半は破たり古代の體にして奇なり

車返し 沼津三枚橋町の北の地名也〔東鑑〕に大岡及び車返牧狩御所と記す三枚橋いにしへは官橋なり〔光行紀行〕車かへしといふ里ありある家に宿りたれば網釣などいとなむいそものゝ棲にや夜のやどりかことにして床のさむしろもかけるばかりなり彼縛戎人の夜半の旅寢もかくや有けんと覺ゆ

これぞ此つりするあまの笘ひさし
いとふありかや袖にのこらん　光行

〔貞應紀行〕車返しといふ所を過此所もし蟷螂がみちにあたりて行人をとめけるか又若遊兒が土城をつくりて孔子に答けるか（むかし小童の路中に小家を作りて遊びけるに孔子の通るとて車に危うしそこのけと諫られけるに小童の云車は家の有所をよぎて過べしいまだ聞ず家の車にさる事をと孔子これを聞て車をめぐらしてかへりけり）若又勝母の間ならば曾子にあらずとも誰もいかゝ通らん（曾子は孝ふかき人にて不孝の者のゐたる所は車を返して通らず）嶮岨の地なれば大行路といひつべしよの道はさかしくてよくくるまをくだくされども騎馬の客なれば打つれて通りぬ

むかしたれこゝに車のわつらひて
なかえを北にかけはしめけん

富士隱れ 沼津の東黑潮松原。二津屋など地形大に低し愛鷹山に遮られて富士見えず故にふじかくれと

いふ名をよぶ

龜鶴塚 二津屋の東石田村龜鶴山觀音寺にあり白拍子龜鶴は建久の頃の風流女にして富士の牧狩の狩場の屋形に來り工藤左衛門祐經と同席に臥たる事曾我物語に見えたり此寺の本尊觀音は行基の作にして龜鶴が守本尊といふ

黃瀨川 石田村の東にありいにしへの驛也遊女龜鶴こゝに住し事〔東鑑〕并に〔曾我物語〕などに見えたり

〔東鑑〕承久三年七月十三日上皇鳥羽行宮遷御隱岐國甲冑勇士圍御輿前後（中略今日入道中納言宗行過駿河國浮島原荷負疋夫一人泣相逢于途中黃門問之按察卿僮也昨日梟首之間拾主君遺骨歸洛之由答浮生之悲非他上彌消魂不可遁死罪事者兼以掃存中若出於虎口有盲龜命乎之由猶殆恃之處過同人已定訖之間只如亡察其意尤可憐事也休息黃瀨河宿之

驛路の遊君は班女照手の末流にして今も夕陽なゝめなる切燈り作らんと松金油の匂ひこまやかにまして髪はつくもがみのむさくとたばね顔は糸瓜の皮のあらくしく旅客をとめては「いかになよ旅の殿さおくたびれであるべいおくわひら出しめさいはだけ中さう」拔ナア「猛に毛が生ておせうしやくとさすり

歌謡ふ

「君がこぬ夜はまぶたも、あはぬなみだの淵へ枕をつゞばめたアなとひなびたる歌に旅人も臥てふかくねいりければ女はねもせず「これの殿さ情ない蚤がおほくてつかんではうばるべいかゆくばひつかくべいよとてつゝきおこさるゝも旅のあはれ深し

程依レ有二筆硯之次一書二付傍一　宗行

今日すくる身を浮島の原にても　つひの道をは隔さだめつる

於二菊河驛一書二佳句一留二萬代之口遊一至二黄瀬河一詠二和歌一慰二一旦之愁緒一云々

宗祇終焉地

黄瀬川の上一里許に桃園山定輪寺と云所にて終をとりこゝに葬りし事宗長記に見えたり又箱根早雲寺にも墓あり

辭世　はかなしや鶏の林のけぶりにも　立おくれぬる身こそうらむる　宗祇法師

自畣　うつしおくは我影なから世の憂も　しらぬ翁のうらやまれぬる　同

俳諧　世にふるはさらにしくれのやとりかな　同

宗祇法師は紀州の産也姓は三善。氏は飯尾にして洛陽に來り住心院心敬僧都の門下にして連歌の宗匠となり世に鳴一とせ美濃に下り東野州常縁に就て古今傳授を究め洛に歸り古今集を三條逍遙院實澄卿へ傳へそれより稱名院公條卿。三光院實枝卿。細川三位法印玄旨幽齋。八條智仁親王。中院通勝入道也足軒へ段々に傳り　後水尾法皇に到て大成し給ふもみな

これ宗祇法師より起れりといふ

頼朝義經初對面地

黄瀬川の東長澤村八幡宮の社地也治承四年平家の軍勢富士川まで出陣の時頼朝卿此ほとりまで蜂起あり又奥州より九郎義經こゝに來りて生長の後再び對面し給ふ所也

〔東鑑〕治承四年十月廿一日武衛頼朝令レ遷二宿黄瀬川一給（中略）今日弱冠一人御旅館之砌稱下可レ奉レ謁二鎌倉殿一之由上實平宗遠義實等恠レ之不レ能二執啓一移レ尅之處武衛自令レ聞二此事一給二思二年齢之程一奥州九郎歟早可レ有二御對面一者仍實平請レ彼人一果而義經主也即參二進御前一互談二往事一催二懐舊之涙一（中略）此主者去平治二年正月於二禍裸之内一逢二父喪之後一依二繼父一條大藏卿長成之扶持一爲二出家一登二山鞍馬一至二成人之時一頻催二會稽之思一手自加二首服一恃二秀衡之猛勢一下二向于奥州一歷二多年一也而今傳下聞武衛被レ遂二宿望一之

山欲二進發一處二秀衡強抑留之間密々遁二出彼館一首途秀衡失二恪惜之術一追而奉レ付二繼信忠信兄弟之勇士一云々

千貫樋

三島の驛の西にあり伊豆の水を駿河へとりて田園の料とすはじめ青銅一千貫をもつて水の料に贈りけるより此名あり此所兩國の堺にして深さ三四間斗の川ありて北より南へ流る其川の上を越えて東より西へ渡す筥樋あり巾一間餘長さ廿二間許なり常に流水滔々として增減なし都べて山里には何國にもあるなり中に低き所有て水流自在ならざるには高きより高きへわたして田園の用とす上方にてはこれを鎌倉樋といふ此所は豆州の水を駿州へとるによりて世に名高し奇とすべきものにもあらず

駿豆兩國堺

則此千貫樋の下の流を兩州の國さかいとす

三嶋（伊豆）

箱根驛まで三里廿八町此國都會の地にして商人多く賑し宿の西の入口に鐘ありて二六中を撞也北條郷はこれより南二里にあり北條時政の舊趾也頼

風朝細富士川出陣の時源九郎義経陸奥秀衡が館を忍び出て此黄瀬川の宿にて兄弟対顔し給ふ平治の乱より絶て久しきはらからの親み嘸や喜悦し給ふらん詩に業様の事邪として嘆々たらざらん哉と燕ぞる事を作れるはこれらをいふなるべし

朝卿の配流せられし蛭が小島も北條の郷中に古跡遺れり

伊豆三島神社

三島驛中にあり延喜式内名神大月次新嘗

十六夜日記　哀とや三島の神の宮はしら　阿　たゝこゝにしもめくりきにけり　仰

『祭神大山祇命』相殿四座神秘社說云天平五癸酉歲鎭座和漢合運云　聖武帝御宇天平五年三島明神出現

〔日本紀〕曰　伊弉諾尊拔レ劒斬二軻遇突智一爲二三段一其一段是爲二雷神一一段是爲二大山祇神一一段是爲二高龗一

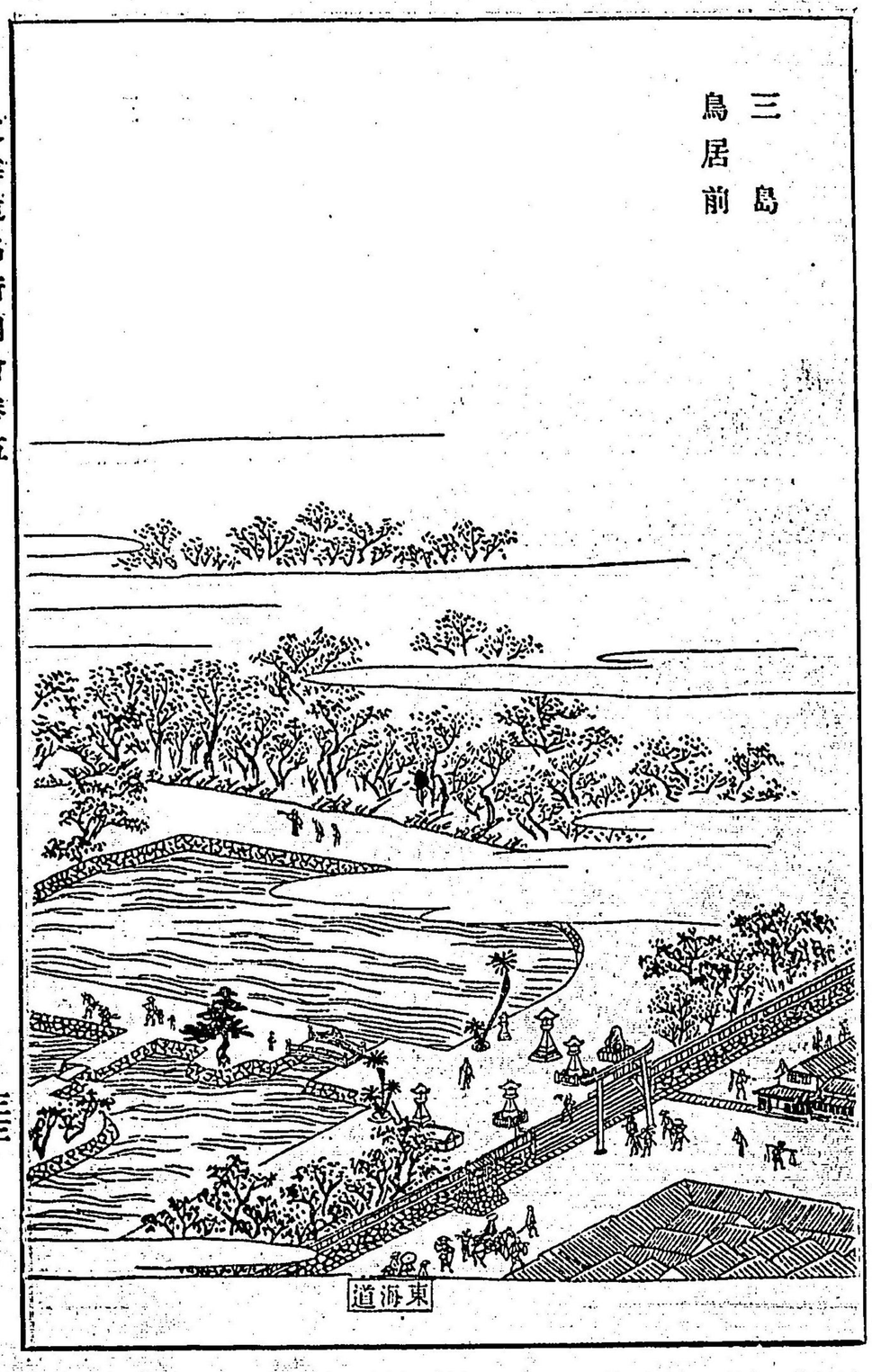
〔神代卷鈔〕伊豆國賀茂郡三島神社攝津國島下郡三島鴨神社伊豫州越智郡大山積神社此三所俱一神也

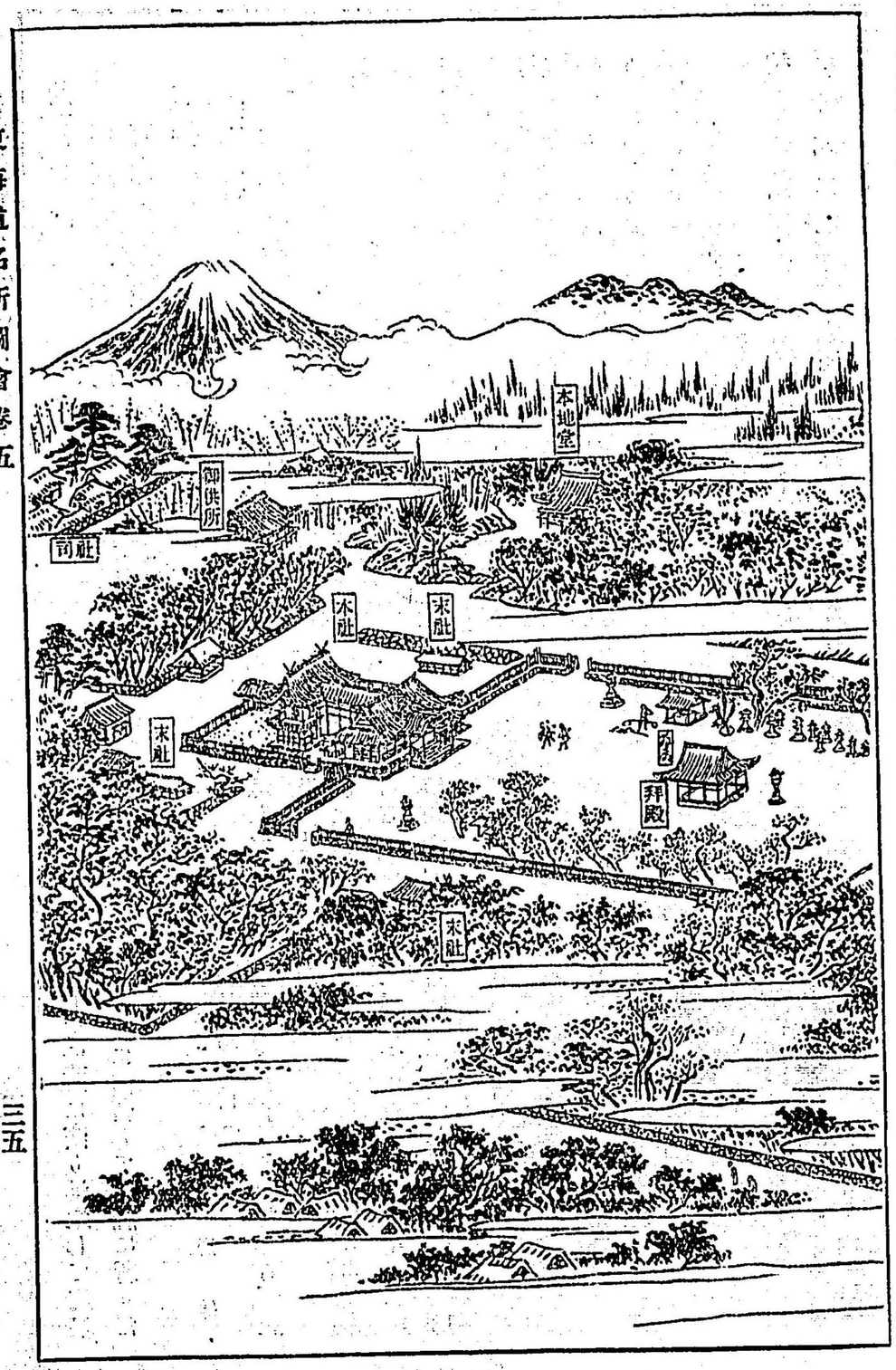
末社　『見見祠』『樓門の外西側にあり『八幡宮』同所にあり『殿島祠』二王門の外西側池中にあり『東五社』船寄社。仮神祠。酒神祠。第二祠。小楠祠俱に本社の後東側にあり『西五社』幸神祠。第三祠。聖神祠。天滿宮。大楠祠俱に本社の後西側にあり

『別宮八社』二の宮三島驛中柴町にあり三の宮同驛田町楊原にあり四の宮同驛小濱池の内にあり五の宮同驛宮倉町にあり『田川祠』三島驛外小山村にあり『天神祠』同境川原が谷村にあり『祇園祠』神領内祇園山にあり『秡所祠』三島驛中後村にあり『舞臺』本社の前にあり『隨身門』社頭にあり豊磐間戸命櫛磐間戸命を左石に安ず俗に樓門といふ『鳥居』二所は樓門の外一所は海道の側に有共に石柱『二王門』樓門の外にあり『三層塔』二王門の東にあり『神池』二王門の左右に有『鳥部屋』塔の側にあり『神馬厩』樓門の東にあり『藥師堂』本社の後東の方に有『寶藏』『神供所』供に本社の北にあり『馬場』本社の東側にあり『例祭』七十五度の内大祭正月元日同月十七日四月中酉日八月十六日十一月中酉日神官矢田部氏社家三十六人

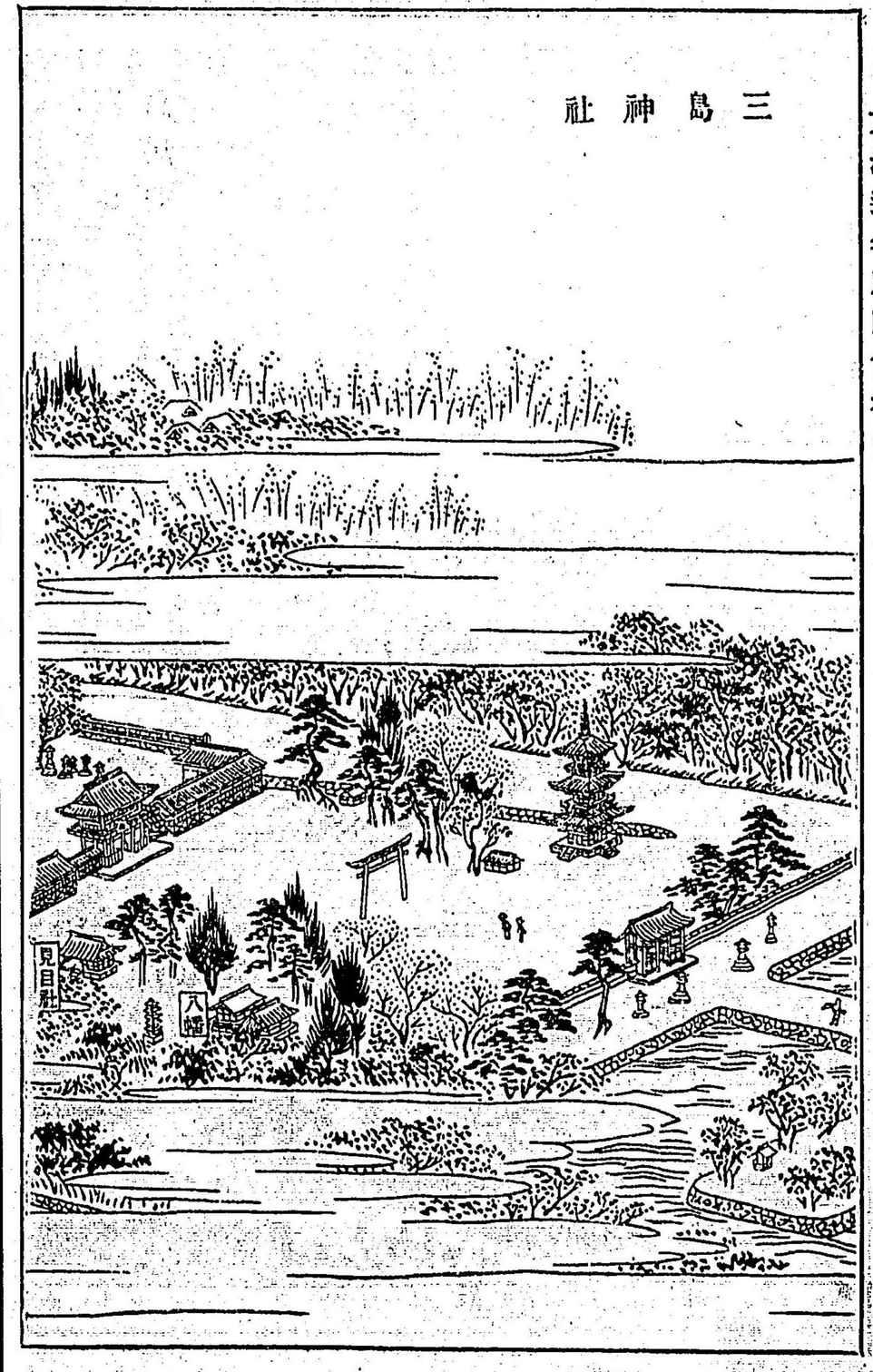
〔東鑑〕治承四年十月廿一日頼朝乘レ燭之程令レ詣二三島社一給御祈願已成就偏依二明神冥助一之由御信仰之餘點二當國内一奉レ寄二神領一給則於二賀前一令レ書二御寄進

三島
鳥居前





三島神社



狀ニ給其詞ニ云

伊豆國御國　河原谷　長崎

可ニ早奉レ免ニ敢地三島大明神一

右件郷園者爲ニ御祈禱安堵公平ニ所ニ寄

進ニ如レ件

治承四年十月廿一日　　前右兵衛佐源頼朝朝臣

〔光行紀行〕伊豆の國府にいたりぬれば三島の社のみしめうち拜み奉るに松のあらしこぐらくおとづれて庭のけしきも神さびわたりこのやしろは伊豫の國三島の大明神をうつし奉ると聞にも能因入道伊豫守實綱が命によりて歌よみて奉りけるに炎旱の天より雨暴にふりてかれたる稲葉も忽にみどりにかへりけるあら人かみの御なごりなればゆふだすきかけまくもかしこくおぼゆ

せきかけし苗代水のなかれさて　またあまくたるかみそこの神　光行

按るに伊豆の國府は和名鈔に田方郡とあり三島神社は延喜式に賀茂郡四十六座の内大社と見えたり又烏丸光廣卿東行の時霖雨して此驛に到り洪水して箱根へ登るべきやうもなくこゝに滯留して此社に祈りたまふ

天の川井関の水をせきとめよ　今も三島の神ならば神　光廣卿

かく詠したまひしかば神感まし〳〵てたちまち雨止んで晴天となりしとかや

夫當社は攝州。豫州三所共に三島と稱して大山祇命を祭るなり餘にいふ三島は大山祇富士は木花開耶姫にて御親子の神と也旦祈雨の神にして神道には三島

正月六日
三島祭

龍雷傳とて神秘ありとかやさればこそ伊豫にて能因法師雨を祈り玆にては光廣卿止雨の和歌を奉らる治承の頃より三代の將軍九代の執權共に崇禮厚くして田園を寄附せられ宮柱壯麗にして社頭巍々たり此神の使令とて神池には鴛鴦鷗水に戯れ神籬には鳳凰鷄群り驛の小川には鯉多く生じて手を拍ばみなよる也玆にいにしへより暦を製して社家より出す之を三島暦といふ神風や豊みてくらの惠に靡ききねが皷の音は諷々たる松のひゞきに交り鈴の聲は虫の音に通ふ都てこゝに鎮座し給ふより一千有餘歳をふれども神德は日々に新にしてゆきゝの貴賤まづこゝに詣して君か代の久しきを祈らぬはなかりけれと覺ゆれ

走湯山　三島より南六里許にあり走湯權現山嶺にあり伊豆御山と稱す頼朝卿蛭小島に於て法華經書寫千部の願望ありしに出陣急になりしにより八百部走湯山に藏めらるゝ事〔東鑑〕に見えたり本社壯麗也石段を昇る事三町にして山頂に鎮座す別當を般若院と稱す

玉葉　伊豆の國山の南にいつる湯のはやきは神のしるしなりけり　鎌倉右大臣

『滝之湯』二町許山下にあり巖洞より涌出して海岸に流落る其疾事矢の如し故に走湯の名あり滝は二所に一は浴室ありて諸人こゝに浴す

熱海温泉　走湯山の西の方一里にあり潮の滿干に隨ひ岩のはざまより湯氣蒸上りて殊の外熱き湯はしり出る之を筧にとりて家々にて諸人入湯す平左衛門法齊湯野中湯風呂湯川原湯濱の湯等の名あり土人云湯の名を呼ば大に涌上るといふ湯前權現は上の町にあり今宮權現七面祠木宮明神天神祠柿木貴僧正の祠等新宿にあり

古々井杜　伊豆權現の西北にあり

拾遺　こゝにたにつれ〳〵と啼郭公　ましてこゝゐの森はいかにそ　右大臣顯光

同　思やるこゝ井の杜の雫には　よそなる人の袖もぬれけり　元輔

靜範法師は八幡の宮の事にかゝりて伊豆の國に流れて又のとし五月に内の大弐の三位がもとにつかはしける

續拾　五月闇こゝ井の杜の時鳥　人しれすこそ鳴渡るかな　藤原兼房

かへし

郭公こゝぬのもりに啼聲は　大貳三位
さくよそ人の袖もぬれけり

興小島　伊豆の海濱にあり

新後撰　箱根路を我越くれはいづの海や　鎌倉右大臣
沖の小島に波のよる見ゆ

富士見平　三島より海道筋東二里許にあり三島より今井坂にかゝり船窪といふ所ありこゝには冬の日より鶯早く啼初る塚原臼ころばし市の山法華坂こゝに七面祠法華題目堂あり大時雨坂小時雨坂を過て三つ谷村下長坂笹原村に宗閑寺と云梵刹ありこゝに一柳伊豆守の塚もあり韮山辻豆州韮山下田への近道也これを過て富士見の平にいたる正面に富士山三保の松原遠は見ゆる

山中古城　ふじ見平の東山中村にあり小田原北條の時こゝに城を築き北條左衛門太夫氏勝間宮豊前守等に命じてこゝを守らしむ豊臣秀吉公北條征伐の時關白秀次中村一氏等をもつてこれを攻る一氏が麾下渡邊勘兵衛重綱先登して勇威を振ひ味方の一柳伊豆守討死す小田原方にも間宮を初め大勢討死して氏勝敗走し遂に落城す今に城墟は町はづれ左の方にあり

豆相兩國堺　山中村を過て小枯木。大枯木。石荒坂こゝより豆州韮山の城見ゆる甲石坂に甲石二つありほらか平を過て國堺あり

風越臺　國堺のほとりの名也左右並木老杉多しこれより箱根驛まで十八町也釜石坂。赤石坂を過て心坂の南の方に山神のやしろあり箱根の宿の入口を蘆川町といふこゝに駒形權現祠あり惣じて此山路の左右みな篠竹にして自然と繁茂せりこれを刈て京都へ登し煙管の羅宇に用ゆ性堅くして佳也箱根竹とて名産なり

山路來て何やらゆかしすみれ草　はせを

箱根驛　驛は箱根山の嶺にあり小田原まで四里八町也驛中に關門あり〔月令章句〕に曰關在レ境所ニ察レ出纍入也云々　又庚申堂鐘堂あり當驛の旅舍つねに霧深くして蚊蠅なし又雲天多くして雨氣繁し北の方に駒が嶽東北に二子山南に日金山伊豆の海鮮に見ゆる

歌枕　足柄の御坂につかん玉匣　箱根の山のあけんあしたに　佛水人丸

〔寂蓮集〕十月ばかりに東の方にまかりけるに箱根といふ山をなん越ける所のありさまあやしくよの常にかはりけり遙に峰に登りては海をわたり谷にくだりては雲をふむさるほどに風に木の葉をまくりあげてしぐれの麓よりのぼりければ

旅の空雲ふむみれを越行ん　しぐれは袖の下よりそする　寂蓮法師

過箱根山

客路辭鄕垂二淚句一　千山猶是獨行人
單衫雲濕晴疑雨　老樹花開夏似春
仙鯉潭清無網罟　午雞村遠有二朱陳一
萍蹤未識何時定　仰望煙霄愧隱淪

そられにもあらす關路のほとゝきす　斑竹　薬
廿酒をすゝる仙家や壺すみれ　露　竹

箱根湖水　一名蘆の湖といふ富士八湖の其一也箱根の山嶺にあり長さ三里許巾一里餘其中に左尾崎右尾崎三つ石塔が島等の字あり産物は鱒。腹赤也鮒魚は山中の溪川に生ず小兒五疳の妙藥に用ゆ

夫木　玉くしけはこれの山の岑深く　水海はれてすめる月かけ　慶　融

〔光行紀行〕猶行過るほどに筥ばかりなる山の中に至りて水うみひろくたゝへり箱根の湖水となづく又あしの海と云もあり權現垂跡のもとゐけだかくたふとし朱樓紫殿の雲にかさなれる粧ひ唐家の驪山宮かとおどろかれ嚴寶石龕の浪にのぞめるかげ錢塘の水心寺ともいひつべし嬉しきたよりなれば浮身のゆくゑしるべをせさせ給へなどいのりて法施奉るついでに

今よりはおもひみたれしあしの海の　光行
ふかきめぐみを神にまかせて

ふし見たひらにて

目もたゆし白雲動く不二の形　關更
ゆるされて咲か箱根の女郎花　雛島

箱根山を越る日みやこの友に申遣す

わするなよほとは雲助ほとゝきす　蕪村

箱根山金剛王院東福寺　箱根山にあり古義眞言宗箱根驛より新屋町霞原窟三つ家を過て西河原といふありこゝに地藏堂六字湖邊に墳墓多し左に尉が島あり吾妻川の南に屏風山北には駒が嶽權現坂より元箱根に到る此ほとり山深ふして雲を出し雨を興すの幽境なり

箱根驛

箱根湖水

西河原

地藏堂

箱根
權現社

小地獄

箱根權現社　祭神中央彥火々出見尊。左瓊々杵尊右木花開耶姫命。　例祭六月十三日

『末社』駒形神。能善祠。高野祠『大師堂』本社の右にあり弘法大師を安す『行者堂』役行者を安す側に彌陀觀音を安す『獅子巖』行者堂のかたはらにあり『御供所』石だんの側にあり『藥師堂』石段の下別當の門內にあり『親鸞聖人堂』同所にあり此聖人東國經回の時此所を通り給ふ其前の夜權現社僧に告て曰明朝門前を貴僧來往あり宜しく饗應すべきよし神詫に任て待所に此聖人來れり因レ茲馳走せし事本願寺傳記にも記せり『曾我禿倉』曾我兄弟の靈を祀る又道の傍に曾我船繋石といふあり由緣詳ならす又大釜あり衆僧大會の時飯を炊く具也其外牛王祠山王の祠六躰地藏堂など湖水の汀にあり

〔寺說〕それ當山の初は聖占仙人幽居の地にして神威を崇め壽齡九百餘歲を保しとかや　孝安帝の御宇に湖水の中に目代木を建て相豆駿三國の堺とし　欽明帝の御時には韓國の高根權現を勸請し此山の形梵篋に似たればとて筥根山と號け湖中の怪石を觀音巖といひ又一宇を建て普門品を誦す今湖中の堂島これ也厥后役小角も登山し行基大士も昇臨して東福寺と號し山岳林泉に名境多しとて都卒の內院に表して四十九所の名に譬ふ天平勝寶年中には滿卷上人鹿島明神の神勅を蒙り錫を止め當山に練行する事三ケ年此時箱根三社權現を崇て上人を中祖とす諸經の讀誦一萬卷に及びければ禰后已來諸人滿卷上人と呼ぶ又湖水の西の淵に九頭の大龍有て時々風波を起し人民を惱す上人かの深淵に臨んで神咒し給へば毒龍水上に現す即鐵鎖の咒縛し給へば大樹の下に繫れ永當山の守護神とならん事を託る此樹を栴檀香木といふ今なを湖中にあり弘仁七年には萬卷上人勅を奉て上洛し歸路に到つて三州八名郡に於て入寂す從弟遺骨を當山に藏め佛像經卷は豆州田方郡に一寺を建てこれに納む是を桑原山新光寺といふ又の名を小箱根山とも號す其後孝謙天皇より嵯峨帝まで七代の帝王尊敬有で神社佛閣巍然たり弘法大師。慈覺大師もこゝに止錫し花山院の皇子豐覺法親王當山の座主職に任せらる此時金剛王院の勅號あり此法親王の御弟子安慶當山の別當を勤む同弟子行實僧正もこゝに來りて別當と成武門には田村將軍源頼義。右大將頼朝。北條時政。義時。泰時もみな尊恭し曾我兄弟祐經を討し微塵丸。薄綠の太刀も後に頼朝卿より當山に寄附し給ひて什寶となる其外寶器多し時去星移て小田原陣の時兵燹に罹りむかしの十が一にも及ばず桑田碧海須臾にあらたまるの謂なるべし

當山名所四十九所

宮路山　冠ケ嶽　駒ケ嶽　寶藏嵩　明神嶽
藥師ケ嶽　臺ケ嵩　屏風嵩　二子山　文庫山
地藏山　死出山　提灯山　佛供山　蛭子川
鮪川　諸佛川　琴川　三途川　吾妻川
不動石　馬乘石　馬降石　五條石　福德石
御陣石　踏石　目代木　伽羅木　矢立杉
浦島櫻　鵜の杉　錫杖木　古杉　室津
相模津　懺悔津　駿河津　白川津　花川津
伊豆津　枯津池　血の池　銚子池　精進池
藥池　阿字池　蜂ケ池　薺の池

〔東鑑〕奉レ寄二宮根權現御神領事

相模國早河本庄

爲二宮根別當沙汰一早可レ被二知行一也

右件於二御庄一者　前兵衛佐源頼朝爲二沙汰一所二寄進一也全以不レ可レ有二其妨一仍爲二後日沙汰一註二文書一以申

治承四年十月十六日

〔同書〕安貞二年十月宮根山神社檀佛閣燒亡當社垂跡滿月上人草創以後五百餘歲未レ有二回祿之例一北條武藏守泰時頻歎息潛有二解謝之義一被レ捧二願書一仍造營十二月二十八日遷レ宮

〔神社考〕伊豆箱根者。本社彥火火出見尊也。又有二駒形權現。白和龍王。右鵲王。左鵲王及客人宮熊野又有二役行者。吉備大臣。弘法。慈覺等遺跡一

箱根温泉　七箇所にあり七湯巡といふ箱根權現坂を過て街道に標石ありこれより左の方へ入る

『生死池』標石より六町にあり『頼朝卿狀書石』此石上にて狀を認め給ふとなりゆゑんつまびらかならず

『薺の池』此池の傍に法藏比丘尼の石塔あり『元西河原石地藏』池の側に自然石の地藏尊立給ふ長一丈餘弘法大師作りたまふとなり『多田滿仲石塔』『十二光佛石像』共に地藏尊の次にあり

『曾我兄弟石塔』『虎御前石塔』『庚申塚』共に叢の中にあり土人云曾我又は虎か石塔外へ除るに又一夜に元の所へ寄ると

『蘆之湯』七湯の其一箇也權現坂よりこれまで一里浴屋は町の中にあり一二三と仕切て入湯す氣味澁く苦し又硫黄の香強し流れ湯みな黄色なり功能は癩病。黴病。五痔。一切の腫物に相應して早く治す浴屋の前兩側に一町許入湯の宿舍ありて奇麗なり

『小地獄』蘆の湯より八町許にあり山腹に湯氣盛に立て手を入るればはなはだ熱し按ずるに積陰鬱聚りて火氣を生じ土精熱して硫黄となるこれ温泉の源なり土人云ふ鍛冶屋の地獄。酒屋の地獄。紺屋の地獄ありと地氣少しづゝ色變るなり又これより山奥五里許に大に地氣立昇る所ありとぞ里諺にこれを大地獄とよぶ

『氣賀湯』蘆の湯よりこれまで一里なり此間に明礬を製する所あり氣賀の中に岩湯。上湯。平の湯。大澁等の四ヶ所ありいづれも氣味鹹して明礬の香あり中風。疝氣を治す

『底倉湯』氣賀より半里中むかし地震ふて名物石風爐も絶て今總に内湯二三ヶ所あり此所の民家箱根名物挽物細工を業とす

『宮下湯』底倉湯より二町ばかりにて大畧家續き也内湯。澁湯あり内湯とは温泉の水脉より樋にて家々にとり入湯す澁湯とは樋より筧にとりて家の内にて澁の如く温泉を落しこれに打るゝ也頭痛。痃癖。腰の痛を治す打るゝに氣味快きものなり

『堂島湯』宮に下より五町ばかり山下也内湯澁湯あり

氣味鹹ばゆくして癩聚。疼痛を治すなり

『塔之澤湯』堂が島より一里半あり七湯の中にて地境廣くして風景の勝地也山を勝麗山と號し川を早溪といふ

阿佛日記　あつま路の湯坂をこえて見わたせは　しほ木流るゝ早川の水

橋を玉緒橋といふ水戸黄門光圀卿明人舜水と共にこゝに逍遙し給ひ此號をはじめて呼せらる浴舍美麗にして廣く書院。數寄屋庭中何れも佳景也江府より諸侯時々こゝに湯治し給ふ元湯を秋山彌五兵衛一之湯を小川澤右衛門内湯は田村久兵衛。藤屋喜八。喜平治小兵衛等なり都て家數廿三軒あり此温泉は氣味輕くして養生湯なり諸病を治す

『湯本湯』塔澤よりこゝまで十町あり町の中に浴屋ありて四間に仕切る内湯も二三ヶ所あり腫物。瘡毒。黴病の類によしこれより三枚橋へ五町許あり岨を歩て橋の東爪へ出るこれより本道東海道也

箱根山温泉記　相模國箱根温泉は白山妙理權現立せ給へる所なれば其神力をくはへて諸病悉除のしるしをほどこし此湯に入といる人息災延命の樂ほこらずといふ事なし此湯本は小田原の面十里ばかりゆく所山登え水清く萬代も動きなき岩根こりしき千世も葉かへぬ松むら立り麓に放光堂あり運慶法師が作りし地藏菩薩を安置し無佛世界度衆生の誓尊とくおはしします東に三峽橋をわたし岸のほとりの小朶峰には富士岩横たはれり其上より時しらぬ雪の不二のねほのみゆるゆゑかくなんなづけたるならし北は塔の嶺西は城山めぐりて其山本に涌出る湯谷なれば美景目を悅ばしめ心をなぐさむる事まことに養性の所に叶ふべしかの妙理權現は天地わかれ初めて女神をがみあらはれ初し中のいざなみの尊にておはします本地十一面觀世音にてあをによしならの都　元正天皇の養老年中に泰澄大德越路の白山に詣で侍りしに權現示し給ふやう我を信敬するものは願をかなへわざはひを除かん我かたちを見よと宣ひて九かしらのをろちに現じ給ひしばらくして十一面觀世音菩薩妙相端嚴にして拜まれさせ給ひぬ泰澄感涙を拭て時いたり

機應じて今かくいともかしこきみことを承てみかたちをも拜し奉りぬ願は像法末法の衆生に大悲をたれてあまねくすくひおはしませと申さしめ給ひければ菩薩金冠を動かしうなづきうけ引給へりき靈驗いとゝいちじるし　聖武帝の天平八年に疱瘡のえやみ有て上中下此わざはひにかゝりけるにおほやけより泰澄に勅して十一面觀音の法を修せしめ給へるに五幾の內は既に其わざはひをまぬがるゝといへり猶人此こゝろつくしのかたと戸ざゝぬ關の東にはかのえやみやまず行はれしに泰澄の神足淨定臥行者とて有し臥行者を西の國に淨定をあつまのかたにわかちつかはして秘をさめしむるに世の中のさはがしさやみぬ天平十年に淨定此所に御社を立て白山權現を勸請し十一面を刻て又十一面のずほうを行ひしに此山の岩根忽に裂て温泉涌出で長く諸人のいく藥となりぬ九百四十餘年を經て今の安く平らかなる都　後柏原院の大永の初つかた北條の氏綱のぬし特賜正宗大隆禪師をむかへて此地に早雲寺をたてこの温泉のとこ

箱根七温泉の中に塔澤は殊に山水の美景也風流なる所をしつらひ內湯とて温泉を筧にとりて湯槽に入し腰腿など病ある所をうたゝ也あるは湯槽に浴しても終夜流るゝゆゑ清き事泉の如し北間々は糸竹の音楊弓狂歌讃の席にて興を催すもみな養生の一ツなるべし

しなへに春のけしきある事を愛して浴室を其ほとりに開けりよりて金湯山といふ中頃久しく此湯寺地に屬せしを此寺おとろへて後久しく成ぬ猶百年にはたゝざりける事也けんかし初め此里民の家居もかずなかりければ世の人埋木の人しらぬ所なりつるを此湯のしるしある事をあまねく語りつきいひつき聞傳ふ遠近人來あつまるに其利をうるによりて家潤ひ里富つゝかまどの煙も湯のけぶりに立そひて賑ふちまたと成ぬもし天刑の病人のいゆまじきがゆあみすれば此湯變じて水となりぬ人毎今まのあたりみる所也されば此出湯の靈ある事いはでもおのづからしりぬべし近き世界に湯井おほしといへども此所はじめ遠く久しきによりて此里をゆもとゝいひ山を湯坂といふかの津の國の有馬の出湯は三輪の神垣神さびて醫王善逝の勝地也此國の湯本の湯は白山權現の垂跡觀音應驗の靈區ともによくあをひとくさの枯葉をよみかへらしめて豊あし原のみつほの國にそのしるしをてらし月日の光の空にかよひたるやうにひとしく稱する所也彼驪山の温泉は秦皇の疱をあらはじめんとて神女の出けるよしいひ傳ふためしはかの國のみにあらざりきかつまたいざなぎの尊は日々にちかうへあまりはをかうへをうみ給ひて生育をわざとし給ふ陽德の神にていませり觀音は慈眼をもて衆生をみたまひてさいはひ壽の海淺からずはかりなし神德は出湯の流のすまんかぎり千々萬々歲つきずまじくあれば誰々あふぎたふとまざらむ

永祿の二とせ霜月後の三日洛陽の隱何がしの望に應じて新玉津島の七松子筆をとりて新留志侍る

洛陽新玉津島社は五條三位俊成卿の宅地の古跡也五條松原烏丸にて社あり七松子は永祿中の社司ならん歟未勘延寶貞享の頃には北村季吟翁此社司を勸め歌書若干を註解す蟬吟。芭蕉翁等の師なり

箱根名品挽物細工

街道湯本村にあり花美なる諸品を細工して色々彩り塗て店前に銷る又雛の芥子人形の細工をしほらしくして縱方寸の箱に百品二百品も入る也湯本伊豆屋の店諸品多し又前栽に流しの

枝左右へ八九間も延たる梅の名木あり

權現坂より本道は城不見坂。老ヶ平。右に文庫山。左に二子山見ゆるそれより銚子坂。猿澤。枳殻坂。畑茶屋此所の茶店奇麗也大澤坂。割石坂。南に三所山。北に鷹巣山みゆる女ころばしこゝに大石あり須雲川こゝは北條の支城の跡あり右の方藥師の瀧。堀木坂。葛原坂を過て南の方に葛原山北の方に丸山見ゆるこゝに鎚持石あり觀音坂。新道坂。地上ヶ坂これより湯本臺に至る南に新宮權現。北に地藏堂。曾我祠。芭蕉句碑あり

函關七律　　峰次公

關門百里倚二寒巒一　十二東秦車轍通
天色幾餘黃霧外　人家半住白雲中
湖分二銀漢一星辰湛　峯地二芙蓉一氷雪同
一自終軍棄繻入　于今士氣此間雄

摺子木て重箱を洗ふがごとくせよとは政の殷刻なるをいましめ給ふかしこき御代の巷にあふて

限〳〵に殘る寒さや梅の花　　蕪村

これ伊豆屋が前栽の梅を見ての作也

箱根の挽物店を見て

うつくしき玉手箱根のひき物や　九鯉

柳櫻に桔梗荻萩　貞一

いろ〳〵のひき物さいの河原なり

地獄道さにあらず關門

金湯山早雲寺　湯本村にあり禪宗濟家金湯山の額朝鮮雪峰筆方丈の額同筆

『佛殿釋迦佛』開山正宗大隆禪師本願伊勢新九郎長氏永正十六年建立

『北條五代墳』寺内にあり『宗祇法師墓』境内にあり又傍に今小路道三の墓あり

北條新九郎長氏法名早雲伊勢平氏の末裔にして桓武帝第五ノ皇子葛原親王の末孫平清盛の後胤也相州小田原の城主としてこゝに菩提所を建營す其頃諸堂壯麗たり長氏數ヶ國を領し剃髮して早雲庵主宗瑞と號し九十歳にて卒し此寺に葬る其次氏綱其次氏康其次氏政其次氏直まで五代の間關八州を領し皆此寺に墳墓を築く

覽二箱根貝葉作

諸聖悲二群蒙一　搜二抉死生源一　有身諸患本
七趣爲二樊籠一　受身何所緣　靈識是其根
識質相纏繞　萬苦不レ堪論　飄揚同二野馬一
膠躍似二因猿一　不レ驚二三有夢一　何酬二諸佛恩一
縱聚二河沙福一　欺魂綁二迷魂一　雖レ說二精眞道一
無殊二酗醉言一　環函如二丘陵一　須レ知要領存
食息醫二遺忽一　潛思歸二至尊一

江陵　萬花　著

早溪　橋を三枚橋といふ塔の澤の下流也此末を早川尻といふ賴朝卿三百騎を引ぐして早川尻に陣を取給ふ早川黨こゝは軍場には惡く候なり湯本の方より敵山をこえて中に取込ばゆゝしき大事也と申ければそれより米嚼石橋といふ所に陣をかへ給ふ事盛衰記に見えたり又承久の亂に甲斐參議中將範茂を北條朝時搦捕て鎌倉へ下るとて此早川尻にて水中へ沈め空しく成給ひぬ又元弘の亂にも參議平の成輔朝臣を此所にて斬し事太平記にも見えたり

長興山淨泰寺　入宇田にあり又入生田とも書す此邊より小田原石出る禪宗黃蘗派

『佛殿阿彌陀佛』惠心僧都の作　座像二尺許開山鐵牛和尚本願は稻葉侯也禪堂。食堂。昭堂。牌堂。鐘樓。客殿。泰翁軒廟等嚴重也門内より石階を登る事三百級也此地より遙に見わたせば江之島鎌倉鮮にして風色斜ならず

豐太閤御陣所　入宇田の東風祭村の南石垣山也天正中小田原攻の時豐臣秀吉公の陣所也字を天守臺といふ又塔尾と云所に蒲生飛禪守の陣所あり

石橋山　小田原の入口より一里許西南にあり海面邊々と遮て風光いちじるし治承四年八月兵衛祐賴朝卿大場三郎景親と合戰し給ふ古戰場なり

〔東鑑大意〕治承四年八月廿四日武衛頼朝卿は椙山に陣し給ふ平家方大庭三郎景親三千餘騎を引卒して競追駈る武衛はこれを免れんとて後の峰に隱れ此間に加藤次景廉。大見平次實政武衛の御後に止て景親を防ぐ北條時政は君を尋奉らんとて數町の險阻を登る處頼朝卿は節木の中に隱れて實平時政等其傍に候するを悅給ふ實平が云各無爲の參上これぞ喜びありといへども人數を卒せしめ給はゞ此山に隱れ居給ふ事叶ひ難し御一身に於ては縱旬月を渉るといへど實平計畧を加へ隱し奉るべしといふ北條四郎は箱根湯坂を經て甲州に赴かんとす北條三郎は土肥山より桑原に降る大庭景親は武衛の跡を逐ふて山谷を搜求る事急也時に梶原平三景時といふ者あつて慥に御在所を知るといへども有情の慮を存じ此山中には人跡なしといふて景親が手を曳傍の峰に攀登る此間に武衛御髻の觀音の像を出しとある巖窟に安し奉らる實平其意を問奉る仰に云首を景親等に傳ふるの日此本尊を見れば源氏の大將軍の所爲にあらざるのよし人定て誹を貽るべし件の尊像は我三歳のむかし乳母清水寺に參籠せしめ嬰兒の將來を祈る事懇篤にして二七箇日を歴て靈夢を蒙り忽然として二寸の銀の正觀音像を感得し歸敬し奉る也と仰らる北條殿椙山の陣に參着し箱根山の別當行實駄餉を持しめて武衛を尋奉る北條殿咲て將の御前に相具し件の駄餉を献す公私餓に臨むの時直已に千金なりといふ

相模小田原

大磯まで四里小田原北條氏綱の時京都西洞院錦小路外良といふ者此地に下り家方透頂香を製して氏綱へ献す其由緒は鎌倉建長寺の開山大覺禪師來朝の時供奉し日本へ渡り家方を弘む氏綱これを靈藥とし小田原に八ツ棟の居宅を賜り名物として世に聞ゆ

小田原北條　豆相記云北條新九郎長氏は清盛の末裔なれども時移つて匹夫に落て漂流す然れども智謀勇武世に蓋ふ奮然として備中國より京都に登り足利將軍義政公に仕へて今川義忠をたのみ高國寺城に居し忠功をはげみ屢豆相に働き奇策をめぐらして小田原城を拔てこゝに居し早雲と號す武威いよ〳〵熾んにして雄偉豆相に振ふ其三代氏康に至つて關左の動亂を鎭め關八州を併呑す氏直まで五代相續して當城に居し武威を八關に耀すこゝに天正十八年の春豊臣秀吉卿北條が公命に從がはざるを惡みて速に大軍を催し出陣し石垣山屏風山を本陣と定め軍將を八方に備て雲霞の如く取圍む北條も東八ヶ國の軍兵數十萬をもつて防戰の術怠らず然れども秀吉卿の下知にて諸軍鐵炮石炮をもつて城中を劫す同年七月五日左京太夫氏直城を出て罪を謝すにより落城に及ぶ同十二日氏直高野山に遣れて小田原北條五代九十七年ここに滅ぶ

酒勾川　小田原の北にあり酒勾は相模川の略訓といふ又一名鞠子川とも云小田原と酒勾の中に山王原といふあり星月祠井上宮あり三浦荒次郎の靈を祭るといふ

〔盛衰記〕治承四年八月廿五日和田小太郎義盛三百餘騎にて鎌倉より稻村腰越八松原大磯小磯を打過て二

日路を一日に酒勾の宿に着と云々

〔同記〕相模國圓子川を渉りし時梶原が鎌倉殿に水をさつと蹴かけ奉りし時睨返り給へるに梶原とりあへず

まり子川ければぞ波はあがりける

と申せし事を記せり

小餘綾磯　酒勾より大磯までの磯邊をいふなるべし

方角抄には大磯小磯のほとりと記せり鎌倉志には腰越と七里ヶ濱との間を小動とあり

古今　玉たれのこかめやいつらこよろぎの　いその波分沖に出けり　敏行朝臣

同大歌所　こよろぎの磯立ならし磯菜摘　めさしぬらすな沖になれ波

後撰　君を思ふ心を人にこゆるぎの　磯の玉もや今もからまし　みつね

同　思ふ事まつに月日はこゆるぎの　磯にいでゝや今はうら見ん　右近

拾遺　いかにしてけふをくらさむこゆるぎの　いそに出てもかひなかりけり　小貳命婦

檀千　陸奥によをうき島そありといふ　闕こゆるぎのいそかさらなん　小野小町

新拾遺　いたつらに又このたひもこゆるぎの　いそかて法の船におくるな　欣子内親王

夫木　鶴もすみ松も生たるこゆるぎの　磯の盛さへ千世なこそ祈れ　宣能

同　こゆるぎの磯の松風音なれは　夕波ちとり立さはくなり　土御門内大臣

きのふたちけふこゆるぎの磯の波　いそいて行ん夕暮の道　北條氏康

『曾我里』酒勾川の東小八幡より廿町許入曾我兄弟住し所也山中にして曾我の中村といふ

『川勾神社』梅澤村にあり延喜式小餘綾郡一座と掛す今二宮明神と稱し例祭五月五日

『藤巻寺』同村にあり梅澤山東光寺と號し眞言宗也堂前に古木の紫藤あり傍の諸木に蔓事多し故にこの名あり

『鹿松』同村松原にあり由緣詳ならず

『吾妻山』街道の左の方二町にあり山上に吾妻權現祠あり

『相模國府蹟』今國府新宿といふ立場となる左の方に六社明神藏王權現立給ふ

『日陰馬場』今國府吹切といふ左の方二町許に櫻馬場ありこれを日かげの馬場となづく小栗判官鬼鹿毛と

いふ名馬を責し所といふ

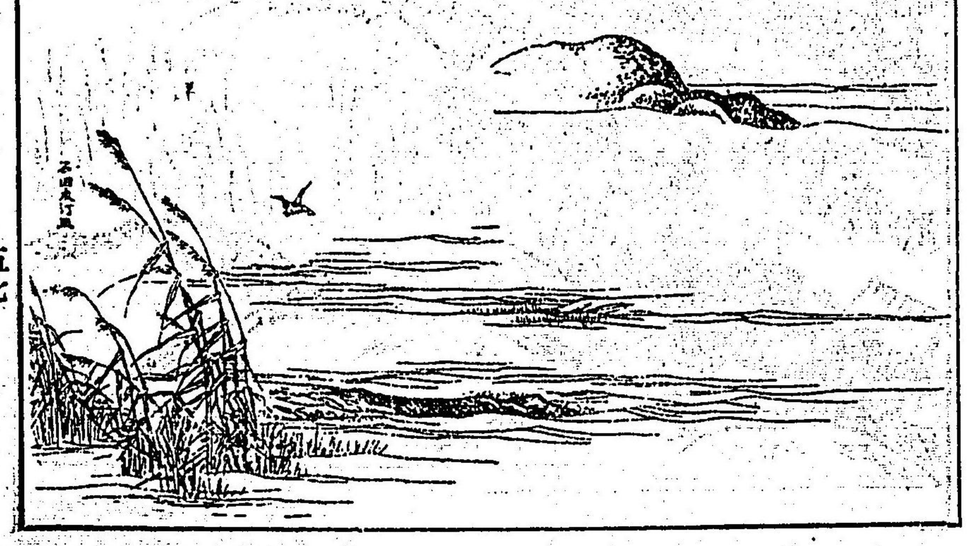
『小餘綾杜』中廻りといふ所にあり毎年五月五日六社明神の祭式此所にてあり

『切通地藏』此所の道狹し山間を切通して街道とすこに石佛地藏尊を安ず行基の作也とぞ五尺許

鳴立澤　むかし西行上人東路行脚の時此ほとりの澤邊を通り給ふに折から秋の暮の物淋しきに鳴の立去りてなをも寂寞たる風情を感じ詠給ふを新古今に撰はれ三夕の名歌の其一首とす

新古今　心なき身にもあはれはしられけり　鳴立澤の秋の夕くれ　四行法師

然れは鳴立澤といふ所をさしたる名所はあらざるべし後人此大磯小磯の海濱をなぞらへいふなり井蛙抄云俊成卿千載集を撰給ふ時は西行上人吾妻の方にありけるが勅撰ありと聞て上洛しける道にて登蓮法師に行遇たり勅撰の事を尋給ひければ早披露に及び師の御歌も多く入たりと答ふ西上人云く鳴立澤の歌や入たると問給ひければそれは見え侍らずと答ふ扨は見て用なしとてそれより又東國へ取て返し下り給ひ



鳴立澤
鳴立菴

鳴立澤
あやめ
いとあむ
碑ある
杉の流れ
ながれ
いとうん

けるとかや其後の勅撰新古今集に撰ばれ給ひしは本懐とやいふべき

一とせ飛鳥井亞相雅章卿勅使として吾妻に下り給ふ時此所に到り駕をとゞめられ鳴立澤の跡を見んとて所の者に案内させてこゝのかしこのとて其かたさだかならざりしに

彌生の頃鳴立澤により侍りて

哀さは秋なられともしられけり　飛鳥井雅章卿

鳴立澤のむかしたつれて

寶永二年秋通りける時

今もなほむかしの秋を思ふそよ　松平左近將監邑乘

鳴立澤の夕くれの空

『鳴立庵』小磯の路傍にあり寶永年中誹諧師三千風此草庵を結んで鳴立澤の古蹟をとゞむ

『西行上人像』草堂に安ず相傳ふ上人六十四歳の肖像にて高雄の文覺坊鉈作りの像といふ又西上人の杖同色紙など什物とす眞なる物とは見えず

『虎御前像』草堂に安ず十五歳の像大磯の虎といふより後人作りてこゝにおくなるべし側に東鑑の文石刻して立つ

『鳴立碑』此地闢きし時三千風これを建る麗文にもあらざれども三千風が芳志を感じてこゝに載る

銘曰

心なき身にも哀は　しられけり
秋の夕　暮とよみしは　さばのゐん
のりきよの　かしらおろして　つひの身は
しるしにや　佛道歌道　いみじくて
門いでに　命なりけり　佐夜の山
うつゝなき　風になびきし　ふしのねの
身のひまを　あくる箱根や　こよろぎの
友ちどり　さもれの鳴の　澤水は
新古今　三の夕の　名どころを
和歌所　あすかゐ雅章　駕を立て
おはれさは　秋なられさも　しられけり
歌ゆへ　我もあんさやの　笠松や
とぶ人し　嵐のよする　高すなこ
この澤の　あるしを願ふ　さちありて
もんがくの　なた作りてふ　みゑい堂
虎心堂　猶五智尊を　かいきせし
はか所　晋身しこゝに　夜盗して
あるは又　田鳥集に　國〳〵の
あつめつゝ　五百年忌の　たむけまて
我國の　いせのいさわの　友洋人
たのししや　心なき身の　四へ行

鳴立澤の
ほくめんの武士
四へ行名の
見ぬ世の旅の
うつの山べの
けふりとならん
いそげと昔る
めいほくなれや
したふや時の
折しも春の
鳴立澤の
月より外は
かきならしつゝ
その名高雄の
和歌三神や
宗鑒居士の
誘につくり
時歌連俳
滿願せしを
施入なして
道しるへにと

立しいしふみ　東往居士　三千風誌之

元祿十三暦辰二月望日

大磯　平塚まで廿七町此磯邊より盆山石出る茶店に出してこれを賣ふ家多し

『虎子石』驛中延壽寺にあり當寺に此石の緣起あれとも詳ならず

十郎懷恨愛於兎一　血氣武人厚甲冑
妾婦當時暫星否　陰成二此石似忍夫一　羅山子

三社權現　高麗寺村にあり宮寺を鷲足山高麗寺といふ開基文觀僧正也例祭六月十八日此所の生土神とす『祭神忍穗耳尊』社傳云むかし神功皇后三韓退治の御時高麗にて神威を耀しこと〴〵く平定有て神靈三韓に止り給ふ厥后　仁德帝の御宇に歸朝まし〳〵給ふ依レ之三國を併せ給ふ神なれば三社權現と崇め奉る これより又伊豆御山へ神幸まし〳〵けりある時大磯の浪間に夜々光あり伊豆山の松葉仙人これを見て大磯に來り光の本をさくり給へば皿形三尺兩面の神鏡を得たり其後靈瑞さま〳〵あれば伊豆御山にうつし奉る松葉仙人は日金峰に飛去り故にこゝを高麗寺と號し唐か原の名もありしかしながら古詠ある唐か原は鎌倉也次下に見えたり

花水橋　高麗寺村にあり此邊より富士山よく見ゆる風景よし　山崎閣齋

驛馬進レ鞭行二一路一　野牛浮レ鼻入二前蟠一
遊遊眼豁海山景　罷倦人過花水橋

藤澤まで三里半

相模塚　『八幡宮』八はた村にあり別當を鶴峰山等覺院といふ例祭五月五日社内より大山不動尊への道あり

馬入川　馬入村にありむかしは相模川といふ水源は甲州猿橋より流る此邊の大河也(東鑑)に文治四年正月三浦介義澄浮橋を相模川に搆へし事見えたり又俗傳に建久九年十二月稲毛三郎重成亡妻の追善のために相模川に橋供養を營む此重成が妻は北條時政が娘にて頼朝卿の御臺政子の妹なりこれによつて右大將結緣の爲に行向ひ歸路にして八的原といふ所に於て義經行家が怨靈を見給ふ又稲村崎にて　安德天皇の

御靈現形すこれらを見て忽に身心昏倒して落馬し給ふ供奉の人々前後に圍み助け參らせて御歸館ある遂に御病惱おもらせ醫療術を盡すと雖ども更に寸効なし其年も既に暮て明る正治元年正月十三日終に逝去し給ふ御歳五十三とぞ聞へし征夷大將軍正二位前大納言に任官し給ふまで都て世を治め權を執給ふ事二十年なり御盞所平の政子此悲歎に耐がたく髮をおろして尼となり菩提を弔ひ給ふ

一說には此橋供養の砌水上に惡靈出て黑雲舞下り雷電霹靂とす其時賴朝卿の乘馬駭いて落馬し給ふ馬は水中に飛入て忽ち死すとぞ故に馬入川といふ俗說ありいまだその實錄を見ざれば憶にしるす事能はず

〔太平記大意〕相模入道高時の嫡子相模太郎邦時は五大院右衛門宗繁が妹の腹に出來たる子なれば甥也主也二心はあらじと深く憑れ隱置けるが野心を挾んで賺し出し源氏の侍に討せて勳功を得んと急ぎ船田入道に告て相模太郎の落行ける道を遮てそ待ける相模太郎は道に相待敵の有ともしらず正慶二年五月廿八日の曙に淺ましげなる窶し姿にて相模川を渡らんとわたし守を待て岸の上に立たりけるを五大院右衛門餘所に立てあれこそすは件の人よと敎へければ船田が郎等三騎馬より飛て下り透間なく生捕奉る俄の事にて張輿などもなければ馬に乘せ舟の繩にてしたゝかにこれを誡め中間二人に馬の口を引せて白昼に鎌倉へ入れ奉る是を聞人毎に袖を絞らぬはなかりけり此人未幼稚の身なれば何程の事か有べけれども朝敵の長子なれば閑べきに非とて則翌日の曉潛に首をぞ刎奉る昔程嬰が我子を殺して幼稚の主の命に換豫讓が貌を變じ舊君の恩を報せし其までこそあらめ五大院が心の程希有也不道也と見る人毎に爪彈をして惡しかば義貞實もと思ひかれも誅すべしと內々其義定りければ宗繁傳聞てこゝかしこに隱れけるが梟惡の罪身を責けるにや三界廣しといへども一身を措に處なく故舊多しといへども一飯を與ふる人無ふして遂に乞食の如くに成果て道路の涯にて飢死しけるとぞ聞へし

十間坂　馬入の東一里許にあり此所左に富士、大山箱根右に江島。鎌倉。六浦。金澤など見ゆるゆゑ十景坂ともいふ建武のはじめ相模次郎時行三萬騎の勢にて鎌倉を發向し此所にて十七か度戰ひ三百騎に討なされ鎌倉の大御堂にて討死しける事これも太平記に見えたり

雨降山大山寺　相州大住郡大山の巔にあり眞言宗修驗道別當八大院其外坊舍十八院御師百五十餘宇又裝毛村に十五宇みな修驗也

『前不動堂』上方京師より參詣は當國小田原より左へ曲りて山麓裝毛まで六里半也江戸より詣するには藤澤の西四ッ谷より右へ曲りて山麓子安村まで五里也

玆に一鳥居あり前不動堂まで廿八町坂路の南側民家軒端をつらねて御師の家旅舍。茶店あるは名物の挽物店多し坂路みな石段にして總數一萬五千餘もあり前不動より本堂まで十八町男坂女坂の二筋の嶮路あり岩石多くて歩し難し

『奧不動堂』本堂と稱す本尊大聖不動明王は僧正良辨の作座像長五尺南面

『行者堂』本堂の西にあり役行者を安ず『鎭守』本堂の後にあり天照太神。山王。熊野。大黑天。春日。石尊。不動尊等を安ず

『白山祠』本堂より一町許上方にあり『神輿舍』行者堂の傍にあり

『鐘樓』鐘に銘あり文これを畧す銘の末に寬永十八年辛巳十一月廿日大檀那從一位左大臣源朝臣家光公と鑄す

『山門』『本堂の前にあり『二王門』下段にあり『經藏』二王門の傍にあり

『二重瀧』本堂より三町許北にあり傍に靑龍權現の祠あり

『良辨瀧』坂路のうち開山町にあり『新瀧』坂路福永町にあり傍に愛宕權現祠あり

『大飛泉』一の鳥居より上方霞河原にあり

石尊大權現社　本堂奧不動より嶮路廿八町にあり女人結界也勿論常に諸人の參詣を禁ず每歳六月廿七日より七月十七日まで參詣を免す江戸及び近國近鄕

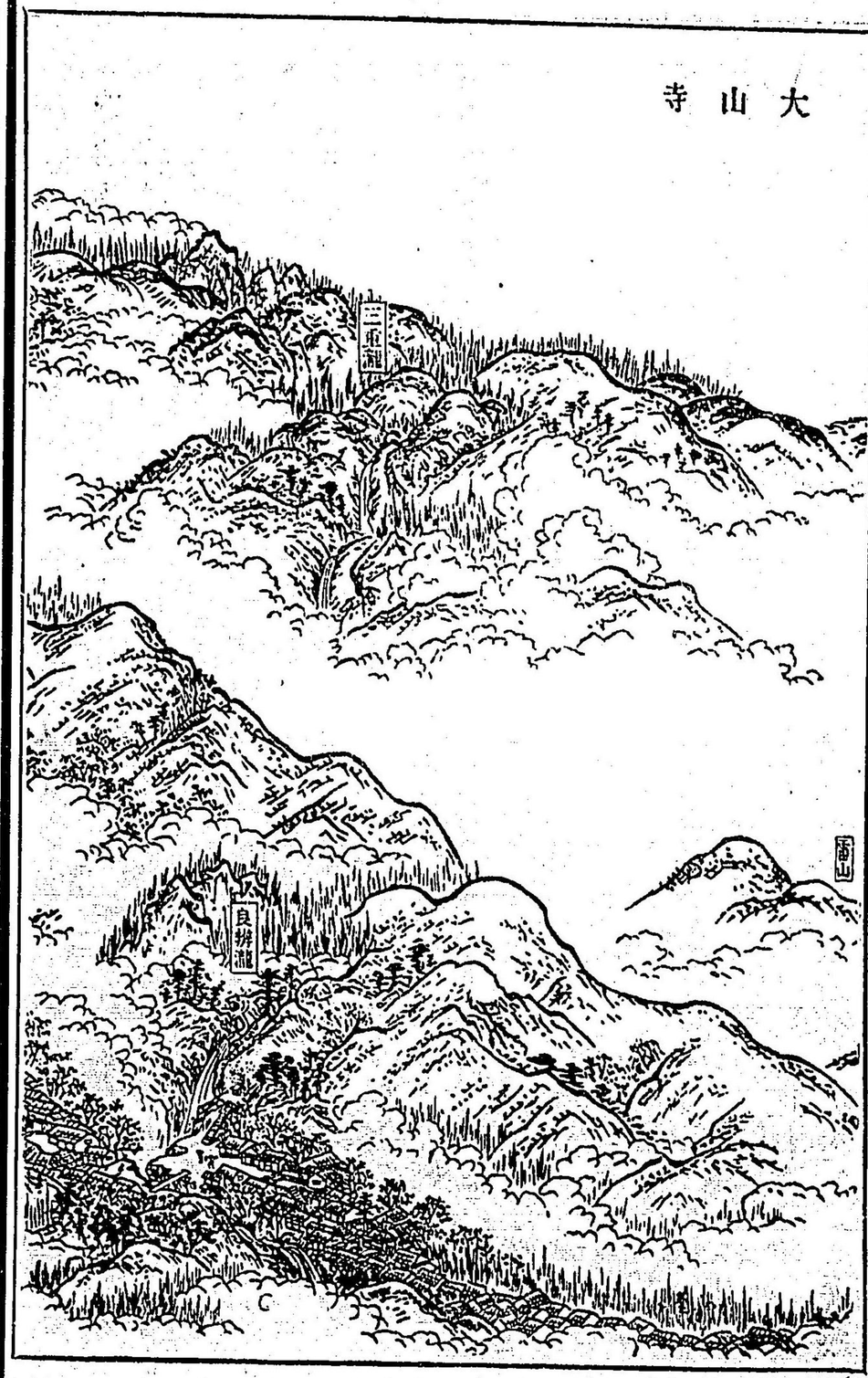
群參する事夥し道中筋大に賑ふ常は本堂の傍なる中門を閉登山なし

『祭神大山祇命』神躰は巖石にして傳云日本武尊東夷征伐の御時此岩上に腰打懸て憩ひ給ふ石なりと云或が云親鸞聖人相州に七ヶ年經回の時こゝに登山し給ひて此石面に歸命盡十方无碍光如來の十字を鐫刻し給ふとぞ本願寺第八代蓮如上人こゝに登山しこれを拜して其旨趣を書給ひし遺文當山に傳來すといふ

『末社』德一權現祠。風雨兩祠。大天狗。小天狗祠。石尊宮の傍にあり

〔寺說〕夫當嶺大山寺の開基は良辨僧正也（此僧正の傳は釋書に見えたり俗性は近江國志賀郡の人とあり當山の說とは異也大和名所圖會にも此傳記大畧出せり）此人の俗姓は相模國鎌倉染屋太郎時忠の子也時忠は聖武帝の御宇神龜年中關八州總追補使として東夷を平治す其祖先は大織冠鎌子大臣の玄孫にして鎌倉に在住し家富榮て一門軒をつらねて盛也されども齡四十に及ぶといへども家を繼べき子なしある時時忠妻に語つて云我家倍繁榮たりといへどもいまだ家督とすべき一子も持す是第一の愁とす且は女の身として子なきをば石女とて罪業深し諸菩薩の功德何れに疎ならずといへども特に觀世音勝れ給へりわれと共に常にこれを念じ一子を儲給へとて其より普門品を晝夜讀誦する事年あり或夜の夢に齡八旬に丈給ふ老僧香染の袈裟に水晶の珠數をつまぐり右の手に鳩の杖左の手には一卷の經を持し枕上に立せ給ひ此經は法華經第二十五普門品也われを誰とか思ふ普陀洛山の敎主也此經を夫婦の者に授んとてかきけす如くに失給ふ夫婦此靈夢を蒙り感涙して歡びあへり程なく姙身と成て月を累て一男子を儲く夫婦の寵愛限なし出誕の後二月ばかりに赤子を乳母に懷かせ母は園に出て桑を摘れける其時雲中より金色の鷲忽然として翔來りて赤子を抓んで虛空に飛行す嗚呼哉といへど早雲に入て見えず夫婦の二人天に仰ぎ地に倒れ悲歎愁傷腸を斷ばかり也去程に一子を喪けるより家屋財寶益なしとて其儘に捨て共に何國ともなく出

大山寺



にけり我子に再び逢んとては深山の峨々たるに分入巖を枕とし木實を粮とし又荒磯の凄々たるほとりに臥て浪の音に夜を明し年月を累て我子はおはせぬかとゆきゝの人に尋ね只風狂の如くこゝかしこに呻吟ありき陸奥の大隈川に至りてかくなん

みとり子にあふくま川と聞つれと
なをも行衛はしら涙の音

それより東山道にかゝり信濃國より住馴し相州由井里へと歸りけるいにしへ住し家も今は其形もなく壁落軒端崩れ門も朽て扉もなし見るに涙もとゞまらず又故郷を出て都の方へとこゝろざし西海を凌ぎ筑紫の果までもさすらへんと體は憔悴と衰て見るにかげもなく流落の姿と成にける子を思ふ夜の鶴叢の雛子の啼にも猿の聲の斷腸の思ひ耐かね共に血涙といめかね一日の粮乏しく半日の齡のうき事幾度こそかあらめきのふすきけふと暮早三十の年ぞさまよひける心は老驥の千里を思へども疲れは飢鷹の一呼をまつが如し其頃南都に義淵僧正とて碩學宏德の名僧ありある夜の事なるに當來導師彌勒菩薩來臨の体を夢見給ふ其早旦に春日野に到り大明神に詣し其歸るさ大なる楠の枝の間に赤子の泣聲聞ゆ怪しく立より見給へば金色の鷲嬰兒を懐て巣中にあり斯て僧正持尊の不動尊に祈り給へば一疋の猿來てかの嬰兒を懐て僧正に奉る即家にかへり撫育し給ふ聽て名をば金鷲童子とぞ號ける斯て年月を歴ほどに十九歳にぞなり給ひける聰明清徹の神童にして他に双ふ物なし然るに師の僧正は年齡八十にして入寂し給ふ金鷲奇童大に泣哭し其時追福の爲に手づから執金剛神の像を作り奉り御足に糸をかけて引動す如して禮拜毎に唱て云聖朝安穩天下泰平興隆佛法利益衆生とぞ祈りける信力通して忽御足より五色の光明を放て宮中を照しける　聖武天皇これを奇として勅使を立られかの光の元を見せしめ給へば金鷲行者の許へぞ尋入る勅使問て曰いかなるや光明王宮を照す金鷲荅て佛法興隆の志願あり勅使此よしを奏達あれば帝大に悅び金鷲行者をめされ朕も佛道恭信の志ありといへども未だ其師を求ず行者を是より我戒師となすべしと宣旨あり

ければ金鷲蹶て薙髮して良辨とぞ申ける其より　帝の御歸依淺からずして遂に春日野に東大寺を建られこれを大佛殿と稱じける即良辨別當職を蒙り給ふ是華嚴宗の濫觴也去程に時忠夫婦は西海へ赴かんとて山城國淀の大渡に着て渉し守を賴み便船を乞ければ即船を出ししらぬ國しらぬ里の人も乘合ければ思ひ〳〵に云ける中に當時奈良の都　聖武帝の御戒師東大寺の別當僧正良辨と申人こそ幼き時鷲の巣より卸したる人とぞ承る今は　帝の御歸依厚く世の聞へも例すくなく侍るとぞ語りける時忠夫婦これを聞よりも胸騷ぎ急ぎ船より下りて奈良の都へと尋ける其地の寺社を巡禮し偏に我子に逢せ給へと祈念大かたならず二人はこゝにも其行衛しれざりければ身疲れて東大寺の南大門の傍に三本の竹を立藁薦を纏て惱煩ひける其頃僧正良辨參内のかへるさ此老夫婦の方より光出て良辨の車を照しけり僧正怪み問せ給へば我等は相模國の者也一子を鷲に抓れ餘波をしさのまま三十餘年其行衛を尋さまよひありき候也と申す其誕生の年月はいかに夫婦荅て其嬰兒の守袋にも記せる如く慶雲二年己巳四月十五日也僧正これを聞て扨は我父母ならん且は歎び且は歎き二人共に御車に乘て御館舍へ伴ひ給ふ其頃貴賤これを傳へ聞て袖を絞らぬはなかりけり　帝これを聞召感涙を催し給ふ則　詔有て本領安堵の官符を賜りければ相州由井里にむかしに變らず館を造りて遠近の親族聚りてむかしの春に遇こゝちしていと賑しくぞ見えにける良辨僧正も故郷なれば相州に赴き給ひ由井より西の方に當て高山あり其山嶺より靈光赫々たり即僧正登山し土民を聚て大木を伐し岩を穿て高峰に至り光の元に至り給ふ金色の石像の不動尊出現す僧正これを祈念し石尊と仰ぎ社を建て安じ又槻木をもつて一躰の尊容を作る今の本堂奥不動明王これ也此山峰高くして清泉なし一の流を下し給へと祈り給へば巖頭より一流の飛泉沼々として落にけり今の二重の瀧これ也即青龍權現と祀て祠を傍に建給ふ當山開闢の靈應を帝に奏し給へば叡感斜ならず總房相三ヶ國の中にて

寺產を若干宛行ひ給ふて其倫旨を賜ふ其より伽藍壯麗にして四十九院の坊舍に香煙の匂ひ芬々たり益平天下の祈禱として僧正明王の尊前に三七日六波羅密を修し給へば滿願の日明王一偈を示して曰

當來導師慈氏尊　法華留生名真辨
我山建立作佛事　求法衆生施安樂
此地清淨爲結界　迷多衆生不來住
東南西限十八町　我形像作爲本尊
是山五佛表形像　五大明王當守護
一度參詣得福　家內安穩無諸病

當山金堂の乾の谷に大なる池あり此池にて良辨一七日加持し給へば池中より大蛇現じてわれは此山を守護者也年久しく荒神と成て五濁の塵に交り法性の曉を見ざるゆゑ蛇身となる今僧正の法施によりて都率內院に生る此後當山に跡を垂て永守護神と成て法を魔障する者を平くべしと云終て見えず（以上當山寺記の大意なり）抑此山は相州第一の高山にして常に雨氣絶す故に雨降を山號とせり山麓より頂嶺まで巉々として平地なく巖を双べて段々とし左右に民家相連り其中に當山の御師の家多し諸國に檀那を持て歲々神札を配るいにしへはみな修驗者のよし聞ゆ山奥の石尊神は阪徑崔嵬として雲に連り霞に封す每歲六月廿七日より七月十七日を限て路を開けば江府ゆ詣人稻麻の如く近國近鄕の登山竹葦に似たり旅舍は所せくまでこみ合山野の茶店は其地の產物を出して商ふ小田原の方より詣人は仮住の觀音に參りて坂東五番の札所を拜す簑毛より登りて大日堂。簑毛不動を拜す此明王はむかし　應神帝の御宇初て漢土より渡らせ給ふにより日本最初の靈尊と崇む原大山の名は神躰大山祇命をもつて山の名に呼とかや京師の愛宕山和州の金峰山にも比して絶峯は乾坤を離れ天地の外に出るが如く眞に拾芥抄に見えたる七高山の外にして八極を觀る靈嶽なるべし

染屋時忠を近州志賀といひ又相州由井里といふ事予一勘あり時忠は藤原氏にして淡海公の後裔也因是近江に領地あるべし又相州は任國にして住居せり故に近州といひ相州といふは此旨趣なるべし

東海道名所圖會卷之六

江島辨財天女社

或は繪島又は榎島とも書す上方よりは藤澤の西車田より行程一里九町右に入て詣す江島の麓六七町の間潮の干たる時は步行にて渡る潮滿たる時は船渡しあり海中にありて形は盆山石の如し日本三辨天の其一箇也所謂嚴島。竹生島。江島の三島なり

蘂盡　江の島やさして汐路にあさたるゝ　神のちかひの深さなるへし　鴨長明

〔江島譜〕相州江之島は　開化天皇六年四月江頭の南方に中て海面一夜鳴動して碧空に注ぎ黑雲朦朧として洋々たる百灘天地を分たず漸其鷄鳴に及んで龍女の音樂千波の中に聞え天童舞遊んで花降異香薰ず既に鯨濤長く靜り暴風遍く盡て孤島海上に涌出す今の江島これ也此時に當て天女忽然として降臨し給ふ續て四王天十二神將天女を守護す遠近の村民遙に此奇瑞を拜し漁父は初て鄙心を棄て精信を發し農夫は野情を止て至誠を起す而后　欽明帝御宇六年四月詔に依て初て兩度の例祭を行ふ又　順德院御宇建保四年正月十五日江島明神詫宣有て滄海忽陸路と變ず因茲參詣の人民船の煩なからんと近くは鎌倉中の緇素群をなす眞に希代の神變也三浦左衞門尉義村武衞頼朝卿の御使としてこゝに詣する事東鑑に見えたり此島の開基初は役小角あるひは泰澄又は道智其次に弘法大師後世文覺房も再興ありし靈場也此地は風景眞妙にして關八州の中に山水の美たる勝邑なるべし

窟本宮

江の島南の渚の金窟をいふ大辨財天を安ず神像弘法大師の作也窟の內院に弘法の加持水あり又十步に兩院を別つ所謂胎藏界。金剛界を表す又其奥に兩部の大日如來を安ず是天女根本の寶宮也又外側東の窟に無熱池あり又蛇形池ともいふ又西の窟に弘法大師護摩の爐あり又日蓮の跌座石といふあり傳云

日蓮上人此窟に籠り石上に跌座して冥感を祈り自法華經を書寫して窟の內院に藏む今此法華經は別當岩本院の什寶とす此窟の舊號は本小岫といふむかしは金も出し也とぞ

『魚板石』龍窟の前にあり岩面平にして魚板の如し遊人　石上にて酒を勸め鮮を料理て興じ釣を垂て慰む風景の所なり

本宮御旅所　江の島西南の　山嶺にあり　毎歲四月初巳日に龍窟の辨財天を神輿に乘て別當。社僧。神人列を正し音樂にて此御旅所まで祭禮の行列あり甚嚴重にして殊勝の神式也江戸あるひは鎌倉。金澤其外近國近鄕群參夥し又十月初亥日に龍窟へ還幸なし奉る行列同前なり然れば四月より十月までは山嶺に安じ十月より四月までは龍窟に安ず

『拜殿額』江島大明神と書す　後宇多院の宸筆也〔江島誌〕建治元年九月廿二日　後宇多帝宸筆を染られ蒙古退散御祈願の爲に掛らるの額也

『求聞持堂』本宮の側にあり虛空藏菩薩を本尊とす求聞持の額あり日光御門主光辨法親王の御筆なり

『開山堂』求聞持堂の東にあり弘法大師を安ず『觀音堂』求聞持堂の南にあり『末社』稻荷天滿宮妙音天を相殿に祀る『木柱鳥居』上宮より本宮へ行坂本にあり『銅鳥居』辨財天の額をかくる本宮へ登る坂本に有『石鳥居』金龜山の額をかくる坂の上にあり『神庫』神輿樂器等を藏む此樂器は賴朝卿の寄附也『石燈爐』樓門の前に多く連なる『石鳥居』龍窟へ下る坂の上にあり本宮辨財天の額あり初は賴朝の寄附也『岩屋鳥居』大寶玉といふ額あり弘法大師の筆也

『別當岩本院』當山を金龜山與願寺と號す岩本院は當山總別當にして本宮龍窟を護る眞言宗京師仁和寺御室の末派なり妻帶す慶安二年の御朱印あり客殿の額嚴本院は朝鮮螺山の筆なり

上之宮神殿　當山の中程にあり祭神大辨財天女神像は慈覺大師の作にして當宮は　文德帝三年に慈覺大師の造立なり

『拜殿額』辨財天と書す釋乘圓の筆也『末社』神明。熊

江島
海濱

江島辨天宮

野。稻荷を祭るこれに十一稻荷といふ額あり『護摩堂』社の西南にあり中尊愛染明王左右彌陀地藏を安す『樓門』樓上に妙音天を安すこゝにも辨財天の額あり『鐘樓』社の北にあり寶永年中鑄る銘あり『木柱鳥居』辨財天の額あり傍に燈爐數々あり『上之坊』上之宮を護る眞言宗江の島三坊の其一也當坊は淸僧なり

下之宮神殿　山の初にあり〔社說〕云正治元年良眞上人江の島に至り先達の宏德を慕て志願を立て大法を修する事一千日に逮ぶ其滿ずるの夜に天女光明を放ちて生身の神像を現じたまふ美童は左右に擁ず其時天女上人に告て曰われむかしより末世の衆生を度せん爲に此山に年久しく住り上人我志に稱へりとて神敬あさからず其後上人入唐して宋の慶仁禪師に謁し日本江の島の事を告らる其時禪師云日域江の島は觀音垂跡の地なり東方の名刹にして其地の谷に一つの池あり巽の尾崎に一つの荒石あり形は蝦蟇に似たり上人日本に歸り給はゝ江の島に至りかの池の乾にして荒石に向ふて社檀を立べし此池は龍女常住の無熱池なりと諭ゆ上人正しき敎示を授り又碑石。獅子石を携へて歸朝す因茲江の島に至り鎌倉將軍實朝公に請て建永元年に初て社檀を建立し自天女の像を刻てこゝに安す今の下之宮の神像これなり

『三層塔』坂の半にあり五智如來を安す杉山檢校の建立なり『稻荷祠』塔の左にあり『焰魔堂』塔の右にあり『隨身門』坂の上にあり天女觀といふ額をうつ『牛頭天王神輿』隨身門の側にあり『開山堂』良眞上人の像を安す『觀音堂』如意輪觀音を安す『藥師堂』十禪師と同座なり『末社』熊野。神明。山王を祭る『護摩堂』觀世音を安す『二王門』小坂の上にあり辨財尊天と額をうつ『石鳥居』坂下にあり金龜山と額をうつ『鐘樓』寛永十四年の造立なり銘左の如し

奉二治鑄一金龜山與願寺宇賀辨財天女下宮鐘銘

大日本國東海道。相模州江島者。從二金輪際一涌出之靈島歟。福神詫居之巖窟焉。

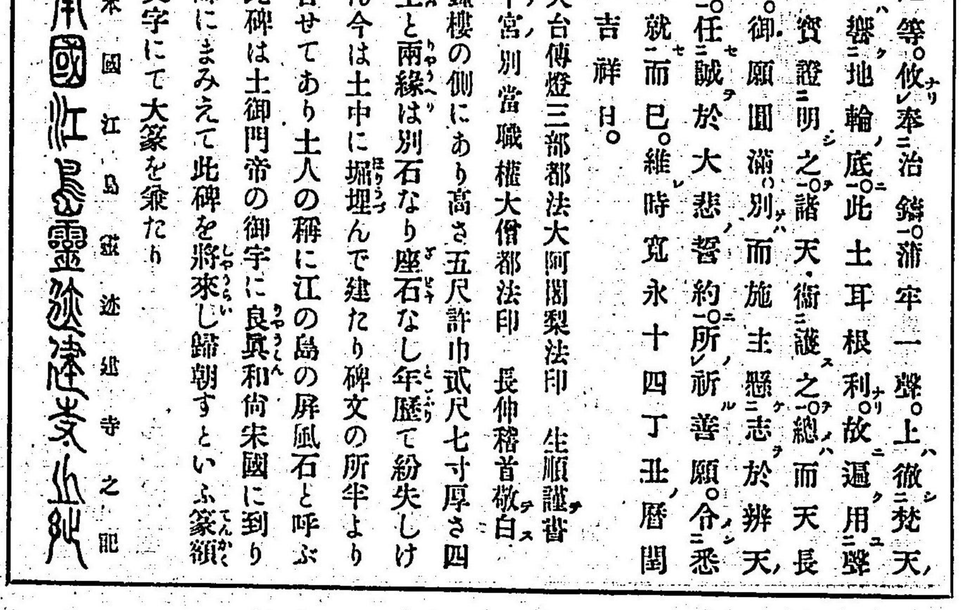
加之人王三十代。欽明天皇十三壬申歲。自二四月十二日戊刻一當二于江野南海潮水之水門一。雲霞暗蔽二海上一。日夜大地六種震動。天女顯二現雲上一。童子侍二立左右一。諸天龍神。水火雷電。山神鬼魅。夜叉羅刹。從レ天降二盤石一。從レ海擧二砂礫一。電光耀レ空。火焰交二白浪一。同レ及二于二十三日辰刻一。雲去霞散。見二海上一有二島山一耳。今之三神山是也。抑此神將王者。天地之起々。陰陽之初々也。聞法年舊。誰知二空王往事一。利生日新。何二如尊神現德一乎。本地則等覺妙覺之尊。大慈大悲之濟度幾舊迹。亦天童天女之體。與レ官與レ福之利益是新矣。因レ茲役優婆塞詣二此山一。越知泰澄居二當島一。傳敎窓前發顯影向一。弘法床上對二請恒臨一。慈覺念時常隨給仕。安然行場應二滿知一。所以顯密權實宗。宗々被二冥助一。文武商農家。家々仰二靈驗一。矣肆信心之檀越等。攸レ奉二治鑄一。蒲牢一聲。上徹二梵天頂一。下響二地輪底一。此土耳根利。故遍用二聲塵一。三寶證二明之一。諸天衛二護之一。總而天長地久。御願圓滿。別而施主懸二志於辨天本願一。任二誠於大悲誓約一。所レ祈善願。令二悉地成就一。而已。維時寛永十四丁丑曆閏彌生吉祥日。

天台傳燈三部都法大阿闍梨法印　生順謹書

下宮別當職權大僧都法印　長伸稽首敬白

『碑石』鐘樓の側にあり高さ五尺許巾弐尺七寸厚さ四寸但し上と兩緣は別石なり座石なし年歷て紛失しけるとなん今は土中に堀埋んで建たり碑文の所半より折て繼合せてあり土人の稱に江の島の屏風石と呼ぶ相傳ふ此碑は土御門帝の御宇に良眞和尚宋國に到り慶仁禪師にまみえて此碑を將來し歸朝すといふ篆額ば小篆文字にて大篆を兼たり

大日本國江島靈迹建寺之記



これを三行に鐫す記の字石損して見えがたし僅に言扁を得て記とする也園の四方雲龍を鐫す古雅風流の奇品也碑文は剝缺して分明ならず石面に石目の霰あり て纔に。十界。性。人。成。と所々に別れて幽に見ゆる惜むべきの甚だしき也碑圖は鎌倉志に見えたればこゝに略す

『下之坊』下之宮を護る眞言宗妻帶なり御朱印を拜領す『銅鳥居』島の入口に立つ大辨財天と額をうつ江の島總鳥居なり『住吉祠』山口にあり『荒神祠』小坂の上にあり『荒神石』荒神祠の後山の半にあり其形蝦蟇に似たり浮説ありこゝに略す『福石』下之宮へ登る坂の半にあり俗諺に云此石の側にて何にても物を拾ふ者は必富貴の家となるといふ『蓮華池』山中にありむかし一遍上人遊行の時此所阿彌陀佛有縁の地也とて池邊に來つて稱名念佛し給ふ事年々ありしとぞ又一遍上人自筆の額あり蓮華水と書す今岩本院にありて什物とす

兒ヶ淵　龍窟へ下る岩下の岸にあり相傳ふむかし建長寺廣德庵に自休藏主といふ沙門あり奥州信夫の人也ある時宿願ありて江島に詣す此山中にして美少年に遇ふ藏主戀慕の思ひ止かたくやありけんかの伴ふ僕に問ば鎌倉の相承院に住給ふ白菊といふ兒なりと答ふそれより人をもつて竊に思ひのまゝを文に書て求れども更に諾するの色なし然れども日に增て思ひの闇ふかく色々と品をかへて云贈れども隨ふけしき見えず月を累て切に聞えければ白菊情あるものにやありけんある夜まぎれ出て江の島に行扇子を渡し守に與ていふやうわれを尋ぬる人あらば見せよと云て別れぬ其扇に歌あり

白菊をしのぶの里の人とはゝ　思ひ入江の島とこたへよ　白菊

うき事を思ひ入江の島陰に　すつる命は波の下草　同

かく二首の辭世して此淵に身を沈て終りけり自休慕ひ來つて此歌を見て思ひに咽び一律を賦す　自休

恩崖喰處捨生涯　十有餘霜在刹那
花貫紅顏碎岩石　蛾眉翠黛接塵沙
衣襟只濕千行淚　扇子空留二首歌
相對無言愁思切　暮鐘爲我孰促歸家

白菊の花の情のふかき海に　同

ともに入江の島そうれしき

これらを詠て此淵に共に身を投死したりける故に兒が淵といふ白菊が塚は鎌倉にあり自休の像は同く西御門法華堂にあり

『三天』兒が淵より岩屋へ行小坂にあり岩石三つに裂てありこれを三天となづくこゝに梵天帝釋四王天の天部影向岩といふ

『白龍窟』龍窟より東に回る第二第三の窟也二つの白龍つねにこゝに棲む龍が岩屋ともいふ

『龍池』第四の窟中にあり諸龍こゝに棲といふ〔江の島大艸紙〕近世一記ありて此龍池は辨財天根本の金窟にして代々の開師みなこゝに籠り給ひしといふ是妄談にして其證なし取るに足らず『飛泉窟』第五の窟中に瀧あり瀧の下に池あり白龍こゝにも棲むといふ『十二窟』島のめぐりにあり是辨財天女守護神十二神將の居所也といふ

『仁田拔穴』龍窟の東といふ今さだかならず俗諺云仁田四郎忠常富士の人穴より入つて此山の半腹へ拔出たりといふ富士の人穴の事前卷に見えたり然れども江の島へぬけ出たりといふ事舊記に見えず

『聖天島』島の東岸にあり此島の形聖天尊の像に似たり故に名とす今窟中に良眞上人の像を安す雨降んとする時は此島鳴動す此ゆゑに水天島ともいふ『吒枳尼天山』島の北岸に小山ありこれをなづく『皿可寺』東の山の半腹にあり眞言宗にて手廣の青蓮寺の末寺也眞に幽閑寂寞たる勝地也

江島名産　『幅海苔』『海雲』『比志岐』『鮑粕漬』至つて美味也高貴へ調進する事多し『花貝』貝にて色〳〵の模樣を作り山中にて多く商ふ

紀行　散さしと江の島しりやかさすらん　釋堯惠

〔江の島大艸紙〕夫當社の神躰は大巳貴命と久延彦命と仰事ありて天照大神を尊み其和魂を祀て富主媛命と號給ふ此神天降り給ひて辨財天女といふ事江島の神秘とすこれを神系圖或は和漢三才圖會に相州江

江島例祭

毎歳四月初巳日巳刻窟本宮より山路の御旅所まで音樂にて祭禮あり

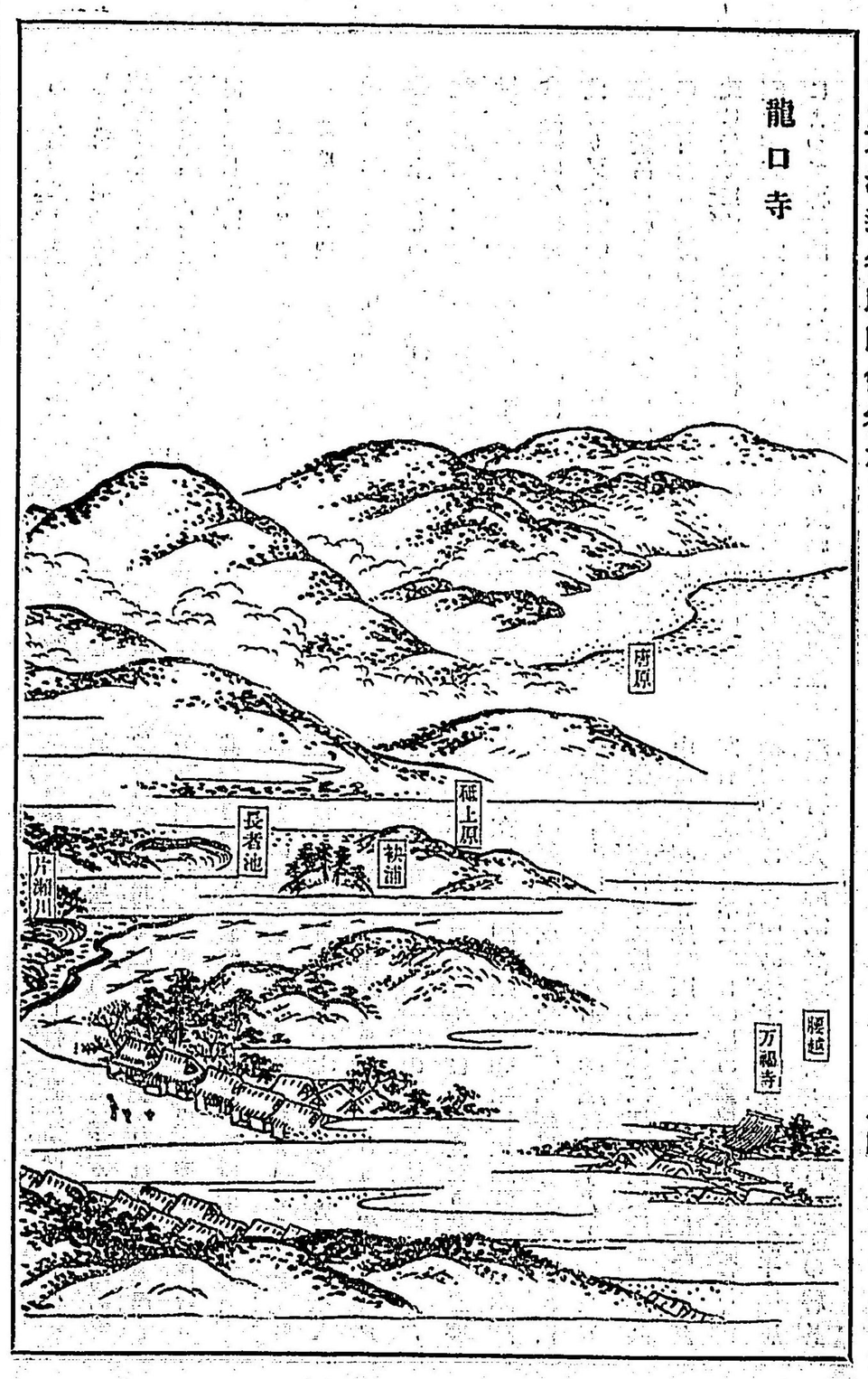
島の神は素戔嗚尊の御女倉稲魂神と書すこれ謬也云々（此大草紙といふは當山の別當岩本院一家の秘書なり）又〔大緣記〕（延暦寺皇慶作）大日本東海道相模國江島は天龍八部の所造辨財天女の靈迹也誰而靈島の先起を檢ふれば房。藏。模三國の堺なる鎌倉與海月郡に四十里の湖あり深澤となづく其體は水洋々として四山影を逆に摸し雲霧朦朧として谷を藏し犲狼岳に滿つ若人こゝに到れば黑風梢を拂ひ白浪岸に咽ぶ故に人跡湖邊に絶ぬこゝに又五頭の惡龍ありて國内に遍滿して災禍をなす事多しある時は山崩れて洪水田野を流す草木損弊して病疫忽ちに起る景行帝の御時惡龍こゝに横行し火の雨を降す人民是に惱されて石窟をもつて人屋とす　安康帝御宇には圓大臣に詫してなをも惡逆熾ん也　武烈帝の御時には金村大臣に詫して亂妨を企しむ此時に五頭の龍津村の水門に出て初て人の子を噉ふ於是初噉澤と號く時に此所に長者あつて十六人の子を持皆惡龍の爲に呑れて長者歎き悲しみ屋を西の里に移し彼屍をこゝに埋む是を今に長者塚とよぶ其後惡龍なをも村邑に出て多の兒を喰ふ故に人民畏れて他所へ越る其所を子死越と號く（今腰越に書す）因茲國民相議して兒一人をもつて惡龍の贄に供ふこれを今も龍口といふ　欽明帝十三年夏四月江島南海の水門に當て雲霞江頭に蔽ひ雷電波浪に接り天女雲上に現じ給ふ美童左右に供奉し諸天龍神は空中より磐石を降し海底よりは砂石を擧て海面に一つの島をなす今の江島是也其時十二の鵜來つて島に徘徊す故に鵜來島ともいふ辨財天女は此島に天降給ふ容貌微妙にして金窟に耀けりかの五頭の龍は天女の神威に惶れて屈伏し却て國家豊饒の守護神と成今の龍口神祠は是也厥后　文武帝四年夏四月役行者豆州の大島に在て遙に北海を眺給へば晴空に紫雲靉靆す行者專不動の咒を誦す其時瑞雲窟中に起り光明空裡を照し忽然として天女化現し給ふ八臂の尊體にして是辨天影現の最初也養老七年春三月越泰澄江島に到り陀羅尼を誦す辨天も亦生身を現じ給ふ弘仁五年春二月弘法大師聖跡を拜せんとて東海に赴く相州津村の濱に至り遙に南海を眺給へば靈島

あり島の頭より彩雲浮んで雲上に金龍を見る大師敬して船に乘じ島に到り金窟に入て趺坐する事一七日專眞言陀羅尼を讀滿ずる夜窟中嚴淨として梵樂聞ゆ天女忽然として現れ八臂具足の相好を見せ大師に一偈を示して曰

三界是我有　衆生亦吾子
此處多諸難　唯我能救護

承安三年文覺上人豆州謫遷の時武將頼朝卿に謁して義兵を上さしめ文覺は江島に來て辨財天に祈願す其後四海治平天下靜謐の日文覺房此龍窟に參籠し奥州伊達秀衡調伏を禱る此日金窟に鳥居を建らる其外鎌倉武將の尊仰あるひは龍穴にて祈雨の事粗東鑑に見えたり又武衛の執權北條四郎時政江島に參籠して子孫の繁昌を禱りけり三七日に當りける夜緋袴に柳裏の衣着たる女房の端嚴美麗なるが忽然として來り時政に告て曰汝が前生は箱根の法師也六十六部の法華經を書寫して六十六箇國の靈地に奉納したりし善根によつて再び此土に生る事を得たり然れば子孫永權を執て榮花にほこるべし但擧動違ふ所あらば七代を過べからず吾云ところ不審あらば國々に納し所の靈地を見よと云捨て歸り給ふ其姿を見ればさしも嚴しかりし女房忽長二丈許の大龍と成て海中に入にけり其跡を見るに大成鱗三枚殘せり時政所願成就しぬと喜て則かの鱗を取て旗の紋にぞ押たりける北條三鱗形の紋是也其後辨天の御示現に任て國々の靈地へ人を遣して奉納の法華經を見さしめけるに俗稱の時政を法師の名に換て奉納の筒の上に大法師時政と書たるこそ不思議なれと太平記にも見えたり其より星移りて天文十八年關八州の大守北條氏康江島の神殿諸社諸堂の荒蕪を歎き黄金。神劒。神馬を納らる其後代代將軍家の御寄附數々あり神威はます〳〵新にして利生の光輝日々に熾也抑當社二度の例祭嚴重たり其中に卯月初巳日殊に賑しく本宮御旅所には四神の旗左右に連り神幸は其日の巳の刻龍窟より音樂にて渡御初の方には警蹕の侍士。榊の仕丁。白幣。獅子頭。唐櫃の荷ひ人。神鏡の神寶を捧ぐ太刀。弓。玉鍵の神具

龍口寺



日蓮上人舊跡

樂人は左右に列して音樂を奏し荷太鼓は雙調を拍て磬は亂聲に調社僧七人別當職三人前に翳をかざして神輿を渡す怨輿丁後より錦蓋を指かくる海岸峨々たる巖上を桓々として神幸尊くして又めづらか也磯の波は青海波を奏し松の風は萬歳樂を調ぶ此日江戸よりは行路僅に十三里なれば男女童のわいためもなくこゝに詣し近國近郷の浦々は船を漕つれみな此祭式を拜まんとて群集する事海陸の賑ひ大方ならず山下の旅舍には遠近の詣人を止て饗應す都て此島は漁家多く朝綱夕網とて荷ひ込魚を料理て出すこゝの名物とて鮮魚の美味なるを第一とす旅舍の店に腰打掛て草鞋履ながら二之膳三之膳に居るもありあるは二階に宴じて歸路を忘るもあり此島山の形龜に似たるとて金龜山と號し法印堯恵の紀行に爰を蓬萊洞といへるは深秘也と書れたり實に嚴島。竹生島。江島の三辨天俱に山水の勝地を撰んで鎮座ます事は八百萬の中にも風色の名所を祝給ひて吾黨に與し給ふ此御神の御こゝろこそありがたくていよ〳〵尊信いやましける

陶淵和尚同遊江島詩賦以呈　宋大休（佛源禪師）

江島追遊列後髦　馬蹄隱々擁春袍
穿雲分座烹香茗　策杖徐行踏巨鼇
洞口千尋石壁幾　龍門三級浪花高
須知海角天涯外　滄水迎愁能幾遭

別當岩本院寶物

刀八毘沙門の金像（弘法大師作）。阿彌陀畫像（同筆）。江島緣起五卷（詞書作者不知嵯土佐筆）。北條氏康古證文。太田道灌軍配團。馬玉（壹顆）九穴の貝（壹箇）二岐竹（壹本）蛇の角（貳本長一寸）

龍口神祠　津村にあり祭神江の島大草紙に見えたり例祭九月九日社僧を寶善院といふ山の半腹に岩石あり其形龍の口に似て江の島の方に向ふ故にこゝを龍口山といふ鳥居は江の島へ行砂邊に立り

龍口寺　腰越村の内にあり日蓮宗寂光山と號す片瀬八箇寺の輪番所なり

『日蓮上人像』日法上人の作祖師遷化の後弟子六僧力を合せて當寺建立す

『敗革石』本堂の内陣厨子にあり齋藏に云文永八年九月（一說八月）十二日日蓮上人難に遇給ふとあり又一名首座石といふこれを龍口の御難とて毎歳此日宗徒法會し法華經題目を誦す

『七面祠』本堂の東にあり『番神堂』七面の南にあり松平飛彈守利次の室本願して再興に及ぶ『經鉢稻荷』本堂の西にあり

『日蓮上人土牢』本堂の西山麓の窟をいふ『敗革堂』本堂の前東向にあり祖師の像六老僧の像を安ず

『光の松』門内の左にあり日蓮上人難に遇給ふ時此松枝に光明かゞやきて上人を照らしけるとぞ近年江戸菊明此由緣を記し誹諧の句碑を建るなり

長者塚　龍口山の東北山中にあり江島記に見えたる長者十六人の子を龍にとられ其菩提の爲こゝに塚を築しといふ今に塚の形あり

『長者窪』長者塚の東南にありむかし長者が住し趾といふ今は草茂りてさだかならず

『敗革石』本堂の内陣厨子にあり齋藏に云文永八年九月（一說八月）十二日日蓮上人難に遇給ふとあり又一名首座石といふこれを龍口の御難とて毎歳此日宗徒法會し法華經題目を誦す

『七面祠』本堂の東にあり『番神堂』七面の南にあり松平飛彈守利次の室本願して再興に及ぶ『經鉢稻荷』本堂の西にあり

『日蓮上人土牢』本堂の西山麓の窟をいふ『敗革堂』本堂の前東向にあり祖師の像六老僧の像を安ず

『光の松』門内の左にあり日蓮上人難に遇給ふ時此松枝に光明かゞやきて上人を照らしけるとぞ近年江戸菊明此由緣を記し誹諧の句碑を建るなり

長者塚　龍口山の東北山中にあり江島記に見えたる長者十六人の子を龍にとられ其菩提の爲こゝに塚を築しといふ今に塚の形あり

『長者窪』長者塚の東南にありむかし長者が住し趾といふ今は草茂りてさだかならず

『敗革石』長者窪より北の方十五六町許山路を越て谷中にあり今に人跡稀にして幽寂の地也

固瀨川　腰越より西にあり固瀨村といふ民家ありむかし此川端にて大庭三郎景親を梟首せし所といふ又新田義貞鎌倉攻のとき片瀨腰越十間坂五十餘ケ所に火をかくるよし太平記に見えたり又青砥左衞門此河を通りける時旱天に牛の尿せしを見て北條時頼殿の佛事をなしけるよしに譬て誹りけるを傍人これはいかにと問へば北條殿の佛事は親族の高僧を請じて多くの布施物贈り貧僧には少しも惠み給はず此旱天に牛の尿を河へ流せしと同じ事也田畑のほとりへ尿をすれば少しにても潤ひになるべきと答へせしを北條時頼これを傳へ聞て青砥を取上げ重き政道の役に任じ給ふ事鎌倉九代記に書たり

鎌倉日記　かへり來て又見ん事も片瀨川　にこれる水のすまぬ世なれは　宗祇王

詠るとなん

家集　打わたす今やしほひのかたせ川　思ひしよりは淺き水かな　藤原爲相

西行願松　片瀨村へ行路傍にあり西行上人こゝに來

り都の方を顧り松枝を西の方へ捩給ひしとて捩松と
もいふ

唐原　又諸越原とも書す片瀬川の東をいふ東海道
筋大磯と平塚のあひだを唐原といふは謬也

夫木　名にしおはゞとらやふすらん東路に　藤原忠房
たつといふなるもろこしか原

家集　あつま路の唐かはらにおりたちて　人丸
きぬをやからの衣さいふらん

名寄　まさろまんよなかにしばし烏羽玉の　長明
夢路そ近き唐ヶ原

懐中抄　はるかなる中こそうけれ夢ならて　讀人しらず
遠く見えけり唐ヶ原

〔更級日記〕もろこしがはらすなごいみじう白くやま
となでしここくうすく錦をひけるやうになんさきけ
り

砥上原　片瀬川の西にあり此北に八ッ松原といふ所
もあり源平盛衰記に見えたり

〔西行物語〕とかみが原を過るに野原の露のひまより
風にさそはれ鹿の啼聞えければ
柴松のくすのしけみに要こめて　四行
とかみか原に小鹿鳴なり

名寄　浦ちかきとかみか原に駒とめて　長明
行瀬の川のしほひをそまつ

同　立歸る名殘は巻に結ひけん　同
とかみか原の葛の冬枯

同　八ッ松の八千代のかけにおもなれて　同
とかみか原に色もかはらし

袂浦　腰越より江島へ行路の濱邊をいふ左右袂に似
たり

夫木　なひきこし袂の浦のかひしあらば　讀人しらず
千島のあさをたへすさはなん

七里濱　腰越より稲村が崎まで渚道四十二町あり東
關の六町一里をもつて七里が濱と呼ぶ此所古戦場に
して今においても刀劍の折たる又は武具の鍔或は骸
骨など眞砂の中より出る事あり南方は大洋にして風
あらき時は浪打上げて裾を潮に浸す此濱に黑き砂あ
り日に映ずれば光あり黑漆の如し土人鐵の砂といふ
又花貝とて彩色したるごとき貝あり又櫻貝ともいふ
此濱砂道にして歩する事煩し農家の牛に乘りて往來
する旅人もあり

小動　七里濱の西にある殿山也山上に八王子祠あり
『小動松』こゆるぎ山の端に海邊へさし出たる松をい

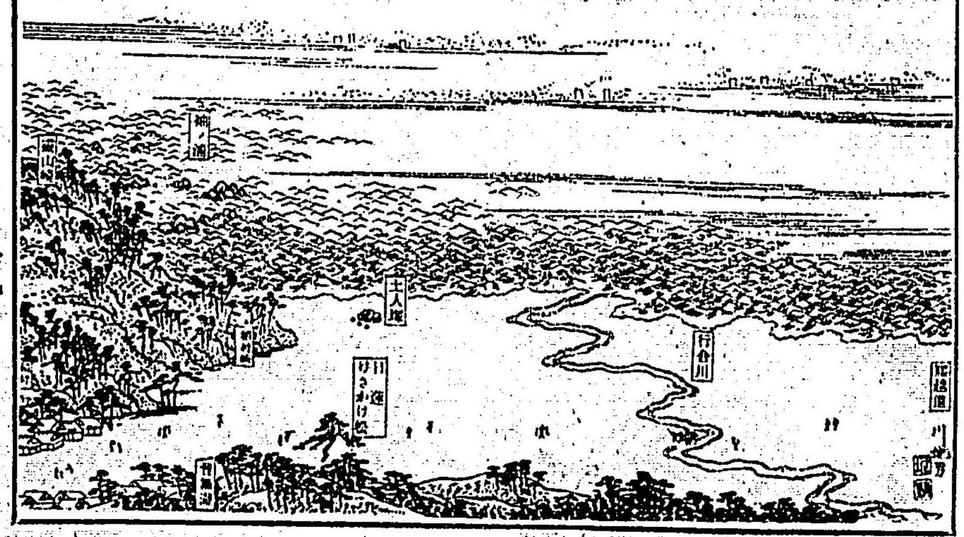
ふ　小ゆるぎの松も疲ぬ夜や磯ちどり　巻湖

行合川　北の方山谷より流出て七里濱より海に入日
蓮上人龍口の難に遇給ひし時奇瑞多ければ鎌倉へ註
進の使と又北條時頼殿の赦免の使と此川にて行合し
より名とす此川より鶴岡まで四十町あり又此ほとり
に日蓮袈裟掛松といふあり

稲村崎　七里ヶ濱の東にあり〔東鑑〕に云ふ建久二年
九月廿一日頼朝卿海濱を遊覽し此所にて小笠掛の勝
負ありしとぞ此渚を横手原といふ
〔太平記〕南は稲村崎にて沙頭路狹きに浪打際まで逆
茂木を繁く引懸て澳四五町が程に大船どもを双べて
櫓をかけて横矢を射させんと擬たり實も此陣の寄手
叶はで引ぬらんも理也と見えければ義貞馬より下給
て甲を脱て海上を遙々と伏拜み龍神に向て祈誓し給
ひけるは傳承る日本開闢の御主伊勢天照太神は本
地を大日の尊像に隱し垂跡を滄海の龍神に顯し給へ
り吾君其苗裔として逆臣の爲に四海の浪に漂ひ給ふ

七里濱
腰越より稲村崎まで四十二町あり東風六町一里をもつて七里濱とよぶならし此地古戦場にして今も刀劍のたぐひ古骨など砂中より出る事あり

古戦場
百戦人安在
蕭條逐鹿原
陣圖空臥石
運數盡枯根
鬼哭陰雲夜
燐生春雨痕
因悲千古地
來者亦難存
菊川孤園



義貞今臣たる道を盡さん爲に斧鉞を把て敵陣に臨む其志偏に王化を資け奉て蒼生を安んじしめんと也仰願は内海外海の龍神八部臣が忠義を鑑て潮水を萬里の外に退け道を三軍の陣に開かしめ給へと至信に祈念し自佩給へる金作の太刀を拔て海中へ投入給ひけり眞に龍神納受やし給ひけん其夜の月の入方に前々より更に干る事もなかりける稻村崎俄に二十餘町干上て平沙渺々たり横矢射んとて攝ぬる數千の兵船も落行沙に誘れて遙の澳に漂へり

袖の浦　稻村崎の海濱袖の如し故に名とす又出羽にもあり歌によりてこれを分つ

御集　袖の浦の花の涙にも知さりき　いかなる秋の色に戀つゝ　順德院

家集　袖の浦にたまらす玉のくたけつゝ　よりても遠くかへる波哉　定家

山家　しきなみにひとりやねなん袖の浦　さほく浪による船もなし　四行

『針磨橋』稻村の東にあり鎌倉十橋の其一橋なり

『月陰谷』極樂寺切通しの西の方にあり昔こゝに曆を作る者住しとぞ

阿佛尼第蹟　月影谷にあり又墳墓は扇谷英勝寺境内にあり阿佛尼は藤原爲相卿の母公なり

〔十六夜日記〕東にて住ところは月影谷とぞいふなる浦近き山もとにて風いとあらし山寺の傍なればのどかにすごくて浪の音松風たへす

靈山極樂寺　極樂寺切通にあり眞言律宗南都西大寺の末派なり

『本尊釋迦佛』興聖菩薩の作京師嵯峨釋迦を摸す左右に十大弟子左に興聖菩薩右に忍性菩薩の像又文殊菩薩を安す當山開基は忍性菩薩又良觀上人と號す父は伴貞行母は榎木氏也和州城下郡屏風村にて建保五年七月十六日誕す十六才の時母公逝しければ菩提を訪んが爲に和州額安寺に於て剃髮し東大寺にて登壇受戒しそれより諸山をめぐり苦修練行する事都て五十餘年七十二歲に及んで洛に登り詔を奉て忍性菩薩と號し七十八歲の時永仁二年攝州四天王寺石花表を建つ高サ二丈五尺嘉元元年七月十二日洛より下てこゝにて入寂す壽算八十七歲生涯二百五十戒を擬す當寺本願は陸奥守平重時也此極樂寺を營て發病より萬事を拋て一心に稱名念佛し終をとる弘長元年十一月三日卒す年六十四

辨慶腰掛松　極樂寺境内にあり俗傳に云ふ源の義經兄賴朝卿へ數通の起請文を書給ひさま〳〵詫申されけれども讒者の爲に腰越より追返されし時辨慶此松に腰をかけて鎌倉の方を白眼しといふ

極樂寺切通　極樂寺門前にあり山井の濱へ出る切通し也むかし忍性初て切開きしといふ

鎌倉　相州鎌倉郡にあり順和名抄に鎌倉郡内鎌倉里とあり和歌には鎌倉山とも詠す〔東鑑〕に鎌倉の四境は東は六浦西は稻村南は小坪北は山の内と書す其中に谷七郷。十井。十橋。七の切通。五水の名泉あり其外名所舊跡。神社佛刹多し委は鎌倉志に見えたりこゝには大略を畧す

萬葉　新こる鎌倉山のこたる木を　松とながいはゝ戀つゝやあらん　大納言公任

歌枕　忘れ草かりつむはかり成にけり　跡もとゝめぬかまくらの山

同　かき盛りなとか音せぬ郭公　實方
かまくら山に道やまとへろ

拾玉　なかめ行こゝろの色そ深からん　慈鎧和尚
鎌倉山の巻の花園

夫木　むかしにも立こそまされ民の戸の　基綱
けふりにきほふ鎌倉の里

同　あつま路やあまた郷の其中に　同
いかてかまくらさかへ初けん

鎌倉記　十とせあまり立とせまても住なれて　宗尊親王
なを忘られぬ鎌倉の里

抑鎌倉といふ名はむかし大織冠鎌足公いまだ鎌子丸と申せし時　詔を蒙りて鹿島神社へ詣し給ふ折から此國山比里に泊らせ給ふ其夜夢の御告あつて寶器とし給ふ鎌を大藏山松が岡に埋給ひける〔鎌倉志〕鎌の字は金を兼る也倉の字は人一君と書り金は則西の方を司る西は皇城なり君子の政を兼る人君一人こゝに在して平天下の政を兼て行ひ給ふ事理の明白なりと云々』天智帝の御宇には鎌足公鞍作入鹿を戮し中臣の姓を改て藤原と賜り内大臣に任ず諡を和州多武峰にて談山權現と稱す代々執柄家として天津兒屋根命の裔孫今に連綿たり鎌足公の玄孫染屋太郎大夫時忠（南都東大寺良辨僧正の父也當國大山寺の下に見えたり）文武帝より聖武帝神龜年中まで關八州總追捕使として東夷を平治す厥后平將軍貞盛の嫡孫上總助直方守護として鎌倉に在城す鎮守府將軍兼伊豫守源頼義いまだ相模守にて下向し直方が婿と成給ひて八幡太郎義家こゝにて出誕し給ふそれより源家相傳の地と成て遂に治承五年源頼朝公右大將征夷大將軍の宣旨を賜り鴻業を闢き四海を掌に握り四夷八蠻を鎮め三代の將軍九代の執權穆々として光輝を赫し萬民を撫育し給ふ事夏。殷。周の三代の隆なりし法則こゝに典りむかしの繁花は京。鎌倉と双べりされど東南に海近く西北に山連り封境狹して平地少く既に谷谷の號あり譬ば今の萬代不易の江戸に競べば十が一にだにも逮ず

鶴岡八幡宮　鎌倉中央にあり舊名小林郷松ヶ岡といふ當宮はじめは由比の濱に在て其地を鶴岡といふ建久二年四月頼朝公の命によりてこゝに遷座あるよし東鑑に見えたり舊地の號を稱して鶴岡と呼ぶ例祭は八月十五日放生會あり同十六日流鏑馬。相撲などあり又二月十一月初卯日陪從あり社領は永樂錢八百四十貫文といふ都て鎌倉一郷は古代の風俗にして錢をもつて寺社領を極む

撥古　宮はしらふとしき立て萬代に　鎌倉右大臣
今そさかへん鎌倉の里

新拾遺　鶴か岡こたかき松を吹風の　左兵衛督基氏
雲井にひゝく萬代の聲

家集　山路より出てや來つる里近き　爲相
鶴か岡部になく郭公

『本宮』上之宮といふ『祭神』中央　應神天皇。左大仲媛右　神功皇后（已上社説）

『武内社』本社の左にあり高良明神又は玉垂神とも稱す

『樓門』本社の前にあり額に八幡宮寺竹内良恕法親王の筆左右に豊磐間戸櫛磐間戸の神を鎮す

『回廊』樓門の左右にあり東の方將軍家御祈禱所常に天下泰平の讀經ありこれを座不冷といふ　龜山帝御夢想によつて綸旨を給り弘安八年三月十七日初て行はれてより今に怠慢なし廊のめぐりには辨財天。愛染。不動を安じ又七社の神輿を出して詣人に拜さしむ西の方に御供所あり神前には鈴の音玲瓏として殊勝の神殿なり

『若宮』下之宮といふ『祭神仁德天皇』額に若宮大權現青蓮院尊純法親王の筆むかし文治の頃白拍子靜御前此神前にて法樂の舞を奏せし所なり

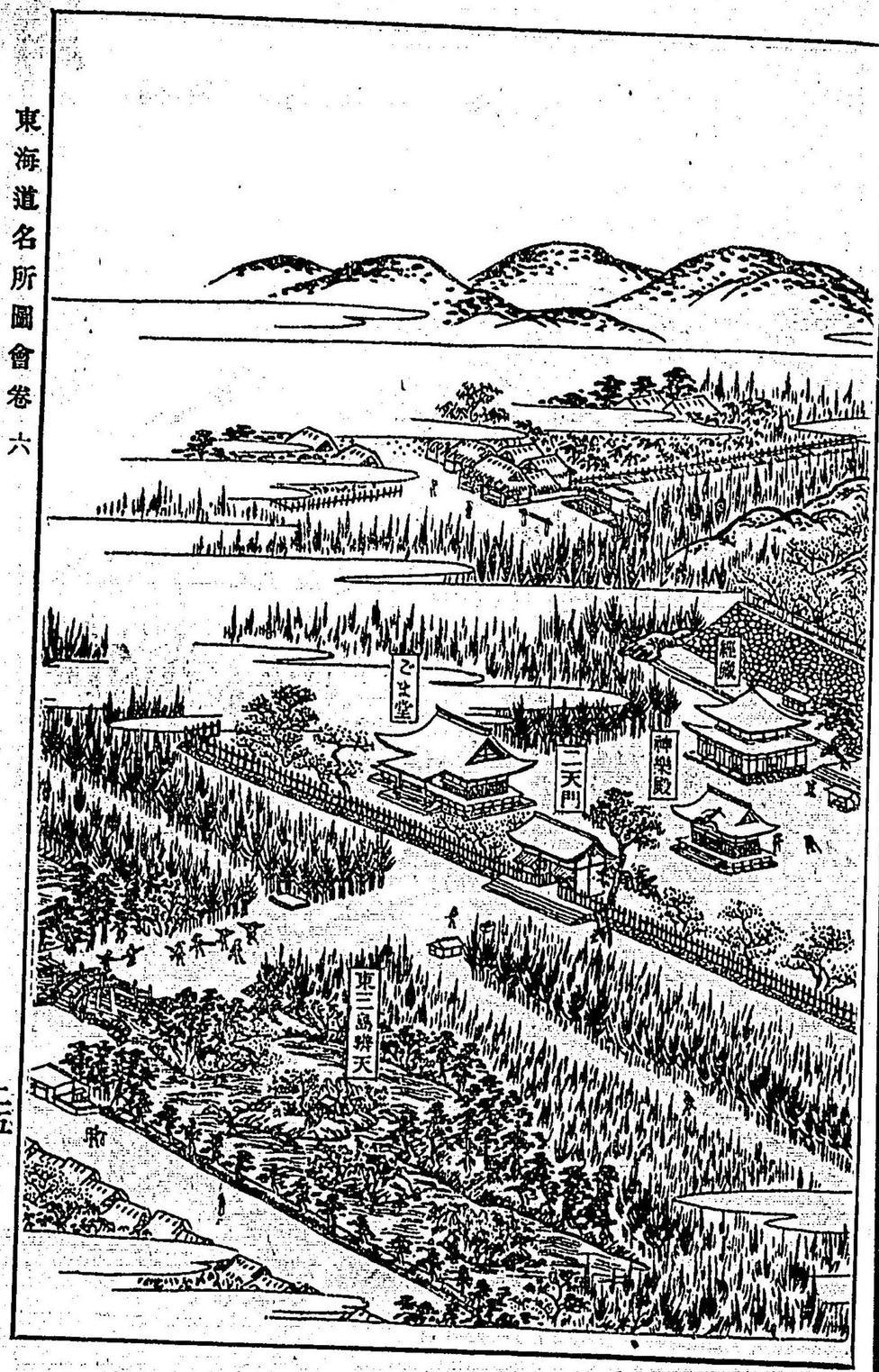
『松ヶ岡稻荷社』本社の西の方丸山といふ所にあり初は今の本社の地にありしが由井濱より八幡宮遷座の時此地に移す故に地主の神といふ

『末社』三島。熱田。三輪。住吉の四前は若宮の東に祀る又松童。源太夫。蛭子神の三前は西の方に祀る

『神明宮』上の宮右石階の下西の方に祭る

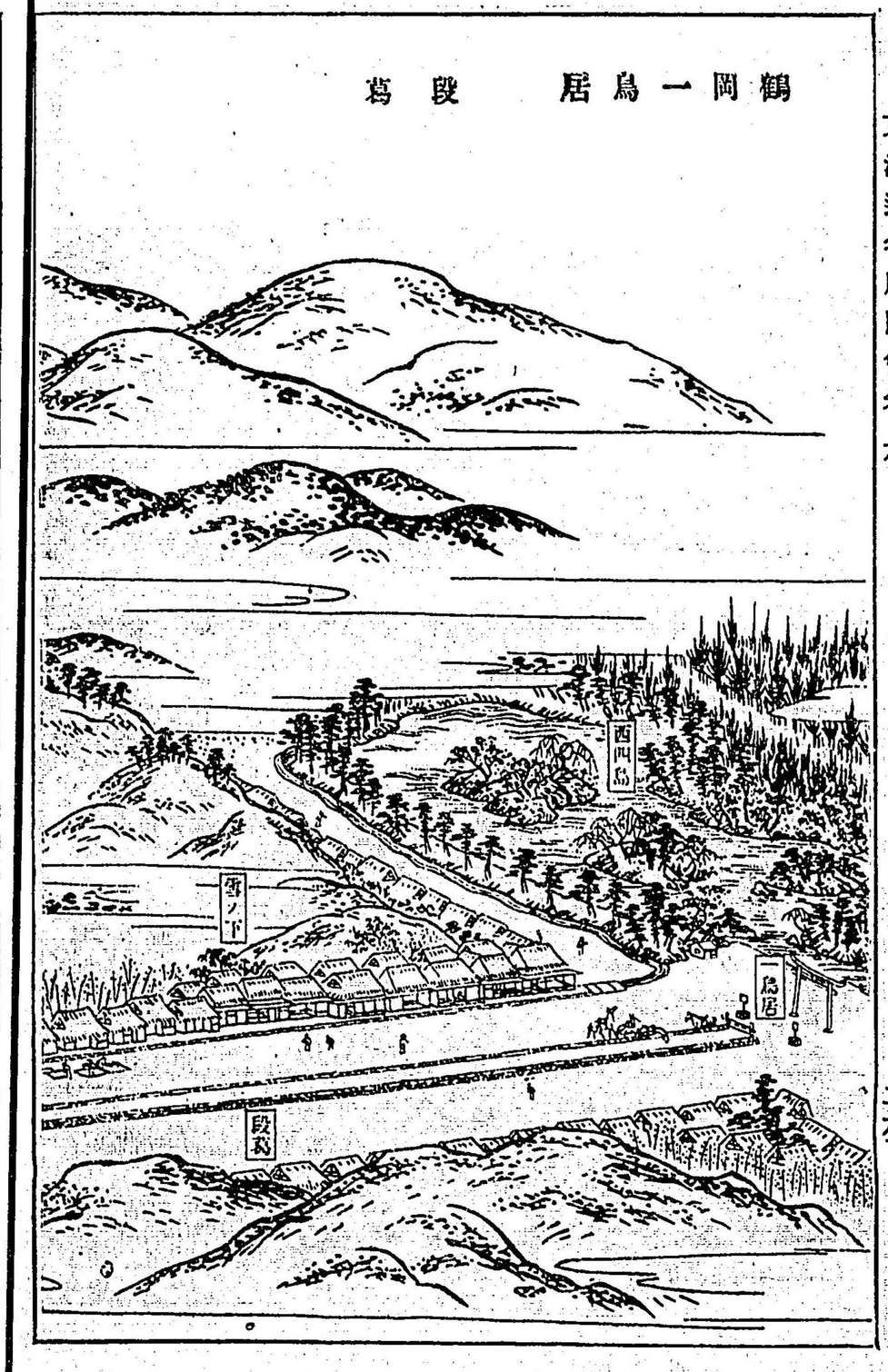
『頼朝祠』本社の西の方回廊の外にあり白旗明神と號す社内に頼朝卿の木像を安じ左に住吉右に聖天を安ず傳に源頼家卿の建立といふ毎歳正月十三日音樂を奏して神事を行ふ

『愛染堂』頼朝祠の向ふにあり愛染尊は運慶の作又堂内に地藏尊を安ず

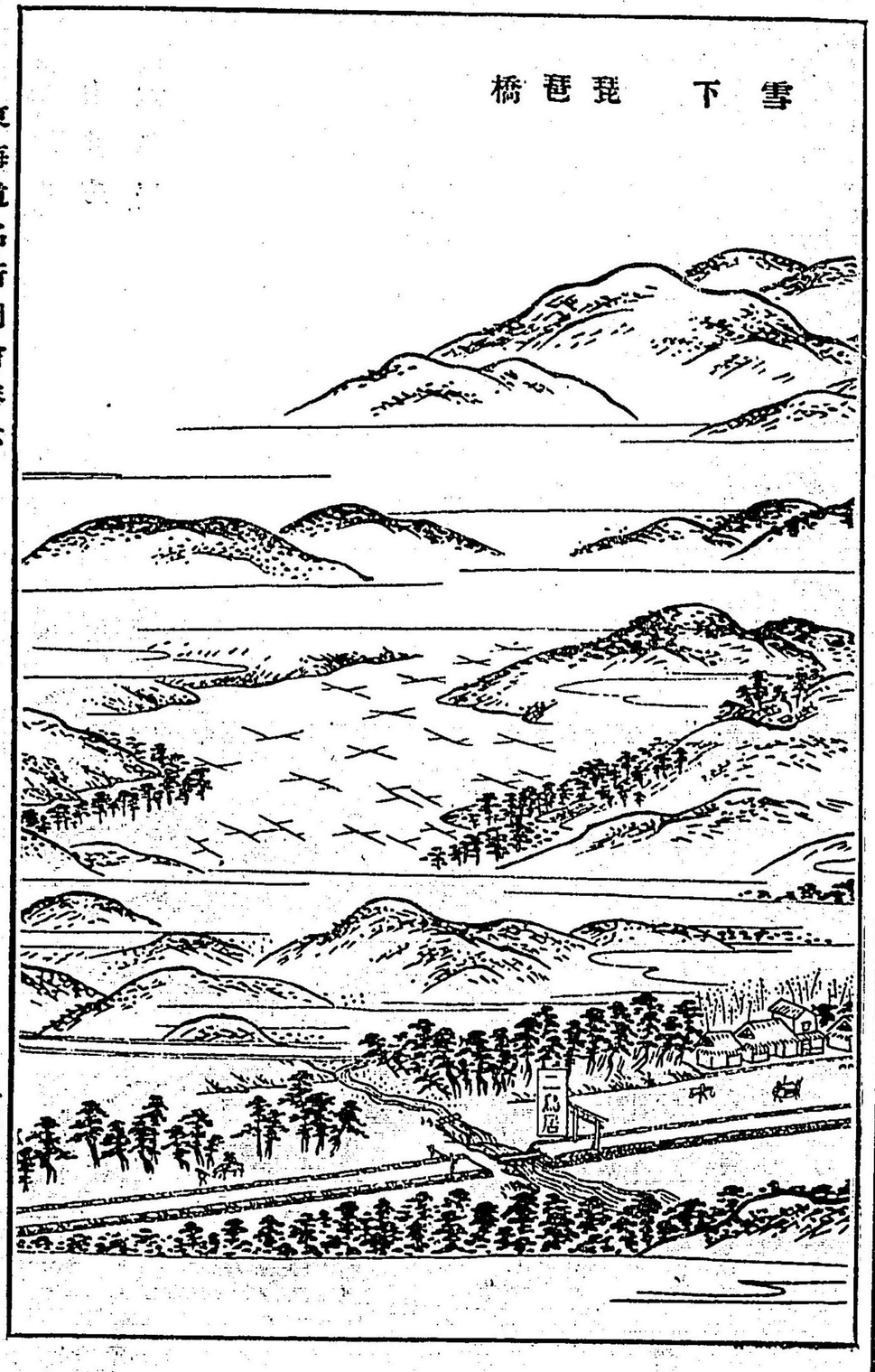


鶴岡八幡宮

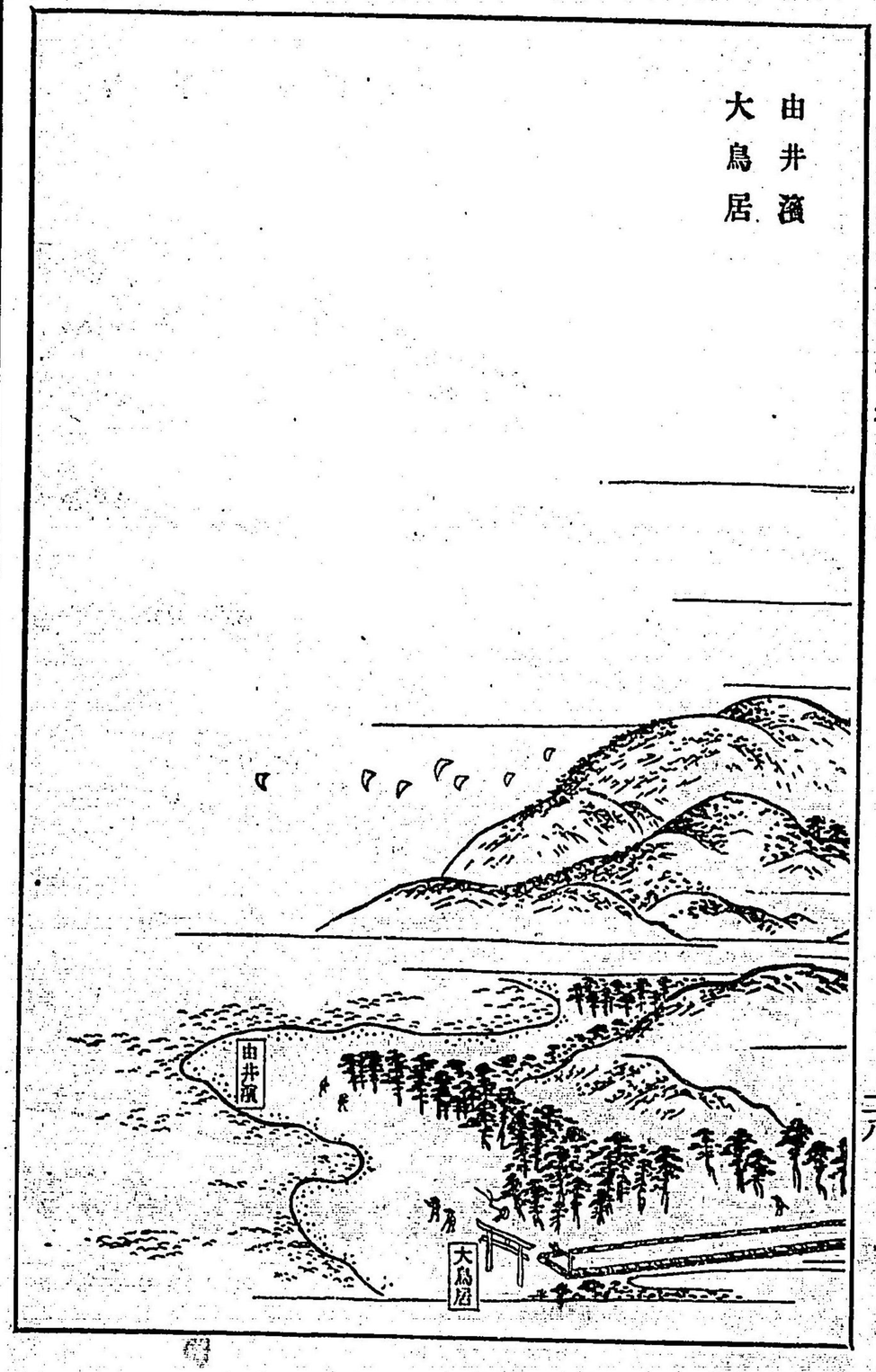
鶴岡一鳥居　段葛



雪下　琵琶橋



由井濱
大鳥居



『寵殿』賴朝祠の西にあり神供贄所也寶滿菩薩を安ず

『影向石』本社の前の左にあり相傳正應二年二月四日駿風雨してこゝに出現す供僧圓頓坊の夢に座不冷の誦經を聽聞の爲に龍神こゝに來る座石なりといふ

『鶴龜石』影向石に隣る石面を洗ふ時は光出て鶴龜の形見ゆるとぞ

『六角井』回廊の外東の方にあり六角堂の内に清泉あり故に名とす

『銀杏樹』石段の下西の方にあり〔東鑑〕云承久元年正月廿七日將軍實朝卿右大臣拜賀の爲に八幡宮社參の時夜陰に逃んで漸退出し給ふ其時當社の別當阿闍梨公曉石階の際に窺ひ待て劒を拔實朝卿を弑すとあり相傳ふ公曉此銀杏樹の下に女服を着て隱れ忍んで右大臣を弑すとなり又東の方に椰樹あり

『轉輪藏』下段西の方にあり相傳ふ實朝卿宋本の一切經を求て建曆元年十月十九日永福寺に於て供養せられこゝに藏めらる内に四天王を安ず毘沙門天は渡海守護の爲朝鮮より載來るとなり此輪藏は壯嚴美麗にして他境に比類なし廣さ方五間也中央に輪藏ありて詣人これを轉傳事自在なればみな奇として尊信多し

『護摩堂』輪藏の前にあり五大尊を安ず運慶の作大威德明王の乘給ふ牛の足膝をかゞめたり傳に義經を調伏のとき膝を折しといふ『藥師堂』下の宮の東にあり藥師如來十二神將を安ず東鑑にこれを神宮寺と稱す

『柳原』藥師堂の傍にあり古柳也むかしは柳原とて多くあり土人傳て古歌をいふ

年へたる鶴か岡べの柳原
青みにけりな春のしるしに

此歌を鎌倉右大臣實朝公といふ又一說には北條泰時といふ俱に非也讃人しれず『多寶塔』若宮の前にあり二層塔也五智如來を安ず〔東鑑〕文治五年三月十三日御塔供養あり導師は法橋觀性願文は新中納言兼光卿清書は堀川大納言忠親卿也

『鐘樓』塔の東にあり鐘大さ亘三尺五寸厚さ三寸五分鐘の銘左の如し

夫當宮者馬盞東戍之州鶴岡甲區之

地。模二男山之宗祧一。弘二尊廟之權扉一。以降。禮神之囿。頌祇之堂焉。禮頌丕儼。春禴之奠。秋嘗之儀矣。春秋幾回。鎮護年尚。答貺日新。然間。去茲迎二姑洗一。不レ圖欠二靈祠一。肆深仰二玄鑒一。忽跂二經始一。課二般倕一。兮。是尋是尺。用二規矩一。兮。不レ愆不レ忘。土本之勤。既雖レ及二兩祀一。斧斤之功。殆可レ謂不レ日。傍斯苦墉一。而復二鴻基一。先擊二蒲牢一。而發二鯨音一。乃作レ銘曰

治鑪甫就　寶器鑄陶　龍文製妙
鬼巧奇標　形非吵哢　鑒不二極窕一
塵除陽律　入二宮商調一　小大共振
清渾孔昭　帶霜早和　隨レ風自搖
式鑿二千界一　高徹二九霄一　梵響無斷
聖二三會朝一

正和五年二月日

『實朝祠』本社の坂の下にあり柳營明神と號す賴經卿の搬建なり

『二王門』本社の正面にあり左右金剛力士を安ず額に鶴岡山と書す曼珠院良恕法親王の筆

『赤橋』本社へ行石の反橋をいふ長さ五間に巾三間也東鑑にも見えたり

『神池』赤橋の左右にあり東の方の池中に三つの島あり西の方の池中に四つの島あり初は東西に四島づゝあり合て八島也平家の八島に准じて東方より亡す前表をもつて一島を欠今は東は三島を遺す三は天地人の三才也西の四島は四海の中を保つといふこゝろ也此邊老杉多し

『辨財天祠』東方の池中にあり辨天の像は運慶の作膝に琵琶を携ふ相傳ひて小松内大臣重盛の持尊といふ

『一の鳥居』石柱也反橋の南にあり此鳥居前を若宮小路といふ旅舍茶店多し惣號を雪下といふ

鎌倉紀行　春深き跡あはれなり苔のうへの花にのこれる雪の下道　法師　幾惠

『段葛』社前より由井濱まで道の眞中に一段高く幅六間許高貳尺の道ありこれを段葛といふ〔東鑑〕に嘗永元年三月十五日鶴岡の社頭より由比の濱まで曲横を直にして道を作らる是は御盛政子御懐姙の御祈の爲

賴朝卿手自沙汰し給ふこれによつて北條殿已下の諸侯各土石を運ばしむるとなり

『二の鳥居』一鳥居よりこれまで四町十五間半なり

『三の鳥居』これを大鳥居といふ俱に石柱也二鳥居よりこれまで六町四十五間南也此間を琵琶小路といふいにしへは道の形琵琶の如し故に名とす又此中に琵琶橋といふあり此三の鳥居より波打際まで五町あり此濱を都て由比濱といふ東は飯島西は靈山崎也其間廿五町許あり

『新宮大權現』坊中我覺院の門前より左の方へ入る事壹町許なり祭神後鳥羽院〔東鑑〕に寛治元年四月二十五日　後鳥羽帝の尊靈を鶴岡の乾の山の麓に祭るこれぞかの怨靈を宥奉らん爲也といふ社の後は深谷にして一株の古杉あり大樹にして一根六株に分れて其高さ十餘丈亘三尺許の老杉也土人此地に天狗來り栖といふ

『神主館』馬場小路に居す大伴氏といふ賴朝の書翰代代將軍家の文書を家藏とす又少別當といふあり大庭氏と號す同所に居す

『十二院』鶴岡西の方に居す當社の供僧なりいにしへは廿五坊あり院宣を奉す

惠光院。增福院。海光院。正覺院。我覺院。淨國院。香象院。莊嚴院。相承院。安樂院。等覺院。最勝院。

右の十二箇院の中莊嚴院の後山を狻猊峯といふ上に山亭あり見わたせば西北に富士峯東南は滄海洋々として雲に連り山亭のほとりには連山峨々として右は六浦。金澤に續き左には建長寺山近く聳ゆ亭中には狻猊峰の銘を掲る序はこゝに畧す

銘　曰

維此天府　雄據有時　盤亘疊巒　狻猊維奇
磴々斷崖　闢之有雖　維清維淨　金僊爲師
巖樓淵飲　泉耳藻飢　富貴脫蹤　寵辱兩遺
意與體寧　樂與道明　維微期人　此焉有斯

昇仙峯記（序畧）　東都　西山乘

頌　曰

殷々鶴岡　鬱圍故址　神靈遺感　山川鐘美
節彼一峯　狻猊之似　昇仙佛堂　方丈知止
若海雲山　一望一里　逍遙其中　安詳禪意
可以和身　可以養氣　於戲哲人　乃有此祉

伊紗州　大資院靈長記

夫當社鶴岡八幡宮は伊豫守源頼義詔を奉て陸奥安倍貞任宗任を征伐あらんとて御禱の爲に康平六年八月山州石清水を鎌倉由比里に勸請ありて鶴岡と稱ず今下宮舊蹟といふはこれ也永保元年二月陸奥守義家朝臣修補す厥后治承四年十月十二日頼朝卿祖宗を崇んが爲に小林郷の北の山を開て由比里の鶴岡の神殿をこゝに移し給ふ然れども鶴岡は由比の舊號なれば小林郷松ヶ岡に遷しても鶴岡と稱ずそれより壯麗たる宮殿巍々として將軍家時々詣し給ふ事東鑑に見えたり治承の頃には頼朝義經御中不和に成らせ給ひ靜の前を鎌倉に召て義經の行衛を尋んが爲め此鶴岡若宮の神前にて歌舞あり皷は工藤祐經銅拍子は畠山重忠これを仕る廻雪の袖を飄し黄竹の歌を諷ふて靜が窈窕たる舞の風俗頼朝卿政子前も興に乘じ列座の諸侯も目を驚すばかりなり

しつやしつ賤かをたまきくりかへし
むかしを今になすよしもかな

靜は其頃の國色なれば雲鬢花顔春風に芳しく檻を拂ふて露華濃也月を鏤て歌扇とし雪を束て舞衣とし聲は玉を鳴すが如く麗しく梁塵さながら翔かとぞ思はれ上下の感賞大方ならず靜は夫を慕ふの音韻顯はれ恩愛の淺からざるしるしにや頼朝卿の御胸にせまり思はずもはら〳〵と落涙まし〳〵舞も半過ざるに座を立て歸館し給ふこれぞ義經を惡ませ給はざるしるし也此時いまだ四海穩ならず平家の殘黨こゝかしこに忍んで怨を報せんとす又北條梶原如きの讒者高く張て嘿々たる佞臣連なる頼朝卿治國の計をめぐらして平氏の怨を義經一人に蒙らしめ鎌倉へ入られず腰越より追返されしは深き思慮ある計略とぞしられける當宮社參の時途中より西行上人を召て三度に軍法を解せ銀の猫の香爐を贈らるなを當社の御事は東鑑に見えたればくはしく記するにもあらず本社の後を大臣山とも或は大藏山ともいふ例祭は四月三日八月十五日何れも神輿渡御音樂ありて石清水に似たり同く十六日には流鏑馬ありて毎歳大磯の大野木氏往古より東西鳥居の馬場にしてこれを勤むむかし頼朝卿上覽の舊跡を今に遺す社頭の美麗微妙にして時々將家の御修補絶ず詣人は陰晴を嫌ず間斷なし實に圓

八州第一の宮殿巍然たる事又類なし

右大將頼朝館趾 鶴岡の東筋逆橋の北にあり今は田圃となる其境地方六町許鎌倉三代將軍年歴都て四十箇年の間此地に館舍ありし所也字に東御門西御門の所ありこれは東西の門のありし跡也

法華堂 頼朝館の北山際にあり今は幾の草堂となる相傳て頼朝卿持佛堂といふ雪下相承院こゝを領す『本尊如意輪觀音』由比里の長者染屋太郎大夫時忠の持佛尊なり又彌陀地藏を安ず『自休藏主像』これは江之島兒が淵へ身を沈し自休の像也事は江之島の下に見えたり

【東鑑】建暦元年十月十三日鴨社氏人菊太夫長明入道法名蓮胤依二雅經朝臣之舉一此間下向奉レ謁二將軍家一實朝一及二度々一云々而今日當幕下將軍御忌日一參彼法花堂念誦讀經之間懷舊之涙相催註一首歌於堂柱一

草も木もなびきし秋の霜消て　長明
むなしき苔をはらふ山風

頼朝卿墓 法華堂の上の山にあり

島津忠久墓 右同所にあり墓前に石の玉垣石燈爐石花瓶石窟の中に石塔婆あり表曰元祖島津豊後守忠久石塔安永八年己亥二月薩摩中將重豪建レ之承二薩州侯之命一東都龍湖親和八十歳謹書

鳥合原 鶴岡東の鳥居の外の畠をいふ相傳ふ相模入道高時こゝにて鬪鷄又鬪犬ありし所と也一説には八幡宮東西の鳥居相向ふゆゑ鳥居合の原の名を呼ぶ其に不詳

鎌倉十橋 琵琶橋。筋違橋。歌の橋。勝が橋。裁許橋。針磨橋。夫堂橋。逆川橋。亂橋。十王堂橋等なり。

畠山重忠第 雪の下より大藏村へ出る筋違橋の西北にあり

蛇谷 若宮の東北にあり【砂石集】むかしかまくらに住ける人の娘若宮の僧坊の兒を戀て人をしていひ入れどもこゝろざし淺かりけるにや疎く成行けりかの娘戀病して終に空しくなるそれより兒も病て物狂しければ一と間なる所に置けるに人もなきに物語の聲あり父母あやしみて物の隙よりみれば大なる蛇と向

於鶴岡若宮
靜女飄舞袖

原此楚囚
京洛人
紅粧舞態
媚於春
新聲擬得
想夫戀
能使霸君
感懷類

熊氏女
臭蘭
十四才

ひ居たり終に兒もうせにけり入棺して此山に葬りある時棺を開き見れば大蛇有て兒の骸をまとひけり此ゆゑに名とす

荏柄大神　大藏村の東金澤道の北側にあり『祭神天滿神尊像』にて御腹内に五臟六腑あり又頭中に十一面觀音を藏む〔社傳〕頼朝卿已前よりの勸請也社領十九貫二百文門前の字を關取場といふ北條氏直以後社前に關を居て關錢を取て社の修理の料とせられしと也其關札今に存じて什寶とす

覺園寺　二階堂村にあり鷲峰山と號す宗義四宗兼學京師泉涌寺の末寺也寺領七貫百文

『本尊藥師佛』日光月光十二神將共に運慶の作當寺開山は願行上人本願は北條義時再興は足利將軍尊氏なり

『黑地藏』地藏堂に安ず額は大地殿と書す〔寺說〕此地藏尊地獄をめぐり罪人のくるしみを見て自代り火に燒れ罪人の焰をとゝめ黑く燻給ふと也毎年七月十三日夜諸人詣して面像を彩色すといへども又一夜に本の如く黑くなるとぞ土人火燒地藏ともいふ

大樂寺　覺園寺の門内左にあり胡桃山と號す律宗開山公珍和尚いにしへは胡桃谷にあり故に山號とす

『本尊鐵不動』願行上人の作當國大山寺の不動尊を鑄し時試に鑄たるゆゑ世に試不動といふ傍に運慶の作の愛染明王願行の作の藥師佛を安ず

鎌倉十井　六角の井。棟立の井。瓶の井。甘露の井。鐵の井。泉の井。扇の井。底脫の井。星月夜の井。石の井等也在所次下に見えたり

『棟立井』藥師堂谷の山上にあり相傳ふ弘法大師此水を汲で閼伽水とし給ふ

大塔宮地窄　二階堂村の山際にあり窟中十疊敗許首塚は此邊理智光寺にあり冢上に石塔婆を建る

〔太平記大意〕建武元年五月三日大塔宮兵部卿護良親王を足利直義うけ取奉る鎌倉へ下し二階堂谷に土籠を造てぞ置まゐらせける足利天下を併呑せん下意なれば此親王こそ後の妨とて淵邊伊賀守義博に命じて急ぎ藥師堂谷へ馳行て宮を刺殺し進らせよと下知せられければ淵邊畏て承り候とて建武七年七月廿三日山の内より主從七騎引返し宮のまします籠の御所へ參りぬれば宮は闇夜の如くなる土籠に朝になりぬるをもしらず尙燈を挑げ御經遊ばして御座有けるが淵邊が御迎に來り候と御輿を庭に舁居けるを御覽じて汝は我を亡んとの使にてぞ有らん心得たりと仰られ淵邊が太刀を奪んと走りかゝらせ給ひけるを淵邊持たる太刀を取直し御膝のあたりをしたゝかに打奉る宮は半年許籠の中に居屈らせ給ひければ御足も快立ざりけるにや御心はやたけに思召れ共覆に打倒れ起揚らんとし給ひける所を淵邊御胸の上に乘懸り腰刀を拔て御頸を搔んとしければ宮御頸を縮て刀の切先をしかと呀させ給ふ淵邊したゝかなる者なれば刀を奪れまじと引合ける間鋒壹寸餘り折て失にけり淵邊其刀を投捨て脇指の刀を拔てまづ御心元の邊を二刀刺す刺れて宮少しも弱らせ給はず淵邊御髮を掴んで引上げ遂に御頸を搔落す籠の前に走り出て明き所にて御頸を見奉るに噬切らせ給ふ刀の鋒いまだ御

口の中に留て御眼なを生たる人の如し淵邊是を見てかやうの頸を主には見せぬぞとて側なる藪の中へ投捨てぞ歸りける其御頸の膚も冷ず御眼もいまだ塞せ給はず元の氣色に見えさせ給へば理智光院の長老御葬禮の取營をなし給ひけり（むかし大塔宮土籠の前に東光寺といふ禪刹あり後世廢して田園となる）

東光寺大塔兵部卿親王義堂

塔影稜々中入雲　王孫曾此西啼痕
獄中劍氣衝天起　門外兵塵蔽日昏
山鳥作驚龍鳳實　野童那識帝王尊
興亡不上禪僧眼　只見靈光歸獨存

總じて鎌倉は石和らかに土堅し窟を堀にいと安し農家には前栽に窟を堀て土藏とし俵物。農具を入るゝ他境の岩窟の類にあらず畿内河内國には千塚といふ所ありて大石を左右に立笠にも大岩をすへて其中十壘敷あるひは廿壘卅壘の物もありなを山中に多し故に千塚といふ地名也これは容易に毀こと能はず此鎌倉の窟は土堀穴の如し大塔宮の地牢といふも此たぐひの物なるべし

二階堂　土の籠の北にあり永福寺の廢跡也古礎ありて姥石四つ石の名あり又字を山堂光堂と呼ぶ

獅子巖　二階堂古跡の北の方山峰にあり岩の形獅子に似たり

瑞泉寺　土籠の東北にあり錦屏山と號す開東十刹の其一也源基氏の建立にて開山は夢窓國師寺領三十八貫文

『本尊釋尊』佛殿に安ず開山塔には夢窓國師の像本願基氏氏滿の像あり又此塔の後に夢窓の座禪窟あり

『一覽亭趾』座禪窟の上方にあり坂路十八曲編界一覽亭と號す開山の詩歌あり

前も又かさなる山のいほりにて　夢窓國師
槍につゝく庭のしら雪
天封三尺地許師休　致道釣深得自由
到此人々眼皮綻　阿沙風景我羞度

天台山　一覽亭の北の山をいふ鎌倉將軍館より鬼門に當るゆゑ京師比叡山艮嶽に比して名とす

『歌橋』荏柄天神の東にあり鎌倉十橋の其一也

文覺屋敷　頼朝館趾の南にあり頼朝卿に義兵を上るに院宣をわたせし事平家物語にしるせり

大御堂谷　文覺屋敷の東に隣る頼朝卿初て建立し給ふ勝長壽院の古跡也

釋迦堂谷　大御堂の東に隣る北條泰時亡父義時追福の爲に建立せられし釋迦堂の古跡也

唐糸姫土牢　釋迦堂谷の南に窟あり其内に石塔多くありて此窟は則土の牢といふ相傳ふ唐糸姫は手塚太郎光盛の娘なり頼朝卿に仕へけるが木曾義仲へ内通して頼朝卿を殺さんと劍を懷に隱す遂に隱謀露れ此土の籠に入られし也

杉本觀音　金澤道の北にあり天台宗大藏山杉本寺と號す坂東順禮所の第一番也開基は行基僧正

『本尊十一面觀音』慈覺大師の作左右前立共に十一面觀音左は惠心の作右は行基の作前立は運慶の作

滑川　河上は胡桃谷より流て胡桃川といふ都ては滑川と呼ぶ

〔太平記〕青砥左衛門藤綱といふ者夜に入て出仕しけるにいつも燧袋に入れて持たる錢を十文滑川へぞ落

したりけるを少事の物なれば行過べかりしを以外に周章て其邊の町屋へ人を走らし錢五十文をもつて續松を十把買てこれを燃し遂に十文の錢を搜し得たりける咸人云十文の錢を求めんとて五十にて續松を買て燃したるは小利大損哉と笑ければ靑砥左衞門眉を顰てさればこそ御邊達は愚にて世の費をもしらず民を惠む心なき人なれ錢十文は只今求ずば滑川の水底に沈で永く失ぬべし某が續松の五十文は商人に留て永く亡ぶべからず我損は商人の利也彼と我と何の差別かある彼此六十文の錢一をも亡ず豈天下の利に非ずやと爪彈をして申されければ難じて笑つる傍の人人は舌を震てぞ感じける此事北條時賴の上聞に達しければ靑砥を召て天下の政務の重き役を蒙らしめ給ふ

淨妙寺 杉本寺の東にあり禪宗鎌倉五山の其一也開山退耕和尙寺領四貫三百文鎭守稻荷祠あり故に稻荷山と號す

『佛殿阿彌陀佛』開山塔を光明院といふ開山の木像を安ず又源の直義の像あり

尊氏第蹟 淨妙寺の東の芝生の地也將軍尊氏の館にして公方屋敷の號あり後代々關東官領職の屋敷となる

五大堂 尊氏第の東にあり明王院といふ眞言宗將軍賴經の祈願所也

巨福山興國建長禪寺 鶴岡の西北巨福路阪にあり禪宗濟家鎌倉五山の第一寺なり

『佛殿濟田地藏尊』應行の作長壹寸五歩傳云當山いまだ建立あらざる已前地名を地獄谷といふ犯罪の者を刑罰せし趾也北條時賴の代濟田といふ者重科によつて斬罪に及ぶ太刀取二た刀まで打ども更に切れず刀をみれば刄折たり何ゆゑなると問けるに濟田答て我常に地藏尊を信じて身を放さず今もなを髻の內に籠るといふこれを見れば地藏の小像ありて背に刀の痕あり君臣大に歎異して即濟田が科を赦す當寺建立の時これを胸中に籠て又惠心僧都の作り給ふ千躰地藏を頭內に藏め丈六の像を作る又堂內に太常。太元。韋駄天。感應使者。聖德太子。千手觀音。文殊。藥師佛等の像を安ず

『開山塔』佛殿の東にあり達磨像開山大覺禪師の肖像自作乙子童子の像此童子は江島辨天より隨侍の爲に遣され開山生涯の間隨身すといふ桂の杖ありこれは開山宋國より携來り給ふ故に渡海の桂杖といふ

高山

開山塔外門の額 佛光禪師の筆

圓鑑

昭堂の額 開山の筆

西庵

同所中門の額 筆者不詳

『舍利樹』昭堂の前の白槇をいふ開山葬所の煙此樹に觸れて纍々然として皆舍利となる故に名とす此事釋書にも見えたり

『嵩山』開山塔の後山をいふ『兜率嶺』嵩山の峯をいふ

『龍王殿』方丈をいふ釋迦開山蘭溪時賴等の像を安ず

『書院』聽松軒といふ

『蕉碧池』書院庭中の池をいふ『影向松』池の側にあり開山存在の時鶴岡八幡こゝに影向し法話ありし山元享釋書に見えたり其外古梅。糸櫻。奇石。開眼井等あり庭中の風光眞妙にして鎌倉一の芳庭なり

『銅碑』庭中にあり銘あり序文は略す

皇國萬歲。台算千秋。佛日增輝。法輪常轉

元祿第五壬申五月吉日

建長興國禪寺

山門の額 楠一枚板立九尺横六尺宋子曇の筆也此門下にて七月十五日施餓鬼會ありこれを終て後梶原施餓鬼といふ事あり

總門の額 筆者不詳一說に寧一山又は趙子昂ともいふ巨の字の畫中に一點を加ふ時の人これを賞美して此額に點を加へしは百貫の價ありといふこれより世に百貫點と稱す

巨福山

海東法窟

東方外門の額なり側に細書して 崇禎元年十一月日 竹西書

天下禪林

西方外門の額なり側に細書して 崇禎元年十一月日 竹西書

『佛殿梁牌銘』

(左の方)今上皇帝。千佛垂手扶持。諸天至心擁護。長保南山壽。久爲北闕尊。同胡越於一家。通車書於萬國。